

第4章 伊丹郷町出土遺物の分析結果

第1節 伊丹郷町出土の貝類の分析結果

有岡城跡・伊丹郷町遺跡において、多くの貝類が出土している。その中で一番多く出土するのがシジミ類やハマグリなどの二枚貝である。今回その中でマシジミ・ヤマトシジミ・ウチムラサキ・ハマグリなどの4種類の貝類について、貝殻成長線分析を依頼した。貝殻成長線分析とは、貝類が成長するとき、貝の成長に伴って1日1本の割で成長線と呼ばれる線が残されることを利用するものである。貝殻を縦に切断し、その断面を研磨したあと薬品処理し、その表面のレプリカを取って顕微鏡で観察すると、木の年輪のような線が観察できる。この成長線は、季節によって成長する速度が異なる。水温の高い夏は成長度が早く、1本1本の間隔が広い、それに反して、冬は水温が下がるため成長線の間隔が狭くなり区別できない部分が生じることが確認されている。それが冬輪である。一番外側にみられる冬輪から、腹縁部までの成長線の本数を数えると死亡した日が推定される（小池1975年）。

この分析により、貝類がいつ頃採集され、食されたかを推定できる。今回、分析依頼した貝類は、つぎの4種類（シジミ類・ウチムラサキ・ハマグリ）である。出土した地点は、第66次調査Ⅲ区は未報告であるが、それ以外は前回報告した藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』（藤井1997年）に記載されている。なお、分析成果報告に記されている、個数は個々の総数であり、細かいわけは表1に記した。（赤松）

表1 貝類出土遺構一覧表

地区遺構名	貝類	個数	時代
第51次調査D-2区SE301	シジミ類	191個	17世紀後半～18世紀初頭
第66次調査Ⅲ区	シジミ類	326個	19世紀前半
第164次調査岡田家住宅	シジミ類	69個	18世紀後半
第51次調査B-1-1区SK153	ウチムラサキ	23個	明治～昭和
第51次調査B-2-1区SK104	ハマグリ	58個	18世紀後半～19世紀初頭
第51次調査B-2-1区SK106	ハマグリ	11個	18世紀後半～19世紀初頭
第63次調査B-5区SK35	ハマグリ	20個	19世紀中頃～19世紀後半



第151図 貝類出土遺構の調査地点

分析成果報告

件 名：有岡城跡・伊丹郷町遺跡 出土 シジミ、ウチムラサキ、ハマグリ の貝殻成長線分析

個 数：シジミ 517個、 ウチムラサキ23個、 ハマグリ89個

目 的：有岡城跡・伊丹郷町遺跡（江戸時代17～19世紀）出土のシジミ、ウチムラサキ、ハマグリ の貝殻を計測し、さらに正中線に沿って切断し、その断面を生物顕微鏡で観察して成長線を分析し、死亡季節や成長速度の推定、さらに当時の貝採集技術について考察する。

分析経過：送付された資料について、殻長、殻高、殻幅の計測を実施した後、ダイヤモンドディスクを用いて正中線に沿って切断した。この資料を浅い容器に固定し、その上に丸本工業社製の冷間埋込用樹脂を流し込み、樹脂埋込資料とした。さらにそれを単体に切断し、断面を#240、#500、#1000、#1500、#2000、#3000の研磨剤で研磨し、0.1%希塩酸でエッチングし成長線をうかびあがらせた。必要に応じてアリザリンレッドでの着色も行った。さらに、エッチング資料に酢酸メチルで軟化させたバイオデンアセテートフィルムを乗せ、うかびあがった成長線を写し取り、そのフィルムをプレパラート化し、生物顕微鏡で検鏡した。

結 果：出土貝類の大きさは、シジミ科が平均殻高25mm、ハマグリが平均殻高35mm、最大40mm、ウチムラサキは個体数23点のため、大標本法が採用できず、殻高の集計は実施しなかった。分析対象に選択したシジミ科はマシジミとヤマトシジミが含まれていた。一部は貝殻内面が紫色に変化をおこしている状況が観察された。これは、現在の貝殻にもみられる現象であるが、原因はわかっていない。保存の良好な縄文時代貝塚から出土する一部の資料にも観察されることから、公害や環境汚染に依るとは考えにくい。

資料の多くは、縁辺（margin）を失っていたが、その程度が軽微な資料は観察することとして処理を行った。しかしながら、貝殻の紫化が観察されるにも関わらず、貝殻の多くは脱灰が進行しており、良好なエッチング面が得られないものが大多数を占めている。

死亡季節については、詳報に譲るが、シジミ科、ハマグリともに春に捕獲されている固体が多いことが明らかになった。この結果、江戸時代有岡城伊丹郷町遺跡では春を中心として貝類の消費が盛んであったことが明らかになった。

岡山理科大学 理学部 生物化学科
富岡直人

第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土のイヌ遺存体

岡山理科大学大学院修士課程 沖田 絵麻

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の第51次調査D-2区、第4次面SD401から、ほぼ1個体分のイヌ〔ネコ目(食肉目) Carnivora イヌ科 Canidae イヌ *Canis familiaris*〕の遺存体が出土した。この資料の骨格には、切痕(カット・マーク)が残され、意図的に解体されていることが明らかである。本稿では基礎的なデータを報告すると共に、人々からどのような扱いを受けたのかを考察する。

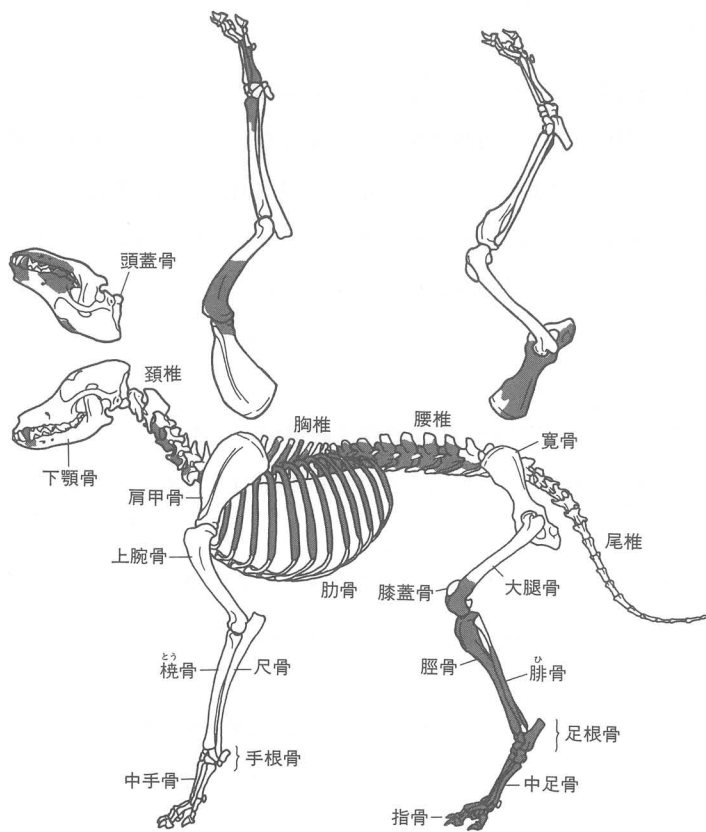
1. 出土状況

本資料は大小の礫、土器の破片が散在する溝SD401に、まとまって検出され、特定の墓壙を持っていない。この溝は城下町の道に沿っており、埋土からは中国製の磁器のほか、国産の陶器、土器類が出土しており、16世紀後半に属すると考えられている。〔伊丹市教委・大手前女子大学史学研究所1997〕。

骨格の表面は褐色～暗褐色を呈し、保存状態は質的には比較的良好であるが、いずれも破損しており、完全形状は失われている。保存処理として、資料の大部分にバラロイドB72を含浸し、補強した。ピビアナイトの析出や、カルシウムの顕著な溶脱などは見られなかった。

なお、イヌとともにネズミ類〔ネズミ目(齧歯目) Rodentia ネズミ科 Muridae 属・種不明〕の骨が出土

した。これは後肢骨2点のみであった。出土した部位が部分的であること、イヌの遺存体にはネズミ類の噛り痕はみられなかったこと、共伴関係が不明確であることから、同時期の遺存体かは不明である。混入の可能性が考えられる。



第152図 イヌ出土部位(トーン部分が出土した部位) 骨格図はR.Nickel et.al 1986より一部改変)

2. 骨格について

骨格は、脊柱、前肢など部分的な単位では、軟部組織によって連結していた時の位置を保っているが、全体としては解剖学的な正位置が失われ、バラバラに出土している。〔前掲、図版55-3〕。これは、埋存の最終過程では、関節が外れていたことを示している。出土部位は頭骨から四肢骨、体幹骨、指骨にいたるほぼ全身の部位が見られる(表2)。しかし全骨格がそろったのではなく、左前肢や尾椎などが欠落する。(第152図)。同定と各部位の大きさの検討から、1個体と考えられる。以上から、①溝の中で腐敗過

程の遺体が移動した、あるいは②解体された状態で埋没した、と考えられる。

脛骨の近位骨端、大腿骨の遠位骨端の化石化が終了していることから、少なくとも生後1.5年以上の成犬であると推定される [DAVIS, S. J. M1987]。性別については、雄が持つ陰茎骨（ペニスボーン）が検出されていないため、雌の可能性も考えられる。

以下、部位ごとに観察、計測結果をまとめる。なお骨格の計測は斎藤弘吉 [斎藤1963] および茂原信生 [茂原1987] にならっておこない、計測値は表3に示した。

<頭蓋骨>

前頭骨、側頭骨、上顎骨、切歯骨の破片が出土している。右上顎歯は第4小臼歯と第1大白歯頰側が残存し、第1大白歯舌側と第2大白歯は歯冠を欠き、第3小臼歯は歯根のみ残存し、左右の犬歯は遊離している。それ以外の歯は失われているが、残存する歯槽に閉鎖したものは見られない。いずれの歯も咬耗は弱く、象牙質が露呈していない（註1）。

中世のイヌはそれ以前のイヌより大型化している一方、形態はやや虚弱化し、歯や四肢の頑丈さが低下する傾向があることが茂原によって指摘されており [茂原1989、茂原1991]、当資料もこの特徴を示すものの、上顎歯についてはこの傾向を外れている。大白歯長は、奈良県唐古・鍵遺跡（弥生時代）や和歌山県西の荘遺跡（古墳時代）出土のイヌよりも小さい。が、同じ中世に属する鎌倉材木座出土イヌは平均15.05mm（N=16）であり [茂原1986]、当資料は比較的大きいと言える。また、他の弥生時代以降の遺跡から出土したイヌで、長谷部言人による古代イヌの体格分類 [長谷部1952]（註2）の中小級に相当するものと比較すると、当資料は第4小臼歯の長さ（近遠径）が小さい一方で、幅（頰舌径）は上回り、太短い歯であると言える。

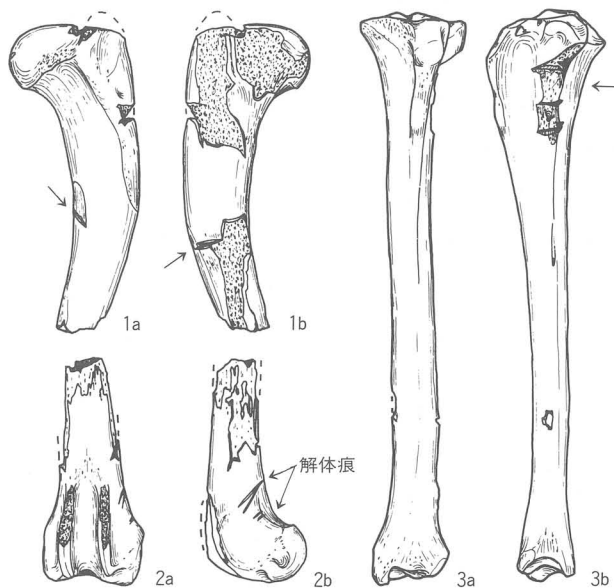
<下顎骨>

左右骨体の破片が出土している。No.29の右下顎骨は第1切歯から第1大白歯までの部分であり、歯は第3切歯、第2小臼歯、第3小臼歯、第4小臼歯、第1大白歯が残存する。その他の歯は失われているが歯槽は閉鎖していない。このうち第3切歯は咬耗が象牙質に及んでいるが、その他の歯はエナメル質にとどまっている。下顎歯には上顎歯のように太短い特徴は見られない。第1大白歯頰舌径（最大）は、これまで知られている中世イヌの範囲内であるが、比較的小さいほうである。

<主要四肢骨>

右肩甲骨、右上腕骨、右橈骨、左寛骨、左大腿骨、左右脛骨、左腓骨が出土している。No.03左脛骨の全長をもとに、山内忠平の体高推定法Ⅲ式 [山内1958] によって算出した体高は43.0cmである。これは現在の関東柴犬 [西本1983] よりもやや大きい値である。長谷部による分類では、中級に相当する。中世のイヌには中級～中大級が多いことが判明しており [茂原・小野寺1987]、当資料は当時の平均的な大きさである。

骨の表面には筋肉が付着する稜線や粗面といった凹凸があり、筋肉が発達しているほど



1. 右上腕骨 2. 左大腿骨 3. 左脛骨

第153図 解体痕のある骨

凹凸も発達する。当資料では、最も残りの良い脛骨は全体的に凹凸が少なく、のっぺりした印象をうける。これ以外の骨は破片であるが、いずれも凹凸が少なく、筋肉の発達が比較的弱かったと考えられる。縄文時代のイヌのように筋肉の発達したイヌに比べると、やや華奢であったのだろう。

〈その他の骨〉

この他、頸椎、胸椎、腰椎、肋骨、手根・足根骨、中手・中足骨、指骨が出土している。脊椎骨は前端に位置する環椎・軸椎と、後端に位置する仙骨・尾椎を欠くが、その間はほぼそろっている。肋骨はすべて破片であるが、多量に出土しているため、ほぼ1個体分と考えられる。中手骨は右のみ、足根骨・中足骨は左のみが出土している。指骨は左中足骨に隣接して出土しているため、左後肢のものである可能性が高い。

〈解体痕〉

80点の骨のうち4点に切痕がみられた(第153図)。いずれも鋭利な刃物による切痕である。また、切痕の残る箇所が必ずしも筋肉や腱の付着部分ではない場合でも、骨から肉をそぐ時の傷である可能性があるため、解体痕(カットマーク)と考えた。

No.06の右上腕骨は、骨体尾側面の3カ所に浅い切痕が見られる。切痕に接して剥離面が観察されるので、骨表面を削るように斜めの角度で切り込まれたものであろう。No.01の右寛骨は、大坐骨切痕に長さ4.5mm程度の浅い傷が2条並んで残っている。No.07の左大腿骨遠位端部は、外側顆上粗面付近に2カ所の切痕が残る。上位の傷は長さ7～8mm、下位の傷は長さ4mm程度であり、どちらも2条ずつの浅い傷である。No.03の左脛骨は、近位端外側面に、少なくとも4回切り込んだ痕が残る。これは他の部位にみられる切痕と異なり、骨がえぐれるほどに力を入れて切り込んでいる。

3. まとめ

このイヌは、解体・利用の後に投棄されたものである。肉量の多い部位に解体痕が見られることから、食用に供された可能性が高い。脛骨・腓骨・橈骨の保存の良さに比べて、上腕骨・大腿骨が破損し部分的にしか残存していないことは、解体・調理・消費時に受けるダメージの違いによる可能性が考えられ、その理由として後者は付着する肉量が多いことが挙げられる。脛骨には近位端部にしか解体痕が認められず、左は足根・中足・指骨が連続した状態で出土した。このことは大腿骨から切り離した後、膝関節より下部は肉を利用しないまま投棄された可能性を示している。先述のように、脛骨近位端部の解体痕の種類が、上腕骨・大腿骨にみられるそれと違っていることも、部位により扱い方が異なっていた裏付けになろう。なお、当資料は直接火を受けた痕跡が見られないため、草戸千軒町遺跡から出土した大部分のイヌのように、煮るという調理法〔茂原・松井1995〕、あるいは肉を切り取って「かひやき」、「吸い物」(註3)等の調理法がとられた可能性もある。また、同時にとることのできた皮革類も利用されていた可能性が考えられる。

当資料のように、部分的な骨を欠くイヌ1個体分の骨格が、解剖学的位置を保たずに出土した例としては、大阪府堺市の北花田口遺跡が挙げられる。この遺跡からは、土壇内から後半身を欠くイヌが出土している〔堺市教育委員会1990〕。このイヌは「南蛮由来のハウンド系の犬種であった可能性が非常に強い」〔山内・嶋谷1990〕とされており、飼い犬であったことも考えられる。しかし共伴した唐津碗が破片であり副葬品とは考えにくいことに加えて、解剖学的位置を保たずに出土していることから、埋葬されたものではない。骨表面の切痕の有無については報告されておらず、どのような扱いを受けたものかは推測の域を出ない。あるいは、前半身だけが土壇へ投棄された可能性が考えられる。

このように、ある程度まとまった骨格の出土は、当時のイヌの扱われ方を探る上で貴重な資料となる。こ

れまで報告された、中・近世のイヌがまとまって出土する例としては、①埋葬された例（日置荘西町遺跡、堺環濠都市遺跡、真砂遺跡、東京大学本郷構内遺跡、吉母浜遺跡、住友銅吹所跡イヌ2など）、②切痕をもつ複数個体の部位骨がまとまって出土する例（草戸千軒町遺跡、鎌倉材木座遺跡など）、そして③埋葬ではないが、1個体の骨格がまとまって出土する例（当資料、北花田口遺跡、住友銅吹所跡イヌ1など）などが知られている。1個体がまとまって出土する①と③を区別するには、扱われ方の違い、すなわち骨格の出土状況や骨表面の切痕の有無、火烧痕の有無などといった、骨自体の観察が不可欠である。

謝 辞

この稿を執筆するにあたり、岡山理科大学理学部の富岡直人先生に終始ご指導を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 歯は層状の構造を持っており、歯冠の最も外側をエナメル質、その内側を象牙質、その内側を歯髓（腔）と呼ぶ。
- 2) 長谷部の分類基準はヨーロッパの古代犬の分類基準を基にしているため、必ずしも日本のイヌに当てはまるものではない。
- 3) 17世紀の料理書である『料理物語』には、イヌの料理法として「吸い物」と「かひやき」が紹介されている。塚本 学（1983）は、「かひやき」とは貝焼き、つまりアワビやホタテガイの貝殻に肉を入れて焼く調理法であると考えている。

参考・引用文献

- 伊丹市教委・大手前女子大学史学研究所 1997『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』
- 久保和士 1998「住友銅吹所跡出土の動物遺体」『住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人 大阪市文化財協会：pp.339-377
- 斎藤弘吉 1963『犬科動物骨格計測法』私家版
- 堺市教委 1984『堺環濠都市遺跡発掘調査報告 宿院町東4丁S K T 14地点・調御寺跡』
- 堺市教委 1984『日置荘西町遺跡発掘調査報告 市立日置荘小学校プール用地内』
- 堺市教委 1990『堺市文化財調査概要報告第5冊 北花田口遺跡発掘調査概要報告』
- 茂原信生 1986『東大総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』
- 茂原信生 1989「古代日本犬の形態変化」『考古学ジャーナル303』：pp.22-27
- 茂原信生 1991「日本イヌに見られる時代的形態変化」『国立歴史民俗博物館研究報告29』：pp.89-101
- 茂原信生・小野寺 覚 1987「鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨」『人類学雑誌 95-3』：pp.361-379
- 茂原信生・松井 章 1995「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ-南部地域北半部の調査-』：pp.289-312
- 下関市教委 1985『吉母浜遺跡』
- 塚本 学 1983『生類をめぐる政治 元禄のフォークロア』平凡社
- 西本豊弘 1983「イヌ」『縄文文化の研究 2 生業』雄山閣：pp.161-170
- 長谷部言人 1952「犬骨」文化庁『吉胡貝塚』：pp.146-150
- 松井 章 1988「中世『犬肉食用考』生ゴミからみた草戸千軒町遺跡（3）」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒 183』：pp.6（46）-7（47）
- 山内昭二・嶋谷和彦 1990「堺市北花田口遺跡（KHG 2地点）出土の犬骨について」堺市教委『堺市文化財調査概要報告第5冊 北花田口遺跡発掘調査概要報告』：pp.82-83

- 山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告書第7号』：pp.125-131
- 和栗秀一・醍醐正之ほか訳『犬の解剖学』学窓社（原著：MILLER, M. E., 1964 *Anatomy of the Dog*, W. B. Saunders Company)
- DAVIS, S. J. M, 1987 *The Archaeology of Animals*, B. T. Batsford Ltd, London : P 40
- R. NICKEL, A. SCHUMMER, E. SEIFERLE, H. WILKENS, K-H. WILLE, J. FREWEIN, 1986 *The Anatomy of the Domestic Animals, Volume 1, the Locomotor System of the Domestic Animals*, Verlag Paul Parey : p.20, Fig.22

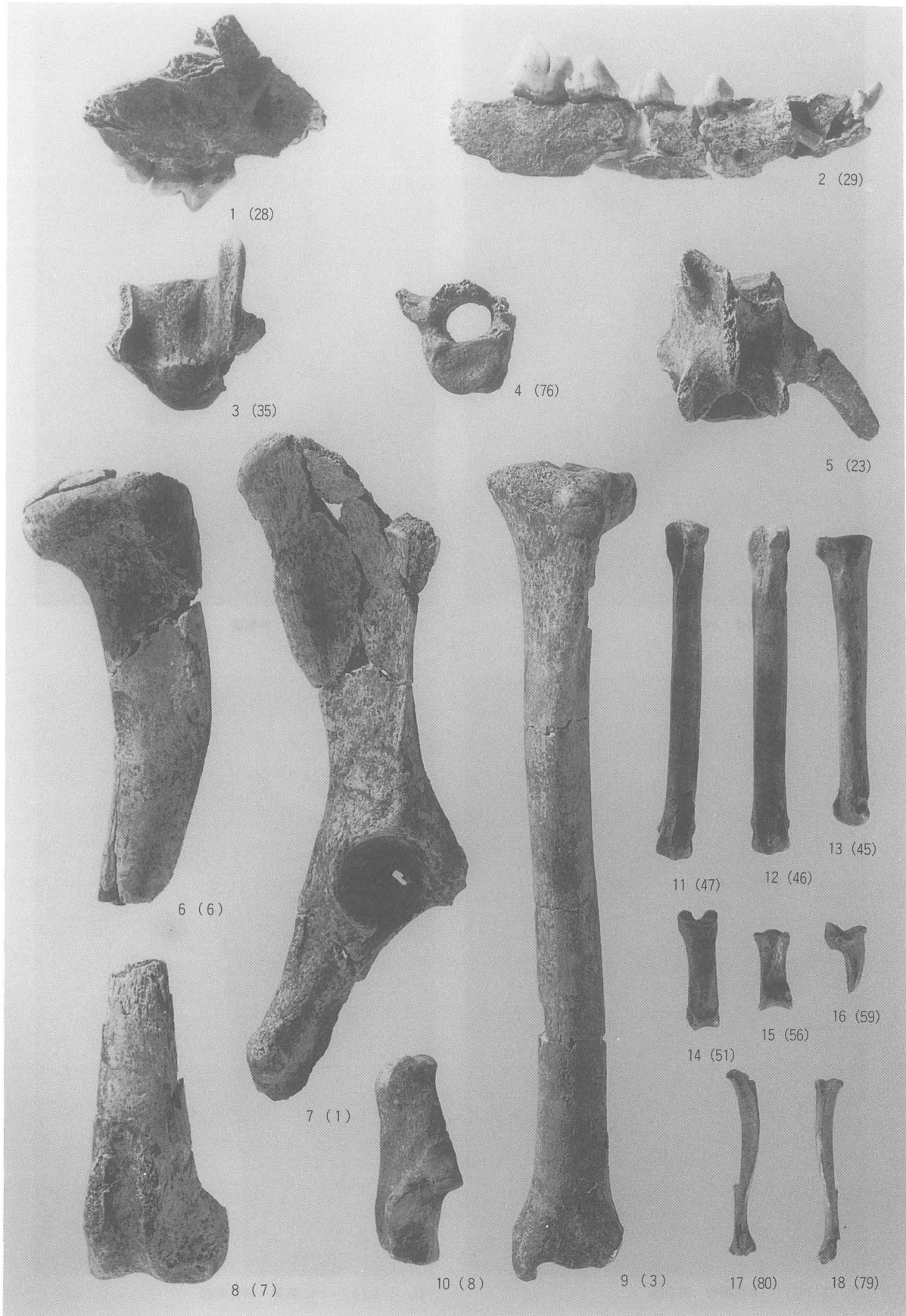
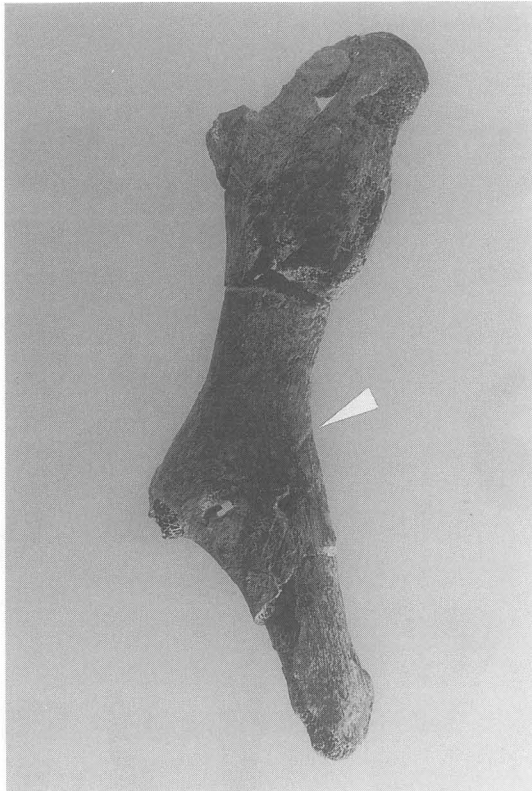
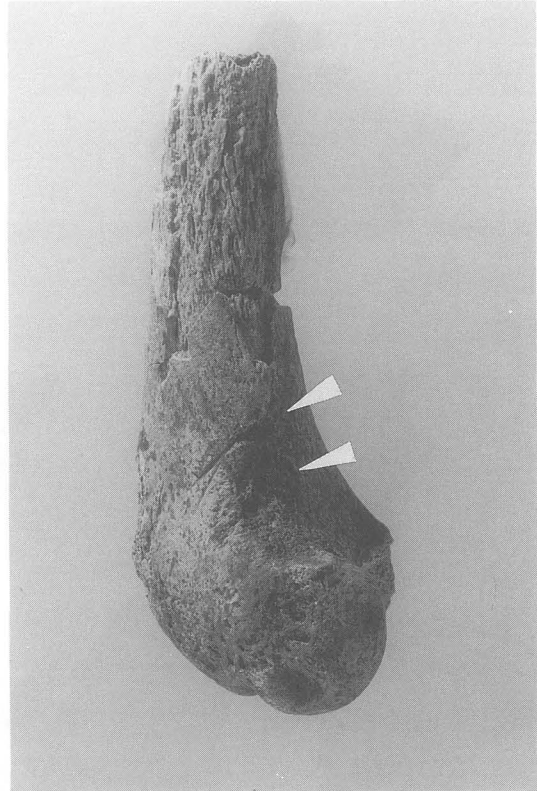


写真1 イヌ遺存体ほか

1. 頭蓋骨 2. 右下顎骨 3. 頸椎 4. 胸椎 5. 腰椎 6. 右上腕骨 7. 右寛骨 8. 左大腿骨 9. 左脛骨 10. 左踵骨
 11. 左第4中足骨 12. 左第3中足骨 13. 左第2中足骨 14. 基節骨 15. 中節骨 16. 末節骨 17. ネズミ類右脛骨 18. ネズミ類左脛骨
 ()の数字は表2に対応する



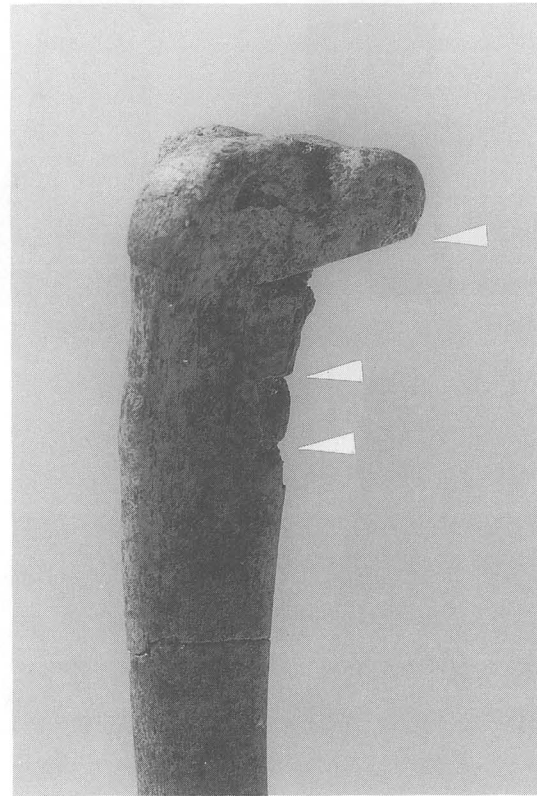
1. 1 (1) 右寛骨 内側面



2. 2 (7) 左大腿骨 外側面

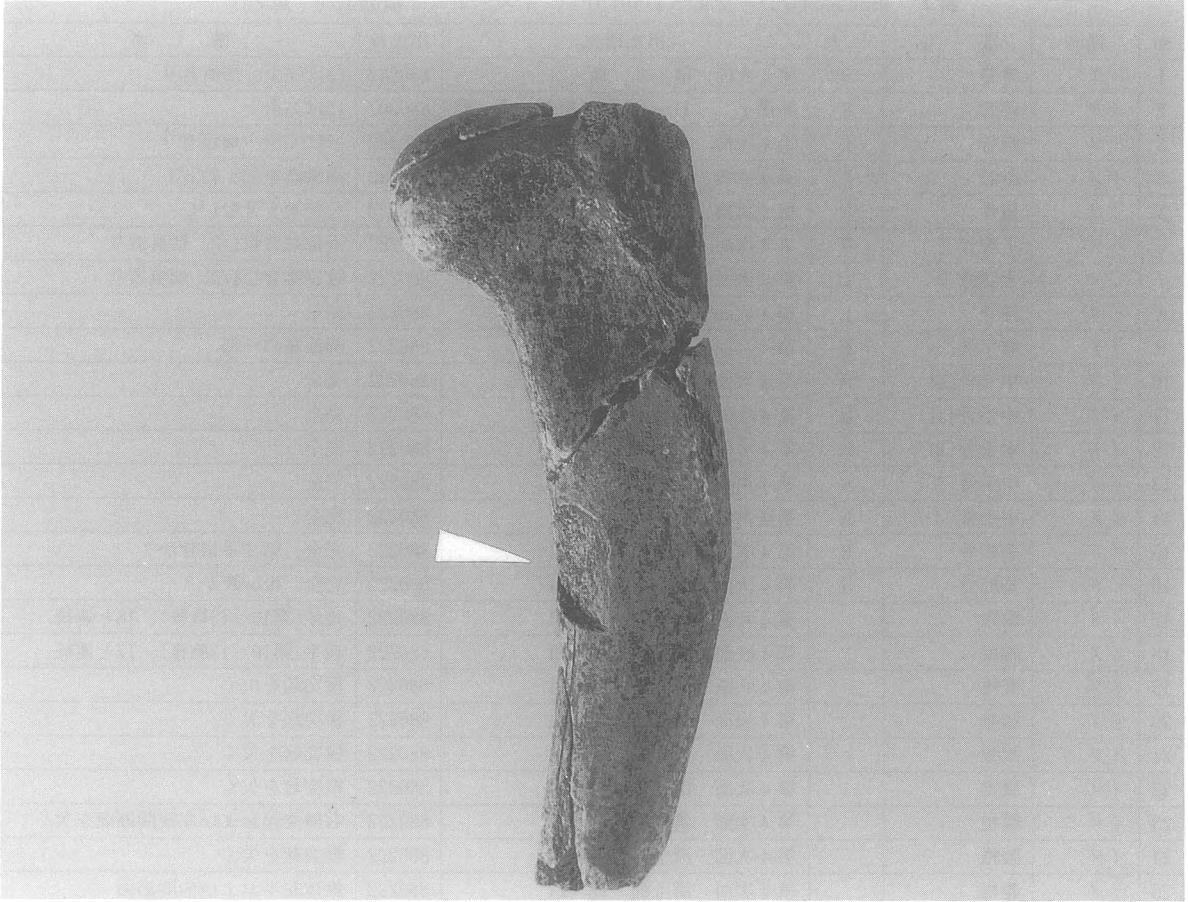


3. 3 (3) -a 左脛骨 外側面



4. 3 (3) -b 左脛骨 頭外側面

写真2 解体痕のある骨



右上腕骨 外面

写真3 解体痕ある骨

表2 第51次調査D-2区S D401出土 イヌ・ネズミ類部位別一覧表(1)

No.	種名	部 位	L/R	出土地点			出土日	備 考
1	イヌ	寛骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	ほぼ完全、切痕有り
2	イヌ	脛骨	R	断面1	S D-401	下層部 自-33	880307	ほぼ完全
3	イヌ	脛骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	ほぼ完全、切痕有り
4	イヌ	腓骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	両骨端を欠く約2/3
5	イヌ	橈骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	遠位端を含む1/4
6	イヌ	上腕骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	近位端含む1/3、切痕有り
7	イヌ	大腿骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	遠位端含む1/3、切痕有り
8	イヌ	踵骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
9	イヌ	肩甲骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	関節窩の一部
10	イヌ	中手骨(Ⅳ)	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
11	イヌ	中手骨(Ⅱ)	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
12	イヌ	中手骨(Ⅲ)	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
13	イヌ	中手骨(Ⅴ)	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
14	イヌ	中手骨(Ⅰ)	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
15	イヌ	手根骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、第2手根骨か?
16	イヌ	基節骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、ⅢorⅣか?
17	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	後半(第10~13胸椎)、18と連続
18	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	後半(第10~13胸椎)、17と連続
19	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	横突起を欠く
20	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	横突起を欠く
21	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	横突起を欠く
22	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	横突起を欠く
23	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	右横突起および左後関節面を欠く
24	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	横突起を欠く
25	イヌ	腰椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	椎体左半および前関節面
26	イヌ	距骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
27	イヌ	手根骨/足根	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	第1足根骨か?
28	イヌ	頭蓋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片複数
29	イヌ	下顎骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	骨体破片、13・P2・P3・P4・M1 残存
30	イヌ	下顎骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	骨体破片
31	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	肋骨類
32	イヌ	上顎犬歯	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
33	イヌ	上顎犬歯	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
34	イヌ	腓骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	左右不明小破片
35	イヌ	頸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
36	イヌ	頸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
37	イヌ	頸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
38	イヌ	頸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
39	イヌ	頸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
40	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	体部破片
41	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	体部破片
42	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	体部破片
43	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	体部破片
44	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	体部破片
45	イヌ	中足骨(Ⅱ)	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
46	イヌ	中足骨(Ⅲ)	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
47	イヌ	中足骨(Ⅳ)	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全
48	イヌ	中心足根骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、最大高径7.55mm
49	イヌ	第3足根骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、最大高径8.50mm
50	イヌ	第4足根骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、最大高径13.90mm
51	イヌ	基節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?

表2 第51次調査D-2区SD401出土 イヌ・ネズミ類部位別一覧表(2)

No.	種名	部 位	L/R	出土地点			出土日	備 考
52	イヌ	基節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
53	イヌ	基節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
54	イヌ	基節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
55	イヌ	基節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
56	イヌ	中節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
57	イヌ	中節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
58	イヌ	中節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
59	イヌ	末節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
60	イヌ	末節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
61	イヌ	末節骨	?	第4次面	溝上面	他-21	880222	完全、45~50と一連の左後肢か?
62	イヌ	頭蓋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	破片
63	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
64	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
65	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
66	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
67	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
68	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
69	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
70	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
71	イヌ	肋骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	頭部~頰の残る破片
72	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	棘突起破片
73	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	棘突起破片
74	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	棘突起破片
75	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	棘突起破片
76	イヌ	胸椎		第4次面	溝上面	他-21	880222	棘突起と後関節突起を欠く
77	イヌ	椎骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	小破片
78	イヌ	椎骨		第4次面	溝上面	他-21	880222	小破片
79	ネズミ類	脛骨	L	第4次面	溝上面	他-21	880222	ほぼ完全(ハツカより大、ドブより小)
80	ネズミ類	脛骨	R	第4次面	溝上面	他-21	880222	ほぼ完全(ハツカより大、ドブより小)

表3 有岡城跡・伊丹郷町イヌ骨格計測値

計測項目(計測点)	L	R	計測項目(計測点)	L	R
上顎歯 P 4 (m-d, max)		16.85	脛骨 全長(1-2)	151.74	*150.3
P 4 (m-d, lat)		16.90	上端最大幅(8-9)	28.55	28.80
P 4 (b-1)		9.35	上端矢状径(6-7)	30.95	27.70
大白歯長		15.55	中央横径(13-14)	11.65	
下顎歯 I 3 (m-d)		5.15	中央矢状径(11-12)	11.00	*10.3
P 2 (m-d)		7.60	下端最大幅(15-16)	20.95	20.55
P 2 (b-1)		4.40	下端最大矢状径(17-18)	14.45	
P 3 (m-d)		8.95	中央断面示数	94.42	
P 3 (b-1)		4.65	中央項丈示数	7.68	
P 4 (m-d)		10.35	腓骨 中央幅(6-7)	4.00	
P 4 (b-1)		5.80	中央厚(8-)	2.45	
M 1 (m-d, max)		7.55	寛骨 腸骨長(3-1)		76.1+
小白歯長		34.90	腸骨最大幅(7-8)		*39.2+
上腕骨 中央最大幅		13.20	腸骨最小幅(13-14)		16.55
橈骨 下端最大幅(15-16)		21.70	腸骨厚(15-)		8.00
下端最大矢状径(17-18)		10.25±	寛骨臼最大長		19.30
大腿骨 下端最大幅(17-18)	26.60		座骨長(4-6)		38.20
頰間窩矢状径(30-31)	18.00				

単位はmm *は復元値を表す
()内の数字は斎藤1963による計測値を示す

第3節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区から出土した埋甕に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野 益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野 寛子・長田 正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと(1)、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子(2)、約5千年前のハーゼルナッツ種子(3)に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した(4)。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪

分析法」を用いて有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区から出土した埋甕の性格を解明しようとした。

1. 土器付着物および 土壌試料

兵庫県伊丹市に所在する有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区の土壌SK186から出土した丹波焼甕内のゼリー状物質と土壌試料を分析した。埋甕が出土したこの地区の第2遺構面は、江戸時代後期、特に19世紀前半を中心とするものと推定されている。この第2遺構



第154図 第51次調査B-1-1区第2次面

面での土壌の配置状況を第154図に示す。試料No. 1は甕の土器片に付着していたゼリー状の粘着性のある物質で、No. 2は同じ土器片上でNo. 1のゼリー状物質に混ざっていた土壌のうち、ゼリー状物質が全く付着していない土壌のみである。

表 4 試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器付着物	2.8	2596.9	94.0906
2	土器周辺土壌	251.2	1507.8	0.6004

2. 残存脂肪の抽出

土器付着物試料 3 g と土壌試料 251 g に、付着物試料については試料が十分浸漬する量、土壌試料については 3 倍量のクロロホルム—メタノール (2 : 1) 混液を加え、超音波浴槽中で 30 分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム—メタノール混液を加え、再び 30 分間超音波処理をする。この操作をさらに 2 回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に 1 % 塩化バリウムを全抽出溶媒の 4 分の 1 容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表 4 に示す。付着物試料 No. 1 の抽出率は 94.0906 % であることから、付着物試料が脂溶性物質であることがわかる。土壌試料 No. 2 の抽出率は 0.6004 % であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率 0.0010 ~ 0.0100 % に比べ非常に高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール (トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

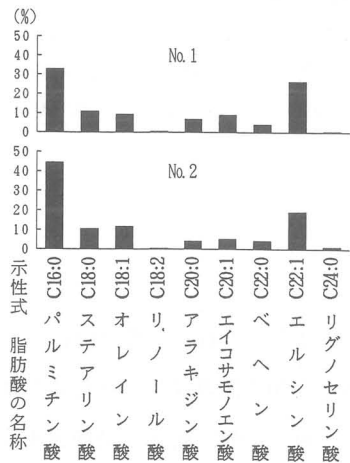
3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに 5 % メタノール性塩酸を加え、125 °C 封管中で 2 時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン—エチルエーテル—酢酸 (80 : 30 : 1) またはヘキサン—エーテル (85 : 15) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した(5)。

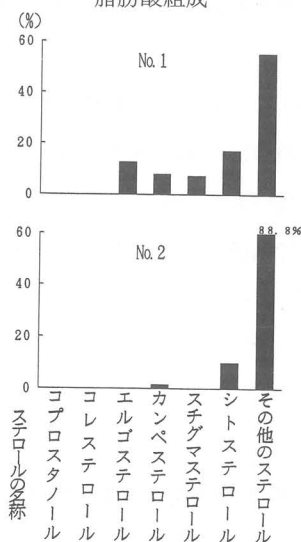
残存脂肪の脂肪酸組成を第155図に示す。残存脂肪から 9 種類の脂肪酸を検出した。これらパルミチン酸 (C16 : 0)、ステアリン酸 (C18 : 0)、オレイン酸 (C18 : 1)、リノール酸 (C18 : 2)、アラキジン酸 (C20 : 0)、エイコサモノエン酸 (C20 : 1)、ベヘン酸 (C22 : 0)、エルシン酸 (C22 : 1)、リグノセリン酸 (C24 : 0) をガスクロマトグラフィー—質量分析により同定した。

2 試料中の脂肪酸組成パターンを見ると、ほぼ同一のパターンであった。このうち炭素数 18 までの中級脂肪酸の中ではパルミチン酸が最も多く、次いでステアリン酸とオレイン酸が同程度分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している(6)。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数 20 以上のア



第155図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第156図 試料中に残存する脂肪のステロール組成

ラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No.1で約11%、No.2で約9%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸3つの合計含有率は約4~10%であるから、2試料中での高級飽和脂肪酸含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。他に、炭素数20以上の高級脂肪酸の中では高級不飽和脂肪酸のエルシン酸が試料No.1に約26%、No.2に約19%と、他の高級脂肪酸に比べ突出して多く分布していた。エルシン酸は古代のナタネ油やダイコン、カラシナ等のアブラナ科植物の種子油に特異的に分布している脂肪酸である(6)。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、有岡城・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区の埋蔵試料中の脂肪酸組成パターンは付着物試料No.1と土壌試料No.2がほぼ同一で、主要な脂肪酸はパルミチン酸であることがわかった。高級飽和脂肪酸は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みにしか含まれていなかったが、高級不飽和脂肪酸であるエルシン酸は非常に多く含まれていることもわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン—エチルエーテル—酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン—無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第156図に示す。残存脂肪から12~14種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー—質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは2試料共に検出されなかった。

植物由来のシトステロールは試料No.1に約17%、No.2に約10%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、2試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中よりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが試料No.1に約8%、No.2に約1%、スチグマステロールがNo.1に約7%、No.2に痕跡程度分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、2試料中での

カンペステロール、スチグマステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料No.1に約13%、No.2に痕跡程度に分布していた。エルゴス

テロールは通常の遺跡出土土壌中で一般的な土壌微生物が存在している程度の場合には数%分布し、人為的に酵母等の微生物が添加された場合には10%以上分布している(7)。従って、試料No.1のエルゴステロール含有量はかなり多く、自然醗酵か人為的な醗酵かは不明であるが、試料中で微生物が何らかの条件下で増殖醗酵した可能性が考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、2試料共に検出されなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上(8)、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる(9, 10)。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表4に示す。今回は試料からコレステロールが検出されなかったために、コレステロールとシトステロールの分布比は算出できなかった。コレステロール、コプロスタノールが検出されないということは、試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していないことを示唆している。

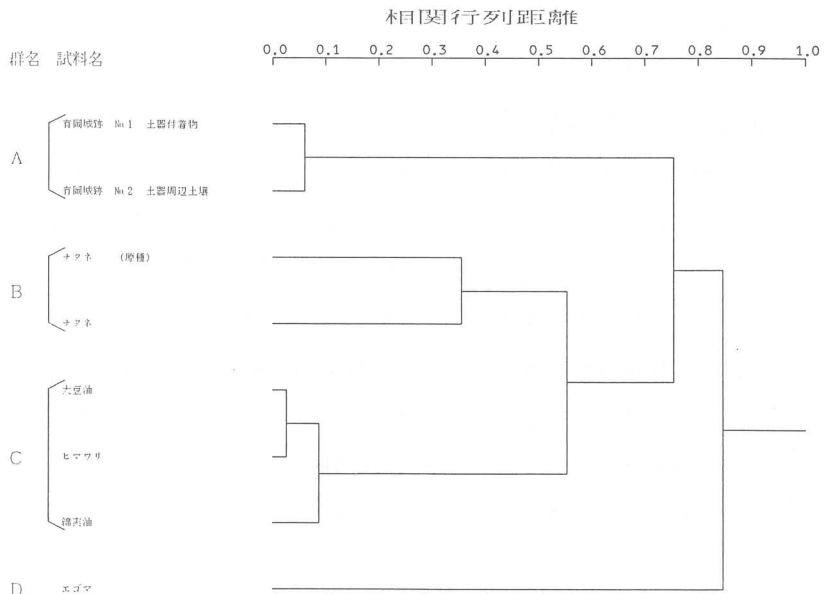
以上、有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区の埋蔵試料に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールとコプロスタノールが全く検出されず、付着物試料No.1には、微生物由来のエルゴステロールがかなり多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめにしか含まれていないことがわかった。コレステロールとコプロスタノールの分布比は、試料からコレステロールが検出されなかったために、算出できなかった。コレステロール、コプロスタノールが検出されないということは、試料中に動物由来の脂肪が残存していないことを示唆している。従って、試料中に存在していた高級脂肪酸は、すべて植物体のワックス構成成分に由来すると推定された。

5. 脂肪酸組成の数理解析

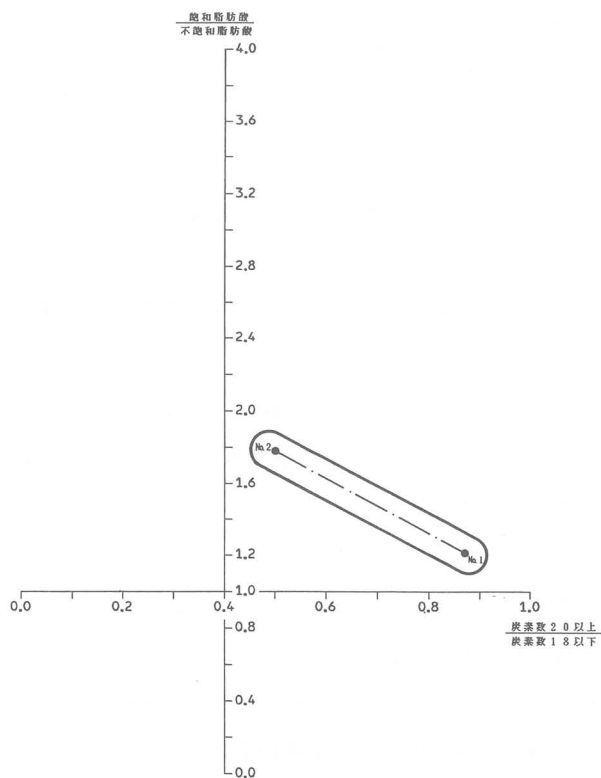
残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、ナタネ油、大豆油、ヒマワリ油、綿実油、エゴマ油など現生試料の脂肪酸との類似度も比較した。今回は試料中に動物性脂肪が含まれておらず、脂肪酸分析でアブラナ科植物に特異的に分布するエルシン酸がかなり多く含まれていたことと、試料が脂溶性の形状をしていることから植物油を比較対照試料として選び出した。予め植物油のデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分

表5 試料中に分布するコレステロールとシトステロール割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール / シトステロール
1	—	17.08	0
2	—	9.83	0



第157図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第158図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出して、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第157図である。

図からわかるように、有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区の試料中に残存する脂肪と相関行列距離的に近い所に他の対照試料はなかった。従って、クラスター分析では試料中に残存する脂肪と類似の脂肪を特定することはできなかった。

6. 脂肪酸組成による種特异性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特异性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を第158図に示す。図からわかるように、試料No.1とNo.2は第1象限内の比較的原点に近い位置に分布した。この分布位置は動物油に近いことを示している。しかし、動物性コレステロールが全く検出されないことから、長期の保存中に試料中の脂溶性成分は、その中の脂肪酸の酸化還元が進み飽和化されて、このような位置に分布したものと推測される。

試料の残存脂肪から求めた相関図を第158図に示す。図からわかるように、試料No.1とNo.2は第1象限内の比較的原点に近い位置に分布した。この分布位置は動物油に近いことを示している。しかし、動物性コレステロールが全く検出されないことから、長期の保存中に試料中の脂溶性成分は、その中の脂肪酸の酸化還元が進み飽和化されて、このような位置に分布したものと推測される。

7. 総括

有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区から出土した埋甕の性格を判定するために、埋甕の土器片に付着したゼリー状物質と土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析でエルシン酸が多く分布し、ステロール分析でコレステロールが分布しないことから、付着物試料に残存する脂肪はナタネ油の脂肪と類似していることがわかった。脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果では、有岡城跡・伊丹郷町遺跡宮ノ前地区の埋甕試料はナタネ油と特に相関行列距離的に近い所にはなく、また有岡城跡・伊丹郷遺跡町宮ノ前地区の試料と相関行列距離的に近い所にある対照試料の植物油もなかった。これは発掘後9年間室温に置かれたため、その間に酸化還元されて硬化し、ゼリー状になって、脂肪酸の変性が進んだためと推測される。しかし、脂肪酸分析でアブラナ科植物に特異的に分布するエルシン酸がかなり多く残存していたことを考えると、付着物はナタネ油である可能性が推定される。

参考文献

- 1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- 2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.
- 4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻 (6), 1984, pp124.
- 5) M. Nakano and W. Fischer : 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem』, 358巻, 1977, pp1439.
- 6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 眞編, クバプロ, 1995, pp148.
- 7) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 中岡利泰, 根岸 孝 : 「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境—とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定 (第7報)」, 『日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨』, 1987, pp15.
- 8) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教博, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- 9) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡—農村基盤総合整備事業能東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- 10) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「へロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『へロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.

第5章 結 語

第1節 調査区域の遺構の変遷について

1 時期区分について

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分については、既往の調査の積み重ねによって、冒頭に記したように以下のように考えている。

I期 中世の在地武士伊丹氏の伊丹城の時期（～天正二年・1574年）

II期 近世移行期の戦国大名荒木村重の有岡城の時期および池田之助の第2期伊丹城の時代（天正二年・1574年～天正十一年・1583年）

III期 近世在郷町の伊丹郷町の時期（天正十一年・1583年～明治中頃）

IV期 近代（明治中頃以降）

さらに、このうちIII期については、以下のように細分している。

図中の表示

III-1期	16世紀末～17世紀中頃……………		その他……………	
a	16世紀末～17世紀初頭……………			
b	17世紀前半～17世紀中頃……………			
III-2期	17世紀後半～18世紀後半……………			
a	17世紀後半～18世紀初頭……………			
b	18世紀前半～18世紀後半……………			
III-3期	18世紀後半～19世紀後半……………			
a	18世紀後半～19世紀初頭……………			
b	19世紀前半～19世紀後半……………			

今回も、これに基づいて、各調査区の出土遺物の時期を基準とした遺構の変遷図を作成した。

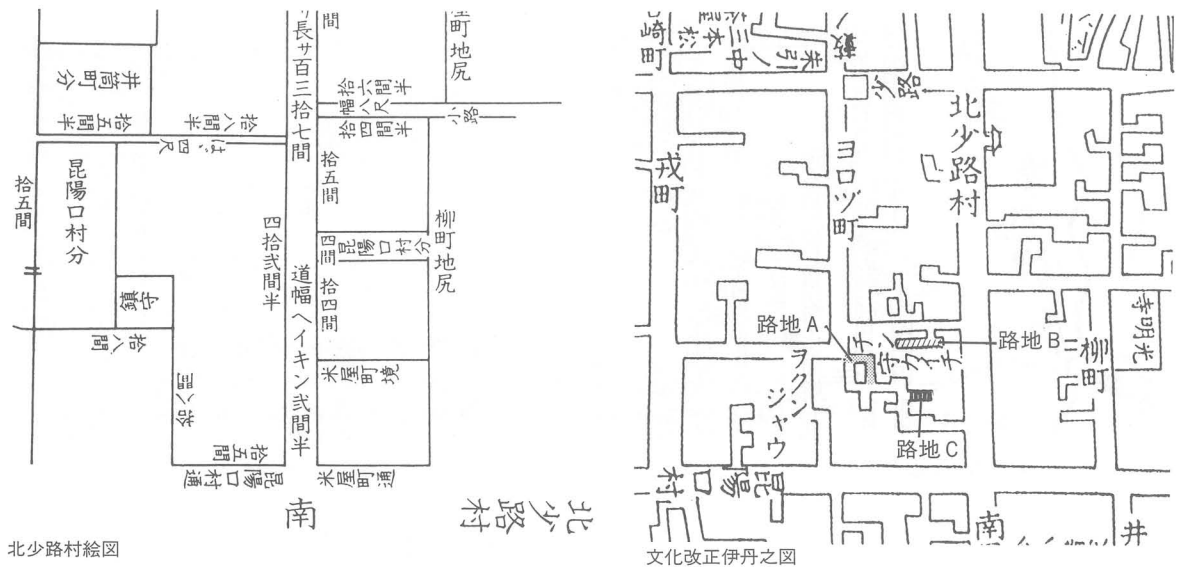
2 各調査区の遺構の変遷について

(1) 第51次調査B-1-2区・B-1-3区、第63次調査B-6区、第78次調査B-7区、第86次調査B-11-1区・B-11-2区

これらの調査区は、猪名野神社参道の西側で、参道から万町に延びる東西方向の小道に面した北側区域である。ここは、江戸時代の北少路村の区域内になる。

もっとも古い遺構は、先に報告した（藤井他1997年）第51次調査B-1-1区で検出した7世紀後半～8世紀前半の掘立柱建物S B13の続きのB-6区S B05がある。南北軸をほぼ磁北に向けており、柱穴から当該期の遺物は出土しなかったが、この頃の建物として良いであろう。同時期の掘立柱建物が南東に約70m離れた1997年度第199次調査（未報告）で数棟検出されており、このあたり一帯にこの頃の集落があったことがわかった。

I期の伊丹城期（～天正二年・1574年）（第161図）では、B-11-1区S D08、B-1-3区S D05がある。これは、小道を越えて南の第51次調査B-3区S D06に続き、ここで終わる。幅は北に行くほど狭まり、



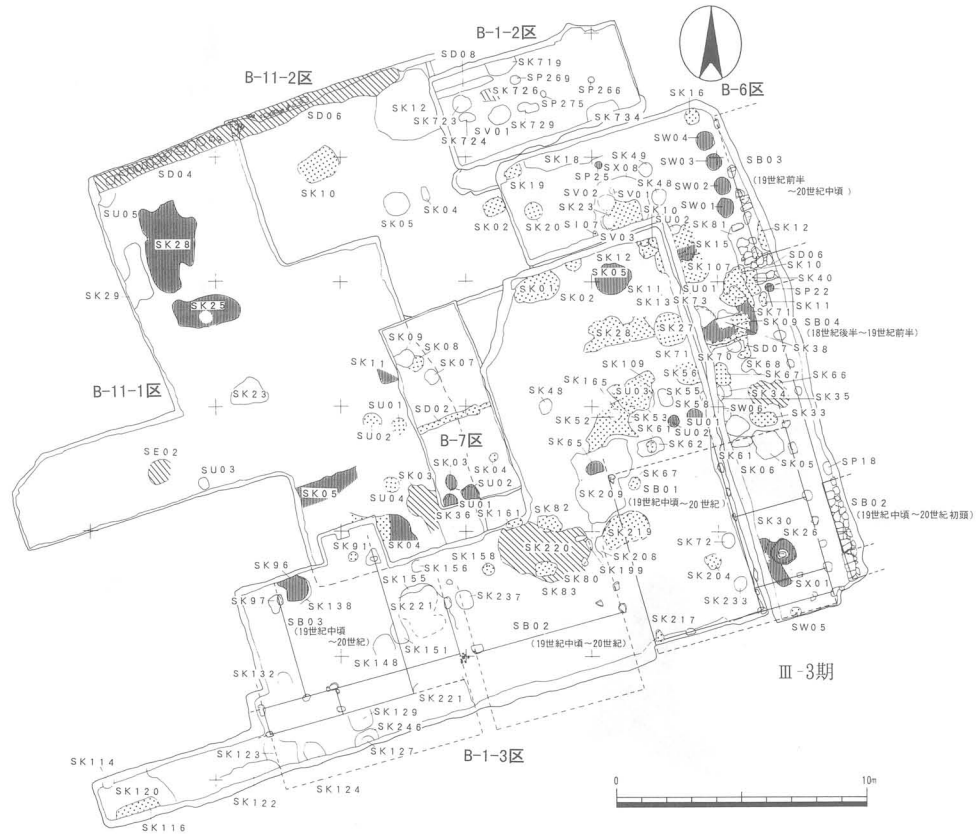
第160図 伊丹郷町古絵図(二) (八木哲浩1982年)

B-11-1区SD08北端で3.4m程度である。ゆるやかな傾斜を持ち、深さは0.25m~0.5mと、さほど深くない。流下方向は北から南である。これ以外にI期の遺構はない。用途は判然としないが、耕作地に伴う農業用水路であろうか。埋没時期はII期有岡城期にかかるが、B-3区で後述するB-11-1区SD07に続く溝SD08と直角に交わるSD07に切られており、B-11-1区SD07が掘削される段階では、埋まっていたと考えられる。

II期有岡城期(天正二年・1574年~天正十一年・1585年)(第161図)の遺構としては、B-11-1区SD07、B-6区SE02、B-1-3区SK242がある。SD07は、北は1996年度第167次調査B-16区SD100(未報告)に続き、南は第51次調査B-3区SD08、B-2-2区SD15を経て、第78次調査B-8区SD04に続き、1997年度第199次調査B-17-1区SD701(未報告)に至る。また、この溝と対になる溝を1992年第117次調査A-6区(未報告)で検出しており、有岡城期の道路に伴う側溝と考えられる。部分的に江戸時代に再利用され、B-11-1区SD07、B-8区SD04、B-2-2区SD15は、共に17世紀後半頃に廃絶している。ところで、このSD07と、背割線を挟んでこの街区の東側の猪名野神社参道の東側側溝との距離は、61mを測る。これは、六尺五寸(1,969m)で三十一間にあたる。SD07の南側の延長線上の第51次調査B-3区では、SD08に直角に交わる同時期の溝SD07がある。これと、南側に東西方向に延びている基幹道路昆陽口道の北側側溝との距離も61m(三十一間)である。すると、この距離は有岡城期のこの付近の街区割りの基準寸法であると考えられる。そして、第51次調査B-3区SD07は、南北方向の基準溝であったことになる。

SE02は、小道の際であるが、東の参道からすると奥の背割線付近に設けられた素掘り井戸である。遺物は比較的多く、近辺に利用者の人家があったと考えられる。東側の猪名野神社参道に面したB-1-1区などで掘立柱建物の柱穴が検出されており、可能性としてはこのあたりが考えられる。しかし、周囲には建物はなく、用途としては農業用であろう。

III-1a期(16世紀末~17世紀初頭)(第161図)には、B-7区SD04が東西に設けられる。両端は西はB-11-1区SD05、東はB-1-3区SD04につながる。B-11-1区SD05、B-1-3区SD04はIII-2a期の遺物が出土しており、B-7区SD04でもSD03としてIII-2a期に再利用されているが、あるいは、すべてこの時期に掘削されたものかも知れない。これは、先述したように、元禄七年(1694)の絵



第162図 B-1-2・B-1-3・B-6・B-7・B-11-1・B-11-2区遺構変遷図(2)

図に見える太郎左衛門の借家「塩ウリ作兵衛」「糸引きく」の北側境界線にあたるかと考えたが、小道より「十間半」の距離では、一致しない。しかし、何らかの区画明示を意図したものと考えられる。このほか、B-6区SK60など、いくつかの土壌が見られる。

Ⅲ-1b期(17世紀前半～中頃)には、B-7区SD04の後身のSD03のほか、B-11-2区SA01が目される。これは、現在に続く地割境に設けられた柵である。B-11-2区SX01～06は、畑の畝である。17世紀後半までの遺物が出土しており、『延宝五年(1677)伊丹郷町地味委細絵図』(第159図)に見られる、裏地に畑が描かれる景観と良く一致する。ほかには、廃棄土壌がいくつか散在する。

Ⅲ-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)(第161図)は、『岡庄年代秘記』(八木他1968年)に記載された享保十四年(1729)の北少路村大火災に該当すると考えられる焼土処理土壌などを基準としている。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第159図)には、本百姓の「庄屋太郎左衛門」の屋敷地と記載されているが、該当する建物は検出されなかった。しかし、B-6区SE01は、この時期の井戸であり、薄手の肥前磁器や京焼風陶器がまとまって出土したことから、「庄屋太郎左衛門」に関わる遺物群ではないかと考えられる。

北端のB-11-1区SD06、B-11-2区SD08は、B-11-2区SA01の後身の屋敷地を区画する素掘り溝である。このように、屋敷地を区画する溝は、当初素掘りで、Ⅲ-2a期に部分的に設置されることが多い。また、それ以前はこのような柵か、なにもない(明示するものが遺存していない)場合が多い。これらの溝は、さらに18世紀後半には、石積溝B-11-1区SD04、B-11-2区SD06に造り替えられ、19世紀前半～中頃に廃絶する。B-6区SA01も、屋敷地の背割線に関わる柵である。出土遺物がなく正確な存続年代が把握できていないが、Ⅲ-2b期の18世紀中頃までの遺構である。

この時期の火災の処理土壌がB-1-3区SK192、B-6区SK47である。後世の遺構が重複しており、遺物が混じっているが、焼土や炭化層が堆積していた。

Ⅲ-2 b期(18世紀前半～18世紀後半)には、遺構の数も増える。B-6区SV05・06は、この時期の竈である。B-6区SV05・06は、南側の小道に面している。この小道の成立時期を探るため、Bトレンチを設定したが、明確な時期はつかめなかった。しかし、絵図資料からは、成立時期を推定することができる。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』には東半分しか描かれておらず、この調査区には達していないが、享保二十年(1735)～明和六年(1769)頃と推定されている『北少路村絵図』(第160図)(八木1982年)には登場する。従って、18世紀中頃には成立していたと考えられる。すると、この竈は、入り口に位置することになる。とすれば、これを商業用と考えることも可能である。

B-6区SX109は、池状遺構である。背割線より東にあり、猪名野神社参道に面したB-1-1区の裏地に設けられたもので、農業用水か火災に対する貯水池ではないかと考えられる(川口1997年)。

Ⅲ-3 a期(18世紀後半～19世紀初頭)(第162図)では、B-6区SB04が建っている。南北4m以上で、東隣のB-1-1区に延びるが、B-1-1区では明確にとらえられなかった。

B-6区SV01～03、B-1-2区SV01は、屋敷地奥に設けられた竈である。これらは、屋敷地の奥にあることから、釜屋のような独立家屋があった可能性がある。B-6区SU01・02も、南側の小道からすると、奥に位置する木桶あるいは樽を埋めた便槽と考えられる遺構である。出土遺物に時期差があり、相前後して造られた単基の便槽である。B-1-3区SU03などもこの頃の便槽桶であり、建物の存在が推測できる。

しかし、この時期の井戸は、B-11-1区SE02だけである。共同で利用していたのであろうか。

Ⅲ-3 b期(19世紀前半～19世紀後半)では、19世紀中頃に建てられ、Ⅳ期(明治中頃～)の20世紀まで存続したと考えられる、南側の小道に入り口を持つ建物B-1-3区SB01・02・03や、東の参道側の屋敷地(B-1-1区)に属する建物の続きであるB-6区SB02・03・04が検出された。B-6区SB02は土蔵の基礎であるが、B-1-1区では、攪乱されて検出できていない。

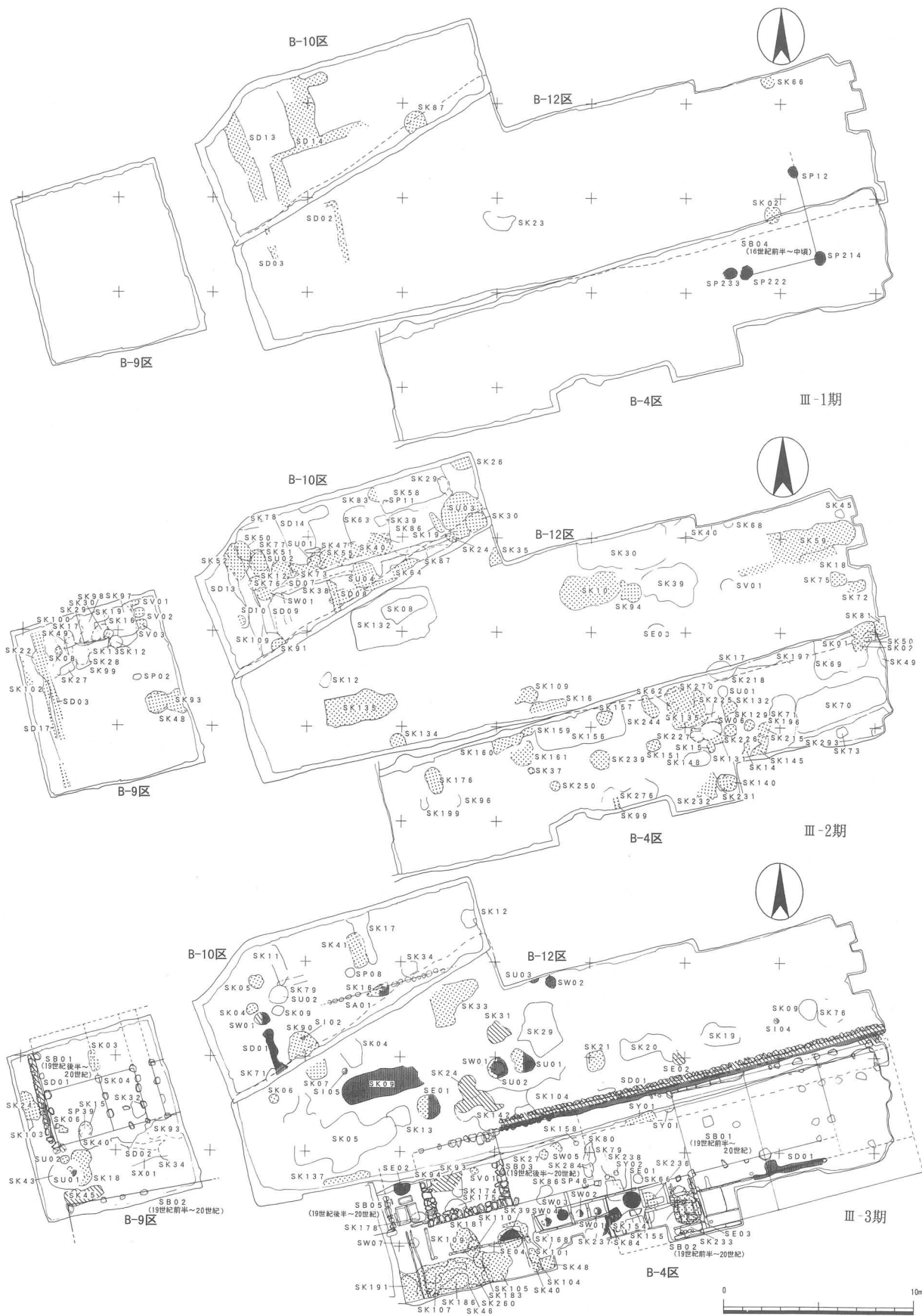
B-6区SW05は、丹波焼甕を埋めた便槽遺構である。南側の小道に面したところにあり、入り口に設けられていたと考えられる。伊丹郷町では、入り口に設けられる例は多くはないが、これを含めていくつか存在する。汲み取りを容易にするためか、あるいは堺環濠都市遺跡の16世紀前半の例のように(川口1992年)、通行者も用を足すことができるようにして、糞尿をより多く集めるようにしたのであろうか。

B-1-3区北東部から、B-6区北側にかけては、多くの廃棄土壌が見られる。この部分は、裏庭であったと考えられる。

Ⅳ期(明治中頃～)(第162図)には、Ⅲ-3 b期からの建物が存続するほか、B-6区北側にSW01～04が設けられる。これは、4基並んだ便槽甕である。上屋に関する礎石などは、検出されなかった。しかし、B-6区SB03に近接し、屋敷地の背割線からしても、東側に属すると考えられる。従って、B-6区SB03に付属する便槽であろう。

この建物は、昭和二十三年(1948)の航空写真(図版1)には写っていない。しかし、建物の三和土を切って設けられた防空壕には第二次大戦頃の遺物が大量に捨てられており、この間に廃絶したと考えられる。

B-1-3区SB01は、昭和二十三年(1948)の航空写真に写っているが、昭和三十六年(1961)の航空写真(図版1)には見られない。ここは、その段階では路地となっている。調査区の北側には市場が存在したが、これが昭和三十年に火災に遭っている。この建物は、その影響をうけたのではなかろうか。また、路



第163図 B-4・B-9・B-10・B-12区遺構変遷図

地はこれを契機にできたと考えられ、この区域を大きく改変する出来事となった。

(2) 第63次調査B-4区、第83次調査B-9区・B-10区、第86次調査B-12区

これらの調査区は、猪名野神社参道に面した西側に位置し、江戸時代には北少路村の区域に属する。

I期(伊丹城期)(第163図)には、掘立柱建物SB04が存在した。この地域では、7世紀後半～8世紀前半の遺構群を除いて、もっとも古い建物となる。柱穴は長径0.73～0.80m、深さ0.71m～0.77mを測る大きなもので、内部には根石として用いられた花崗岩製五輪塔の蓮華座や火輪部が据えられていた。全体の規模はつかめなかったが、かなり大型の建物である。一般的な民家ではないと考えられる。

II期(有岡城期)(第163図)からIII-1a期(16世紀末～17世紀初頭)の遺構は、確認できなかった。しかし、参道に近い場所の地山面に柱穴が分布しており、出土遺物はないが、この頃の掘立柱建物となる可能性がある。

III-1b期(17世紀前半～中頃)には、素掘りの背割溝B-10区SD13や地割境界のSD14などがみられる。これらは、他の地割境の溝に比べると早く成立している。

III-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)(第163図)には、焼土処理土壌が各所で検出される。これには元禄十二年(1699)もしくは元禄十五年(1702)の元禄年間の火災と、享保十四年(1729)の火災の2種類がある。元禄年間の火災は、B-9区SK98・100、B-12区SK30・39・132、B-4区SK69・70・71・196などがある。

B-9区SK98・100の地点は、元禄七年(1694)の絵図では、「町代佐兵衛」が住む借家の東側の裏手になるが、この借家は奥行きが「九間半」と記載されており、借家の範囲外となる。「九間半」の地点には、後述する地割溝B-9区SD17・03があり、この数値は事実を伝えていると考えられる。焼土処理土壌は、それを越えた東の裏地にあるのである。したがって、「町代佐兵衛」の借家の屋敷地内ではないと言える。しかし、絵図ではここに空地の表現はない。すると、土地は借家の屋敷主「善兵衛」のものかもしれない。元禄七年(1694)の絵図の成立以降、元禄十二年(1699)もしくは元禄十五年(1702)までに、建物が建築されたのであろうか。

B-12区では、焼土処理土壌は調査区中程のSK30・39と西側奥のSK132の2カ所に別れている。この屋敷地では、屋敷主「源左衛門」の名が西側奥に記載され、表の通りに面した場所には借家人「油うり吉兵衛」が記載されている。これが、家屋の位置関係を示しているとすれば、表の通りに面した商売に適した場所を貸していると理解できる。そうすると、2カ所の焼土処理土壌は、それぞれの家屋に対応したものとの解釈もできる。

一方、B-4区SK69・70・71・196は、すべて通りに面した入り口付近に設けられている。ここは、本百姓「庄左衛門」単独の屋敷地である。建物が主屋一棟と考えれば、この焼土処理土壌の位置と符合することになる。今一点、SK69とSK70の間に、幅約0.6mの空地が見られる。これは、二尺に相当し、家屋の構造上の影響を受けたものと考えられる。具体的には、柱通りのラインなどを想定することができる。

焼土処理土壌自体も長方形を呈するものが多く、その規模が六尺五寸(1.969m)すなわち一間の公倍数(時には0.5倍)で割り切れる数字を基本的とし、その一回り小さいサイズになっているものが多い(なかには、やや大きいものもあるが)。実例を上げると、B-4区SK69が1.9m=約一間、同区SK70が4.8m=約二間半×2.85m=約一間半、B-12区SK30が4.8m=約二間半、同区SK132が4.5m=約二間×2.9m=約一間半となる。また、その位置が間口から測って、やはり六尺五寸(1.969m)すなわち一間の公倍数(時には0.5倍)で割り切れる数字の場所にあることが多い。実例を上げると、B-4区SK69の東端が道路

より2.1m＝約一間、西側が4.0m＝約二間、同区S K70の東側が1.2m＝約半間、西側が6m＝三間、B-12区S K30の東側が10m＝約五間、西側が14.8m＝約七間半、同区S K132の東側が22.8m＝約十一間半、西側が27.3m＝約十三間半となる。このような事実は、偶然とは考えられない。建物の内部構造の規制の上に設けられたものと考えざるをえないのである。屋敷地の長辺のいずれかの側、あるいは両側辺に寄っていることも同じ理由からであろう。おそらく、柱通りを避けて、部屋の床下になるように計算して造られたと考えられる。その理由としては、先に報告したように（川口1997年）湿気除けの機能などが考えられる。また、その位置の片寄り方によって、大胆ではあるが建物の構造を推測することができる。すなわち、B-4区の場合は踏込型か片土間型、B-12区の場合は片土間型の町屋が推測できるのである。

B-12区では、焼土処理土壌とは反対側の南側に竈S V01と井戸S E03があり、この想定を一層確実なものとすることができる。

これは、享保十四年（1729）の焼土処理土壌でも、同様である。この時期の焼土処理土壌には、B-4区S K156がある。

このほか、前代に続いて地割溝が見られる。B-10区S D10はS D13の後身、S D07・S A01はS D14の東西部分の後身で、いずれも地割境の溝と柵である。

Ⅲ-2 b期（18世紀前半～18世紀後半）は、遺構が多い。B-9区S D17・03は、地割境の溝である。S D17は、南側のB-5区S D05につながる。B-5区S D05は、17世紀後半～末に埋没していたが、ここでは、さらに継続して使用されていたようである。B-9区S V01～03は、三連の半地下式竈である。同様の構造の竈が東隣のB-1-4区から検出されており、この頃の竈の1つの型式としてとらえられる。また、B-1-4区竈S V01～04からは、約4m程しか離れておらず、ここに長屋のような1単位が小規模な内部構造を持つ町屋があったと考えられる。

Ⅲ-3 a期（18世紀後半～19世紀初頭）は、B-9区では、S B01（次のⅢ-3 b期のもの）の南東部に、西隣のB-1-4区から続く砂利敷面があり、S K93を覆って周辺の一角に広がっていた。『文化（1804～17）改正伊丹之図』（八木1982年）では、この部分に路地（第160図路地B）が描かれている。したがって、この砂利敷面は、路地Bに相当すると考えられる。S K93からは18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土していることから、この路地の成立年代が絵図の年代と一致することが確かめられた。また、S K18・45などの廃棄土壌は、路地に設けられたものであることがわかる。これより北側には、この時期の廃棄土壌はほとんどない。したがって、この時期にもS B01とはほぼ同じ規模の前身建物があり、南側が路地となっていたと考えられる。また、西側に、S D03の後身の石積溝S D01が造られる。これは、現代まで存続するが、西側石積はコンクリートとなっていた。B-12区では、屋敷地の南側にこの時期の土壌S K09・19・20などが見られる。前代同様、北側が居室で南側が通り庭の片土間型の町屋があったことを推測させる。通り庭に位置するS E02は、この時期の井戸であり、Ⅲ-3 b期まで継続して営まれる。南側の石積溝S D01は、この時期に造られ、現代まで引き継がれた。B-4区では、調査区の中程以西に、廃棄土壌S K79・80・93などがあり、西半分は裏庭であったと考えられる。

Ⅲ-3 b期（19世紀前半～19世紀後半）には、B-9区では、Ⅳ期の建物S B01の裏手すぐの所に木桶便槽S U02が設けられ、S B01を避けた位置にS K18・24などの土壌が築かれる。これによって、Ⅳ期の建物S B01とはほぼ同規模の建物があったことが想定される。B-10区は、廃棄土壌が散在し、全体が裏庭であったと考えられる。B-12区では、S E02の後身の井戸S E01が掘られ、Ⅳ期まで利用される。S U01・02は2基一組の木桶便槽である。建物の裏手に設けられたものであろう。Ⅳ期まで存続するが、S U02はS W01

に造り替えられる。これらの配置は、B-4区と非常によく似ている。SE02の位置に、後述するB-4区SE03があり、SU01・02の位置にB-4区SW01~04、SE01の位置にB-4区SE04が位置している。これは、偶然ではなかろう。B-4区では、東の参道に面した主屋建物SB01と、これに付属する井戸SE03の上屋SB02が建築され、Ⅳ期まで続いた。水琴窟SY01は、ちょうどSB01の裏手に接しており、これに伴うものである。B-12区の建物構成もこれと同じで、東側の参道からSE02の手前まで主屋があり、SE02やSU01・02、SE01は、別棟の上屋があったと考えられるのである。B-4区では、後に地上土蔵SB03が建つ場所には、便槽甕SW05があり、この段階では、ここはまだ裏庭であったと考えられる。SE04もこの時期の井戸である。この時期には、2基の井戸があったことになる。4基一列に並んだ便槽甕SW01~04も、この時期に造られたと考えられる。ただし、SW03はⅣ期に造り替えられ、大谷焼鉢となっている。西南の角には、SK105・107・186などの廃棄土壌が集中している。この部分も裏庭として残ったためであろう。

Ⅳ期(19世紀後半~20世紀)(第163図)には、B-9区では、建物SB01が建てられる。これは、東隣のB-1-4区SB01と続き棟の長屋で、現代まで存続していた。内部に、裏に抜ける半間の通路があった。B-10区では、SW01が見られ、ここに便所を伴う建物が建てられたと考えられる。B-12区では、SE01・SW01・SU01が存続するほか、新たにSW02・SU03が造られる。B-4区では、SB01・SB02に加えて、地上土蔵SB03の東半分が建設され、次いで西半分が造築される。井戸はSE03・04に替わってSE01・02が掘られた。

3. まとめ

今回の調査区は、B-1-2区・B-1-3区・B-6区・B-7区・B-11-1区・B-11-2区などの北少路村の西側と、B-4区・B-9区・B-10区・B-12区などの東側の参道に面した場所に大別できる。すでに述べたように、前者では、Ⅰ期伊丹城期やⅡ期有岡城期の溝が検出されるが、17世紀後半頃までは畑も存在しており、裏地の様相が濃い。一方、後者では、Ⅰ期伊丹城期の大型建物は別としても、17世紀後半頃までの掘立柱建物の柱穴が散在している。元禄年間の火災の焼土処理土壌は各所で検出され、これによって推測できる建物は、町屋形式のものである。このように、後者の猪名野神社参道側の方が、17世紀から活況を呈していたと考えられる。

ただ、前者の裏手の区域にも、17世紀代の土壌や溝が見られることには注意が必要である。ここは、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では「庄屋太郎左衛門」の屋敷地になっており、町屋のような立て込んだ形ではないにしろ、ここには17世紀から人家が建っていた可能性が高い。

整理が進み、調査成果がまとまりだしたことによって、面的な様相が随分把握できるようになってきた。今後、さらに周辺の調査成果を追加することによって、この区域のより詳しい変遷がつかめるものと期待される。

表6 主要遺構一覧表(1)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or長辺 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT51 B-1-2	SK754	J10-i2	3	1	楕円形	0.57	0.37	0.31		18C前 ~後半	
B-1-2	SV01	J10-h2	1	1	楕円形	0.93	0.73	0.45		18C前 ~後半	竈
B-1-2	SD08	J10-h2	1	1	溝	2.3	0.31	0.06		18C後 ~19C初	
B-1-2	SK734	J10-i2	1	1	隅丸長 方形	1.31	0.52	0.14		18C後 ~19C初	
B-1-2	SK726	J10-i2	1	1	長方形	0.75	0.48	0.12		18C末 ~19C前半	
CIT51 B-1-3	SK242	J10-g6	3	1	円形	0.61		0.41		16C中 ~後半	
B-1-3	SK33	J10-i4	1	1	円形	0.45		0.16		16C末 ~17C初	
B-1-3	SK223	J10-i4	3	1	不整形	3.29	1.4	0.2		17C初頭	
B-1-3	SK192	J10-j6	2	1	不整形	4.36 以上	3.31	0.89		17C後 ~18C初	享保火災
B-1-3	SK200	J10-i6	2	1	不整形	2.08 以上	1.0	0.43		17C後 ~18C初	享保火災
B-1-3	SK186	J10-i4	2	1	楕円形	0.7	0.55	0.08		18C後半	
B-1-3	SK220	J10-i6	3	1	不整形	3.58 以上	1.98	0.38		18C後 ~19C前半	
B-1-3	SK120	J10-f8	2	1	不整形	3.0	1.64	0.42		18C後 ~19C前半	
B-1-3	SK123	J10-g7	2	1	不整形	1.33	1.15	0.26		18C後 ~19C前半	
B-1-3	SK138	J10-g6	2	1	不整形	1.12 以上	0.79 以上	0.3		18C後 ~19C初	
B-1-3	SU03	J10-j4	2	1	円形	1.13		0.31		19C前 ~後半	桶
B-1-3	SK217	J10-f8	2	1	不整形	0.5	0.3	0.17		19C前 ~後半	SB01 礎石掘形
CIT63 B-4	SP214	K10-h8	4	3	楕円形	0.73	0.6	0.77		16C前 ~中頃	SB04 柱穴
B-4	SP222	K10-g8	4	6	不整形	0.8	0.76	0.71		16C前 ~中頃	SB04 柱穴
B-4	SP223	K10-h8	4	1	楕円形	0.8	0.55	0.31		16C前 ~中頃	
B-4	SK69	K10-h8	2	4	不整形	1.90 以上	1.78	0.53		17C後 ~18C初	元禄火災
B-4	SK70	K10-h8	2	2	不整形	4.8	2.85	0.65		17C後 ~18C初	元禄火災
B-4	SK71	K10-h8 K10-h9	2	1	不整形	2.83 以上	1.23	0.61		17C後 ~18C初	元禄火災
B-4	SK196	K10-h8	3	1	不整形	3.19 以上	1.73	0.51		17C末 ~18C初	元禄火災
B-4	SK156	K10-e8 K10-e9	3	1	不整形	3.0 以上	1.54	0.50		18C初頭	享保火災
B-4	SK37	K10-e9	1	1	長方形	0.33	0.3	0.07		18C前半	
B-4	SK135	K10-f8	3	2	不整形	2.27	1.94	0.21		18C前 ~中頃	
B-4	SK93	K10-d9	2	1	不整形	1.65 以上	0.76 以上	0.19		18C後 ~19C初	
B-4	SE03	K10-f9 K10-g9	3	1	不整形	1.59	1.40	0.96 以上		19C前 ~後半	

表6 主要遺構一覧表(2)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or長辺 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT63 B-4	SK236	K10-f9	4	1	不整形	0.85 以上	0.6 以上	0.52		19C前 ~中頃	
B-4	SK260	K10-d10	4	7	不整形	4.59 以上	1.6 以上	0.75		19C前 ~後半	
B-4	SV01	K10-d9	1	2	不整形	0.41	0.37	0.06		19C中頃以前	
B-4	SE01	K10-f9	1	1	円形	0.9		0.47 以上		近代	
B-4	SE02	K10-d9	1	1	円形	0.95 以上		0.12 以上		近代	
CIT63 B-6	SK60	K10-a5	3	1	不整形	2.63	1.72	0.36		16C末 ~17C初	
B-6	SK115	J10-j2	4	7	不整形	1.54	1.3	0.27		17C前半	
B-6	SK63	K10-a5	3	1	不整形	0.54	0.48	0.42		17C後 ~18C初	
B-6	SK47	K10-a4 K10-a5	2	1	不整形	2.94	0.98 以上	0.2		17C後 ~18C初	享保火災
B-6	SK81	K10-a3	3	1	不整形	3.42	1.37	0.41		18C前 ~後半	
B-6	SK14	J10-j3	1	1	不整形	1.9	1.17	0.85		18C前 ~後半	
B-6	SK49	J10-j2	2	1	円形	0.5		0.19		18C後 ~19C初	
B-6	SK18	J10-i2 J10-i3	1	1	不整形	3.25 以上	0.83 以上	0.59		18C後 ~19C初	
B-6	SK34	K10-a4	2	1	不整形	1.56	0.78	0.51		19C前半	
B-6	SU01	K10-a3	3	1	円形	0.7		0.8		19C前 ~後半	
B-6	SD02	J10-j4 K10-a5	2	1	溝	1.74 以上	0.14	0.09		19C前 ~後半	
B-6	SK23	J10-j3	1	1	不整形	1.6	1.03	0.13		19C前 ~後半	
B-6	SK15	J10-j3	1	1	不整形	1.43	0.6 以上	0.25		19C後 ~20C初	
B-6	SK71	J10-j4 K10-a4	3	1	不整形	2.37	0.59	0.66		19C後 ~20C初	
CIT78 B-7	SK10	J10-i2	3	1	不整形	1.58	0.72	0.17		17C前 ~中頃	
B-7	SK12	J10-j3	3	1	不整形	3.1 以上	2.34 以上	0.34		18C前 ~後半	
B-7	SD02	J10-i3 J10-j3	2	1	溝	3.8 以上	0.41	0.11		19C前 ~後半	
CIT83 B-9	SK16	K10-a7	2	1	不整形	1.6 以上	1.0 以上	0.35		17C後 ~末	
B-9	SK97	K10-a8	4	1	不整形	2.1 以上	1.55	0.29		17C後 ~18C初	
B-9	SK98	J10-j7	4	1	不整形	1.4 以上	1.4	0.54		17C後 ~18C初	元禄火災
B-9	SK100	J10-j8	4	1	不整形	1.4 以上	1.1 以上	0.55		17C後 ~18C初	元禄火災
B-9	SK17	J10-j8	2	1	不整形	2.7 以上	2.5	0.31		17C後 ~18C前半	
B-9	SK19	J10-j7	2	1	不整形	1.0 以上	0.57	0.47		17C後 ~18C後半	
B-9	SD03	J10-j8	3	1	溝	5.7 以上	0.5	0.14		18C前 ~後半	

表6 主要遺構一覧表(3)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or長辺 or一辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT83 B-9	SK93	K10-a 8	4	1	不整形	1.3	0.9 以上	0.36		18C前 ~19C初	
B-9	SD02	K10-a 8	3	1	溝	2.5 以上	0.4	0.25		18C後 ~19C初	
B-9	SK45	J10-j 9	3	1	不整形	2.05	0.85	0.81		18C後 ~19C前半	
B-9	SU02	J10-j 9	2	1	円形	0.5		0.55		19C前 ~後半	桶
B-9	SK24	J10-j 8	3	1	不整形	1.5 以上	0.8 以上	0.08		19C前 ~後半	
CIT83 B-10	SD09	K10-b 7	3	1	溝	2.1 以上	0.65	0.12		17C中 ~18C前半	
B-10	SK58	K10-d 6	3	1	長方形	3.7	1.8	0.4		17C後 ~18C初	
B-10	SU03	K10-d 6	3	3	円形	2.3		0.44		18C前 ~中頃	桶
B-10	SD08	K10-c 7	3	1	溝	3.8 以上	0.7	0.25		18C前 ~中頃	
B-10	SU01	K10-c 7	2	3	円形	0.70		0.65		18C前 ~後半	桶
B-10	SK38	K10-c 7	2	1	不整 長方形	1.8 以上	0.4	0.09		18C前 ~後半	
B-10	SU04	K10-c 7	3	5	円形	内矩1.0 掘形1.4		内矩0.55 掘形0.6		18C中 ~後半	桶
B-10	SK30	K10-d 6	2	2	円形	1.1		0.78		18C後 ~19C初	
B-10	SK41	K10-c 6	2	1	隅丸 長方形	1.9	0.85	0.08		19C前 ~後半	
B-10	SD01	K10-b 7	1	1	溝	2.4 以上	0.4	0.21		19C末以降	
CIT86 B-11-1	SK52	J10-e 5	2	1	不整形	1.6 以上	1.11	0.38		16C末 ~17C初	
B-11-1	SK71	J10-h 5	2	1	円形	0.76		0.27		16C末 ~17C前	
B-11-1	SK45	J10-f 4	2	1	不整形	1.1	0.53 以上	0.17		18C前 ~後半	
B-11-1	SK20	J10-f 4 J10-f 5	1	1	不整形	3.35 以上	2.36 以上	0.6		18C前 ~後半	
B-11-1	SK17	J10-e 5	1	1	不整形	1.32	0.45	0.71		18C中 ~後半	
B-11-1	SU05	J10-f 3	2	1	不整形	0.63 以上	0.55 以上	0.21 以上		18C後 ~19C初	桶
B-11-1	SK03	J10-i 5 J10-h 5	1	1	不整形	1.9 以上	1.2 以上	0.43 以上		18C末 ~19C前	
B-11-1	SU04	J10-h 5	1	1	円形	0.6		0.2		19C前 ~後半	桶
B-11-1	SK04	J10-h 6	1	1	不整形	2.2 以上	1.2 以上	0.17		19C後 ~20C初	
CIT86 B-11-2	SK16	J10-h 4	2	1	不整形	2.72 以上	0.05	0.35		17C中頃	
B-11-2	SK17	J10-h 4	2	1	長方形	1.96 以上	1.54 以上	0.42		17C中頃	
B-11-2	SD08	J10-g 3	2	1	溝	4.06 以上	0.6	0.33		17C末 ~18C前半	
B-11-2	SD09	J10-g 3	1	1	溝	7.14 以上	0.86	0.19		18C前 ~中頃	
B-11-2	SK05	J10-h 4	1	5	円形	0.95		0.75		18C後 ~19C初	

表6 主要遺構一覧表(4)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	直径or長辺 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT86 B-11-2	SK12	J10-h3	1	2	不整形	2.68	2.56 以上	0.71 以上		18C後 ~19C初	
CIT86 B-12	SP12	K10-h7	2	1	楕円形	0.62	0.5	0.38		16C前 ~中頃	
B-12	SK66	K10-g6	2	1	不整形	1.3 以上	1.05 以上	0.27		17C前 ~中頃	
B-12	SK02	K10-g8	1	2	円形	0.9		0.28		17C前 ~中頃	
B-12	SK08	K10-c7	1	1	不整形	2.4	1.0	0.23		17C後半	
B-12	SK132	K10-c7	2	2	長方形	4.44	2.9	0.49		17C後 ~18C初	元禄火災
B-12	SK30	K10-e7	1	5	不整形	4.7	2.15 以上	0.53		17C後 ~18C初	元禄火災
B-12	SK39	K10-f7	1	1	不整形	2.95	2.28	0.37		17C後 ~18C初	
B-12	SK94	K10-e7	2	1	不整形	1.95	1.95	0.27		18C前 ~後半	
B-12	SK59	K10-h6 K10-h7	2	1	不整形	6.65	1.7	0.31		18C前 ~後半	火災痕
B-12	SK24	K10-d8	1	1	不整形	2.2	1.74	0.73		18C後 ~19C前半	
B-12	SK31	K10-d7	1	1	不整形	1.32	1.16	0.48		18C後 ~19C前半	
B-12	SK06	K10-b6	1	3	円形	1.0	0.97	0.27		19C前 ~後半	
B-12	SW03	K10-e6	1	3	不整形	内矩0.44 掘形0.54		内矩0.42 掘形 -		19C後 ~20C代	甕

表7 各調査区主要遺構年代表(1)

B-1-2区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK754					—	
SV01					—	
SK734					—	
SD08					—	
SK726					—	

B-1-3区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SD05	第9図		—			
SK242			-			
SK223			—			
SK33			—			
SD04	第11図			—		
SK192				—		
SK200				—		
SK138					—	
SK220					—	
SK120					—	
SK123					—	
SK91	第16図				—	
SU03					—	
SK217					—	
SB01	第13図				—	
SB02	第14図				—	
SB03	第15図				—	
SU01	第18図				—	
SU02	第18図				—	

B-4区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SB04	第24図		—			
SP214			—			
SP222			—			
SP223			—			
SK69				—		
SK70				—		
SK71				—		
SK196				—		
SU01	第36図			—		
SK156				—		
SK37					—	
SW06	第37図			—		
SK135				—		
SW07	第31図				—	
SK93					—	
SY01	第46図				—	
SY02	第35図				—	
SV01					—	
SE03					—	
SE04	第28図				—	
SW05	第47図				—	
SK236					—	
SK260					—	
SB01	第43図				—	
SB02	第44図				—	
SW01	第48図				—	
SW02	第48図				—	
SW04	第48図				—	
SB03	第44図				—	
SB05	第34図				—	
SE01					—	
SE02					—	
SW03	第48図				—	

B-6区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SB05	第51図	7世紀後半～8世紀前半				
SE02	第52図		—			
SK60			—			
SK115				-		
SE01	第53図			—		
SK63				—		
SK47				—		
SA01	第57図			—		
SV05	第58図				—	
SV06	第58図				—	
SK14					—	
SX109	第56図				—	
SK81					—	
SV01	第63図				—	
SV02	第63図				—	
SV03	第63図				—	
SU02	第55図				—	
SD06	第59図				—	
SK49					—	
SK18					—	
SX08	第63図				—	
SB04	第62図				—	
SK34					—	
SW05	第64図				—	
SW06	第65図				—	
SI07	第69図				—	
SU01					—	
SD02					—	
SK23					—	
SB03	第68図				—	
SB02	第67図				—	
SB01	第13図				—	
SK15					—	
SW01	第70図				—	
SW02	第70図				—	
SW03	第70図				—	
SW04	第70図				—	
SK71					—	

B-7区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SD04	第77図		—			
SK10				—		
SD03	第78図			—		
SK12					—	
SD02					—	
SU01	第79図				—	
SU02	第79図				—	

表 7 各調査区主要遺構年代表(2)

B-9区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK16				—		
SK97				—		
SK98				—		
SK100				—		
SK17				—		
SK19				—		
SD03				—		
SD17	第82図			—		
SV01	第84図			—		
SV02	第84図			—		
SV03	第84図			—		
SK93				—		
SD02				—		
SX01				—		
SK45				—		
SD01	第89図			—		
SU02				—		
SK24				—		
SB01	第87図			—		
SB02				—		
SU01	第88図			—		

B-10区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SD13	第93図			—		
SD14	第94図			—		
SK87	第95図			—		
SD07	第96図			—		
SD10	第96図			—		
SK58				—		
SD09				—		
SU03				—		
SD08				—		
SU01				—		
SU04				—		
SK38				—		
SU02	第100図			—		
SW01	第102図			—		
SA01	第98図			—		
SK30				—		
SI02	第99図			—		
SK41				—		
SD01				—		

B-11-1区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SD08	第105図	—				
SD07	第106図	—	—			
SK52			—			
SK71			—			
SD05	第107図		—			
SD06	第108図		—			
SK45			—			
SK17			—			
SK20			—			
SU03			—			
SU05			—			
SE02	第110図		—			
SD04	第115図		—			
SK03			—			
SU04			—			
SU01	第111図		—			
SU02	第111図		—			
SK04			—			

B-11-2区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SK16				—		
SK17				—		
SA01	第122図			—		
SX01	第126図			—		
SX02	第126図			—		
SX03	第126図			—		
SX04	第126図			—		
SX05	第126図			—		
SX06	第126図			—		
SU03	第124図			—		
SD08				—		
SD09				—		
SK05				—		
SK12				—		
SD06	第125図			—		

B-12区

遺構番号	挿図番号	16C	17C	18C	19C	20C
SP12		—				
SK66			—			
SK02			—			
SK08			—			
SV01	第129図		—			
SE03	第130図		—			
SK132			—			
SK30			—			
SK39			—			
SK94			—			
SK59			—			
SE02	第130図		—			
SK24			—			
SK31			—			
SD01	第146図		—			
SK06			—			
SY01	第133図		—			
SI04	第139図		—			
SI05	第140図		—			
SU02	第142図		—			
SE01	第137図		—			
SU01	第141図		—			
SW03			—			
SW01	第143図		—			
SW02	第144図		—			

第2節 遺物計測方法および計測結果について

1 目的

調査を重ねるごとに出土する遺物は膨大な数に上るが、各遺物についてはすでに個々に報告を行った。ここでは、出土遺物の大半を占める土器・陶磁器・土製品について、一括資料を対象として、

- (1) 遺物の種類
- (2) 生産地
- (3) 器種・器形

の分類基準を定め、破片計測法と集計方法についても独自の方法を用い、計測・数量化を行う。これにより、同時期の種類・器種構成、伊丹における当時の土器・陶磁器・土製品の流通動向の把握、生活空間の状況復元がある程度可能になると考えられる。但しその基準については編年作業の進展や生産地での調査成果により、今後さらに精密に行きたい。

2 種類と分類基準

種類—土器・陶器・磁器・玩具（ミニチュア品を含む）

基本的な種類は、大別して4項目に分けた。分類基準については細分化するとかえって正確さを欠くと考えたため、下記に記す大枠に従った。

- (1) 土器—素地は陶土、原則として軟質で、無釉である。
- (2) 陶器—素地は陶土、土器よりも硬質である。釉薬の有無は原則的には問わず、焼締陶器・施釉陶器共に含む。
- (3) 磁器—素地は陶石、原則として硬質である。
- (4) 玩具—他の遺物とは異質であり、単独に別置した。よって分類基準としては他と異なる（土器・陶器・磁器と分類せず、玩具・ミニチュアとして一括した。）

3 生産地と分類基準

生産地の分類は最小限に留めた。消費地の場合、生産地を特定することは甚だ困難であり、且つ、安易な特定は混乱を招くと考えたからである。そこで断定はせずに「～系」とし、さらに生産地を明確にしえないものは、その他・産地不明とした。

(1) 土器

在地系①—いわゆる土師質土器である。焙烙は、17世紀前半～後半は堺か大坂産の難波洋三氏分類C類、18世紀前半～後半には明石もしくは堺産E類、18世紀末には枚方の津田産G類が加わることが難波洋三氏によって明らかにされている（難波1992年）。しかし、厳密に堺・大坂・明石の生産地を破片から区別することは難しく、便宜上ここに含めた。また、18世紀末～19世紀前半には大坂D類と津田産G類を模した焙烙の生産窯が、伊丹市教育委員会が調査した本遺跡の宮ノ前地区第93次調査で検出されている（小長谷1992年）。土師質土器皿などは、伊丹市近郊において生産され、購入されたものと思われる。

在地系②—いわゆる瓦質土器である。

泉州系—焼塩壺・火消壺・焜炉など、湊焼と称される土器は、大阪府堺市西湊町周辺及び八田北町など

和泉において生産されたものと考えられている。

その他一柿釉が施された製品は、施釉されている点で陶器に含むべきものであるが、焼成温度が低く、軟質であるという点から、その他の土器に含めた。(産地不明のものもここに含まれる。)

(2) 陶器

備前系、堺・明石系、丹波系、瀬戸・美濃系①(太白手)、瀬戸・美濃系②(その他)、唐津系①(京焼風陶器)、唐津系②(嬉野焼)、唐津系③(呉器手)、唐津系④(その他)、京焼系(伊賀・信楽焼系を含む)、萩焼系、中国系、その他(産地不明のものもここに含まれる。)

(3) 磁器

肥前系(有田・波佐見を中心とする肥前磁器と、肥前磁器の製作技法をまねた、あるいは工人が移動して製作したと思われる肥前系磁器とがあるが、前者を肥前系とした。なおここでは、厚手・粗製のいわゆる「くらわんか手」のもの-波佐見などで多く焼かれている-を肥前系の中で細分化した。)

瀬戸・美濃系(新製焼)、三田系、京焼系、中国系、その他(産地不明のものもここに含まれる。)

(4) 玩具

ミニチュア、土人形、泥面子、ままごと道具

4 器種と器形の分類基準

器種はその形状から大別して15種類に分類した。近世の陶磁器は器種が多様化するため細分すればきりが無く、器形に関してはなお一層この傾向が顕著なため、使用方法が明確なものに関して、これを重点的に分類した。それ以外は細分化を避け、個々の分類基準に関しては、以下に掲げた。

(1) 碗(鉢との相違点は、口縁装飾が華美でないもの)

小杯-口径5.0cm未満、小碗-口径5.0~9.0cm未満、中碗-口径9.0~12.0cm、大碗-口径12.0~15.0cm未満。

紅猪口-白磁小杯のみを選んだ。白磁以外のものでも紅猪口として使用されていた製品があるかもしれないが、特定の製品に限定した。

薄手酒杯-幕末から明治にかけて現れるもので、器壁が0.1mm前後の小杯である。清酒用に用いられたと考えられる。

仏飯器

(2) 皿

極小皿-口径7.0cm未満、小皿-口径7.0~14.0cm未満、中皿-口径14.0~26.0cm未満、大皿-口径26.0cm以上。

灯明皿-口縁部に煤の付着しているもの。灯明受皿-口縁内部に環状の受けを持つもの。

卸皿-内面底部に卸目が見られるもの。

(3) 鉢(碗との相違点は、1. 高台が広い、2. 口縁装飾が華美。皿との相違点は、1. 器高と口縁の比が三分の二以下、2. 主文様が器の外面にあたる)

小鉢-口径15.0cm未満、中鉢-口径15.0~24.0cm。

大鉢-口径24.0cm以上水鉢(手水鉢・瀬戸・美濃焼水甕を含む)

餌鉢(餌猪口・鳥鉢を含む)、鬢水入、植木鉢、猪口(そば猪口を含む)、蓋物、段重、片口鉢、搦鉢、練鉢(こね鉢)、香炉、灰吹き、火入れ、火鉢(手焙り)、火消壺、焜炉、七厘(火力調整窓を持つ)、

匣鉢、風炉（火窓や脚の形態に工夫の凝らされているもの）、建水、合子。

(4) 壺

小壺一器高12.0cm未満、中壺一器高12.0～30.0cm未満、大壺一器高30.0cm以上
お歯黒壺（口縁の一箇所が鳶口で、肩に耳が付く壺）、水指、焼塩壺。

(5) 甕

小甕一器高12.0cm未満、中甕一器高12.0～30.0cm未満、大甕一器高30.0cm以上。

(6) 瓶 類

小瓶一器高12.0cm未満、中瓶一器高12.0～15.0cm未満、大瓶一器高15.0cm以上
神酒徳利、香油壺、爛徳利、花瓶。

(7) 水 注

小水注一6.0cm未満、中水注一6.0cm以上、急須、土瓶、水滴。

(8) 釜

釜、茶釜。

(9) 鍋 類

焙烙、土鍋、行平。

(10) 鐘 類

瓦燈（傘部）、瓦燈（皿部）、火もらい、灯籠。

(11) 杓子類

散蓮華、十能。

(12) 燭 類

秉燭、カンテラ。

(13) 器台類

有脚灯明受皿・燭台。

(14) 蓋 類

小碗蓋、中碗蓋、大碗蓋、合子蓋、蓋物蓋、段重蓋、焼塩壺蓋、火消壺蓋、七厘窓蓋、壺蓋、水注蓋、
急須・土瓶蓋、土鍋・行平鍋蓋、秉燭・カンテラ蓋。

(15) その他

器種・器形の分類不可能なものもここに含まれる。

5 集計・表記方法

今回報告した遺跡から、時代・出土量・種類ともにまとまった遺構を選び、上記の分類基準に従って計測を行った。

計測方法は、計算の際から正確さを求め、口縁部換算値のみから推定個体数を求めた。口縁部の無い破片は0個体と換算し、体部から底部までほぼ完全に残り、口縁部もほぼ欠損の無いものは1個体とした。

口縁部の破片は「口縁部半径チャート（1/12分割）」を用いて少数第2位までを記録した。その値を合計したものが推定個体数となる。

6 分析結果

今回のデータの入力方法としては、『EXCEL Ver. 5.0』を利用して、基礎データ（番号・遺構番号・器種・産地・用途・破片数・個体数）を入力し（表10）、遺構ごとに産地別構成比と用途別構成比をグラフ化した（第164～169図）。

産地別構成比の凡例については個々にグラフに付した。用途別構成比の凡例については、

- A－食膳具（食べ物を盛る ex. 碗・皿・鉢・猪口など）
 - B－調理具（食べ物を加工する道具 ex. 播鉢・焙烙・土瓶・急須など）
 - C－貯蔵具（物を保存する容器 ex. 壺・甕・瓶・水注・水鉢など）
 - D－調度具（暖房・灯明・化粧等に使用された器具 ex. 香炉・火鉢・火入れ・瓦灯・灯明皿・植木鉢・香油壺など）
 - E－その他（玩具など）
- とした。

7 破片数と推定個体数について

破片数と推定個体数について、全体における比率に大差はないが、土師質土器などは破片数が比較的高い数値となる。これは破片数が土師質土器の場合、破棄されると細かく割れる場合が多く、硬質な陶磁器の破片数と推定個体数が同率、あるいは推定個体数の方が上回るのと対比的である。

8 遺構の年代について

遺物の用途別の構成比を分析するに当たっては、今回の調査報告資料である第63・83・86次調査の7つの遺構（表8参照）を主として行うが、近世初頭のII～III－1期の資料数が少ない。これを補うために、前回報告した（藤井他1997年）第51次調査B－2－1区SK455・SK461・SK479、第97次調査D－6区SK428・SP507を追加して、補足分析をすることとした。ただ、これらの遺構は遺物の絶対量が少なく、十分補えるとは言えない。しかし、いくつかの傾向は示せると考えている。

今回の調査報告資料の年代幅は、一覧表にすると表8ようになる。

表8 遺物計測遺構一覧表（——線今回報告遺構、~~~~線前回報告遺構）

年代	1600年			1700年		1800年	
区分	II	III－1 a	III－1 b	III－2 a	III－2 b	III－3 a	III－3 b
遺 構 名	—— B－6区SE02						
	~~~~ B－2－1区SK479						
	~~~~ D－6区SP507						
	~~~~ B－2－1区SK461						
	~~~~ D－6区SK428						
	~~~~ B－2－1区SK455						
	—— B－12区SK66						
				—— B－4区SK69			
				—— B－9区SK98			
				—— B－6区SE01			
				—— B－12区SE03			
				—— B－6区SE04			

## 9 用途別の構成比について

### (1) 第63・83・86次調査遺構

II～III-1 a期のB-6区SE02(16世紀後半～17世紀初頭)の用途別構成比は、食膳具(A)が99.57%(個体数、以下特に断らない限り個体数で記述する)とほとんどを占める。ところが、破片数では72.59%となる。これは、資料総数が少なく、片寄りを見せているためである。全体に占めるその内訳は、皿が99.14%、碗が0.43%と圧倒的に皿が多い。皿は、98.72%が在地系①の土師質土器である。この比率の高さが、片寄りを見せる原因であるが、同時にこの遺構の特徴でもある。破片数で見ると、このほかに、中国系白磁皿が4.8%、中国系青花皿が3.23%見られる。碗は瀬戸・美濃系天目茶碗である。

破片数では、食膳具(A)に次いで貯蔵具(C)が8.06%、調度具(D)が8.06%、調理具(B)4.84%となっており、この方が実態を反映していると考えられる。貯蔵具(C)の8.06%の内訳は、すべて大甕である。調度具(D)8.06%は、すべて在地系②火鉢である。

III-1 b期のB-12区SK66(17世紀前半～中頃)でも、個体数と破片数の差異が大きいが、これも資料数が少ないためである。中でも、破片数での調理具(B)が58.72%を占めるが、これはほとんど焙烙であり、これがデータの片寄りの原因である。ここでは、個体数が実態に近いものと考えられる。さて、この遺構では、食膳具(A)は、個体数で67.9%を占める。このうち、碗は全体の10.82%、皿は55.74%を占め、皿が碗の5倍に上る。

次いで調理具(B)が15.57%を数える。これは、先述のようにすべて在地系①の焙烙である。調度具(D)も15.36%に上るが、これもすべて在地系①の土師質土器灯明皿である。土師質土器の灯明皿と灯芯痕のない皿の比率は、先のB-6区SE02(16世紀後半～17世紀初頭)と大きく違っている。SE02では、灯芯痕のある灯明皿は見られなかった。しかし、ここでは灯明皿15.36%、灯芯痕のない皿11.99%と灯明皿の方が多し。この二つの遺構の時間経過の間に、土師質土器の主たる使用目的の変化があったことが窺える。貯蔵具(C)は1.18%で、ここでは少ない。これは、丹波系小壺1点の数値である。

SK69以下の4遺構は、III-2 a期(17世紀後半～18世紀初頭)の同時期の遺構である。従って、相互比較をしつつ見て行きたい。ただし、このうちのB-4区SK69とB-9区SK98は、元禄年間の大火災(元禄十二年(1699)か元禄十五年(1702))の時の廃棄にかかるもので、やや古い。

まず、食膳具(A)では、B-4区SK69が51.1%、B-6区SE01が74.1%、B-9区SK98が64.23%、B-12区SE03が61.23%で、平均して62.66%となる。これは、前回報告した(藤井他1997年)、同時期の遺構B-13区SK26の62%とも一致し、一般的傾向であろう。その内訳は、表9のようになる。

これを見ると、碗はB-4区SK69でやや比率が低いが、他は極端に変わらず、平均して40.42%である。皿はB-4区SK69が少し高いが、これも他はそれほど変わらず、平均して17.42%である。これが、この時期の傾向であろう。このうち、碗の主体は肥前系磁器にあり、平均して26.27%を占める。次に多いのが唐津系①の京焼風陶器である。これは、唐津系③呉器手碗と共に、最近喫茶用の茶碗ではないかと言われていた(長佐古1996年)。また、この時期には「くらわんか手」が登場するが、碗全体に占める比率は、B-4区SK69で35.87%、B-6区SE01で11.5%、B-9区SK98で16.19%、B-12区SE03で14.65%となり、平均19.55%と、まだそれほど多くない。

皿でも、バラツキはあるものの肥前系磁器が平均11.2%と、主体を占める。続いて在地系①の土師質土器皿(平均3.09%)、唐津系④(その他)(平均21.4%)となり、この時期の特徴を表す唐津系②(嬉野焼)は1.99%と少ない。「くらわんか手」が、皿全体に占める比率は、B-9区SK98で2.8%を示すが、他では

0%となり、ほとんどない。

調理具（B）は、B-6区SE01で6.29%、B-12区SE03で2.72%、と他の遺構が12%~15%を占めるのに対して対照的であるが、その要因は土師質土器焙烙の量による。播鉢は必ず出土しているが、B-4区SK69で12.66%、B-6区SE01で0%（破片数で0.9%）、B-9区SK98で3.27%、B-12区SE03で1.97%となり、バラツキが多い。ただ、B-9区SK98を除いて、すべて丹波系である。B-9区SK98では、堺・明石系が出土しているが、これは混入でなければ伊丹郷町遺跡で確認された最も古い例となる。

貯蔵具（C）では、甕・壺類は大半を丹波系が占める。瓶類は、丹波系と肥前系が見られる。肥前系瓶は、後述する神仏壇の普及と関係するかも知れない。

調度具（D）では、B-12区SE03だけが35.05%と、その他の遺構の6.96%~13.94%という数字から突出している。その原因は、灯明皿の量である。B-12区SE03だけが、在地系①灯明皿が32.02%と多い。灯明皿は、この時期まで在地系①の土師質土器手づくね皿である。B-12区SE03で1点柿釉灯明皿の破片が見られるが、これは混入品である。このほか、先の報告書でも触れたが、仏飯具が登場するのがこの時期である。今回も、B-9区SK98で5.58%、B-6区SE01で1.76%見られる。これはすべて肥前系染付である。香炉もB-9区SK98で0.38%、B-6区SE01で0.34%見られる。神仏壇の普及と関係すると考えられる。このほか、B-6区SE01で香油壺が破片数で1.36%、鬢水入が同じく破片数で0.45%出ていることにも注目したい。香油壺は、以後出土量が増す。

Ⅲ-3期のB-6区SE04（18世紀末~19世紀後半）と同時期の遺構は、これまでも計測した例は多い。一見して、食膳具（A）が38.26%と少なく、調理具（B）が34.89%と多くなっていることに気付く。この傾向は、前回の報告のB-2-2区SK722（18世紀後半~19世紀前半）の38%と25%に近く、この頃の一般的傾向であることが知られる。調理具（B）は前回同様、京焼系（伊賀・信楽焼を含む）の土瓶3.64%、

表9 Ⅲ-2 a期遺構 碗・皿個体数比率（数値は%）

	B-4区SK69	B-6区SE01	B-9区SK98	B-12区SE03	平均値
碗	20.09	57.61	46.92	37.07	40.42
肥前系	11.79	44.35	34.9	14.04	26.27
唐津系① （京焼風陶器）	8.30	10.15	7.59	23.03	12.27
唐津系④ （その他=唐津焼）		3.11	4.42		3.77
皿	26.42	11.99	13.73	17.51	17.41
肥前系	22.71	6.29	6.43	9.36	11.2
在地系①	2.84	3.19	1.25	5.06	3.09
唐津系④ （その他=唐津焼）	0.87	1.42	3.17	3.09	2.14
唐津系②（嬉野焼）		1.09	2.88		1.99



土鍋・行平0.73%やこれに伴う蓋などが増えたためである。この頃から鍋料理が増えたことを示している。爛徳利も0.33%であるが、見られる。

貯蔵具（C）では、丹波系甕・壺のほかに、泉州系の土師質土器火消壺が少量見られる。調度具（D）では、柿釉灯明皿1.5%、京焼系灯明皿・灯明受皿1.06%、植木鉢1.25%、深草焼涼炉0.21%、在地系②の火鉢0.06%などがあり、新たな器種の出現が著しい。その他（E）に分類したのは、ミニチュア土製品であるが、これもさまざまなものが合わせて10.87%も出土している。

## （2）第51・97次調査遺構

前述のように、以下の資料は近世初頭の遺構の分析データを補足するために追加する資料である。出土点数が少なく、数値が一定しないが、いくつかの傾向が読み取れる。

Ⅲ-1 a期の第51次調査B-2-1区SK479では、食膳具（A）が65.7%、調度具（D）が22.09%、調理具（B）が12.21%を占める。貯蔵具（C）は、破片数で4.76%見られるが、ごく少ない。食膳具（A）の内訳は、皿が全体の65.7%、碗は個体数では現れず、破片数で19.05%となっている。調度具（D）では、在地系①の火入れ（1個体）が22.09%のすべてである。調理具（B）は、播鉢9.88%と焙烙2.33%が見られる。貯蔵具（C）の破片数4.76%は、大甕である。

第97次調査D-6区SP507も、同時期の資料であるが、さらに資料数が少ないため、構成比は片寄りを見せている。個体数では、食膳具（A）が76.47%、調度具（D）が23.53%ですべてとなる。食膳具（A）の内訳は、皿がすべてである。破片数では、碗・皿共に16.17%である。調度具（D）は、破片数では、お歯黒壺が16.67%ある。このほか、破片数では調理具（B）が16.67%、貯蔵具（C）が16.67%見られる。調理具（B）は焙烙、貯蔵具（C）は大甕である。

Ⅲ-1期の第51次調査B-2-1区SK461は、Ⅲ-1 b期でも早い時期の17世紀前半で収まる資料である。これも資料数が少なく、個体数では混入した須恵器のパーセンテージが高くなっている。構成比は破片数の方が実態に近い。破片数では食膳具（A）が57.14%を占める。皿が21.43%、碗が14.28%で、皿がやや多い。このほか、大鉢・小鉢が21.43%見られる。次いで、調理具（B）が14.29%見られるが、これはすべて播鉢である。貯蔵具（C）はなく、調度具（D）が破片数で7.14%ある。これは灯明皿である。

第97次調査D-6区SK428は、肥前系磁器を含み、SK461よりやや長く存続したと考えられる遺構である。これも、総数が少なく、個体数では片寄りが強すぎるため、破片数で見えていく。まず食膳具（A）は53.33%で、やはり半数近い。内訳は、碗が全体の26.67%、皿が13.33%である。このほか、小鉢が13.34%ある。次いで、貯蔵具（C）の20.01%となるが、これは中甕・大甕の破片である。調理具（B）は13.33%で、すべて播鉢となっている。

第51次調査B-2-1区SK455の資料は、Ⅲ-1 b期からⅢ-2 a期にかけてのものである。ここでは、焙烙の破片が33.85%と多く、破片数では調理具（B）の値が40%と高くなっている。調理具は、他に播鉢が6.15%ある。食膳具（A）は破片数で53.85%となっており、半数を越えている。内訳は、碗が全体の38.47%、皿が7.69%である。貯蔵具（C）は4.62%である。内訳は、小瓶・大甕である。

## 10 産地別構成比について

### (1) 第63・83・86次調査遺構

Ⅱ～Ⅲ－1 a期のB－6区S E02（16世紀後半～17世紀初頭）の産地別構成比は、在地系①の土師質土器が98.71%を占める。その99.57%が皿であることは、先に見た通りである。この遺構は、前述のように、総点数が少ないために個体数では、このような片寄りが現れる。破片数では、備前系9.68%、中国系の輸入陶磁器が8.06%、在地系②の瓦質土器が8.06%見られる。備前系は播鉢（破片数4.84%）・甕（破片数4.84%）で、同じ器種を生産する丹波系甕（破片数3.23%）を上回っている。このように備前系や中国系、在地系②の瓦質土器が一定の比率を占めるのは、この時期の特徴であり、同じ時期の比率を求めた第23次調査S F01・S F02・S D10のデータ（藤井直正他1992年）に近い。しかし、相違点も見られる。第23次調査の遺構のデータでは、中国系が総合値で16.2%を占め、2倍に上る。これは、第23次調査の調査地点が上級家臣の屋敷地と推定されており、それに対して、この宮ノ前地区は城下町地域に当たるために現れた、階層差による差異と考えられる。

Ⅲ－1 b期のB－12区S K66（17世紀前半～中頃）では、在地系①の42.93%が最も多い。この内訳は、前述のように、焙烙と灯明皿・皿である。このほか、破片数で在地系②瓦質土器の不明が1.74%見られる。在地系①の42.93%に次いで多いのが、唐津系④（その他＝胎土目積・砂目積の唐津焼製品）である。ここでは砂目積皿が中心で36.16%を占め、肥前系皿（初期伊万里染付皿）の5.39%をはるかに上回る。肥前系は青磁・染付を合わせると17.55%を占めるが、中心となるのは碗で9.97%である。すなわち、碗は肥前系、皿は唐津系④の唐津焼という組み合わせが見られる。

次いで丹波系が見られるが、その全体に占める内訳は、大鉢1.18%、小壺1.18%、播鉢が破片数1.16%となる。調理具（B）、貯蔵具（C）を占有しており、先のS E02で見られた備前系製品はない。他の同時期の遺構でも、備前系製品はあっても極わずかで、この時期に流通の変化があったことが読み取れる。

中国系赤絵大碗が1点含まれることにも注目したい。伊丹郷町遺跡の旧城下町地域は輸入陶磁器が少ないが、その中でこの赤絵大碗は目を引く存在である。高級品として、珍重されたのではなかろうか。

Ⅲ－2 a期のB－4区S K69以下の4遺構は、17世紀後半～18世紀初頭の近時期の遺構である。従って、相互比較をしつつ見て行きたい。ただし、このうちのB－4区S K69とB－9区S K98は、元禄年間の大火災（元禄十二年（1699）か元禄十五年（1702））の時の廃棄にかかるもので、やや古い。

産地別で最も多いのが肥前系で、B－4区S K69が合わせて37.34%、B－9区S K98が49.33%、B－6区S E01が61.11%、B－12区S E03が31.28%となる。B－4区S K69とB－12区S E03の比率が低いが、前者は丹波系の甕・播鉢・壺が特に多く、後者は在地系①の灯明皿が多いことに起因している。また、2遺構の資料数が少ないことも、片寄りの原因である。肥前系の内訳は、碗・皿・猪口・瓶・仏飯具・香炉などで、先にみたように食膳具・調度具の主流を占めている。

「くらわんか手」は、碗・皿の説明で触れたが、染付碗が中心で、平均して19.55%と、まだそれほど多くない。

2番目に多いものは、遺構によりバラツキが見られる。しかし、在地系①が多いのが一般的な傾向である。資料数が多く、バラツキの少ないB－6区S E01で12.23%、B－9区S K98で21.35%を数える。内訳は、B－6区S E01で焙烙6.29%、小皿3.19%、灯明皿2.77%となる。

このほか、唐津系①（京焼風陶器）は、元禄年間の廃棄土壌B－9区S K98で7.6%、B－4区S K69で8.3%を数える。これに対して、B－6区S E01では10.14%、B－12区S E03で25.75%と、18世紀初頭に

かかる後者の方が多くなっている。これも、この時期の特徴的な遺物であるが、微視的にみると出土量に時期差がある。主に碗であり、先に触れたように、喫茶用と考えられる。

唐津系④（その他）は、元禄年間の廃棄土壌B-4区SK69で2.84%とやや低いが、B-9区SK98で8.75%見られる。一方、18世紀初頭にかかるB-6区SE01では4.53%、B-12区SE03で3.09%と、後者の方が少なくなっている。

Ⅲ-3期のB-6区SE04（18世紀末～19世紀後半）は、一見して非常に多くの生産地のものが含まれていることがわかる。肥前系は、ここでも食膳具・調度具を中心にして多いが、比率は26.74%に減っている。これは、先に見たように、京焼系土瓶・土鍋・行平や京焼系灯明具などが増えたためであるが、絶対数が減ったわけではない。絶対数は、むしろ増えている。17世紀代に比べれば、雲泥の差である。このうち、「くらわんか手」の比率は、肥前系碗の中では37.47%、皿の中では27.17%である。この時期では3割前後となっている。

京焼系は33.29%と肥前を凌駕している。このほか、瀬戸・美濃系（新製焼＝磁器）7.14%、萩焼系1.52%、三田系0.33%など新たに流通してきたものも多く見られる。明らかに時代の変化を感じさせる動きである。

## (2) 第51・97次調査遺構

Ⅲ-1 a期の第51次調査B-2-1区SK479では、瀬戸・美濃系②が58.14%を占めるが、それは皿1個体の数値である。唐津系④（その他）7.56%は、胎土目積唐津焼皿である。破片数では、このほか、小碗、大鉢が含まれており、唐津系④（その他）が47.62%と約半数を占めている。この時期では、破片数のデータの方が一般的傾向であろう。その内容は、小碗・小皿・大鉢で、食膳具の大半を占めている。個体数で2番目に多いのは、在地系①である。これは、火入れと焙烙である。破片では、これに小皿が加わる。次に多い丹波系9.88%は、播鉢。このほか、破片数では備前系が4.76%見られるが、これは大甕である。備前系・丹波系は、共に中世以来の調理具・貯蔵具を賄っている。

同時期の資料の第97次調査D-6区SP507では、破片数の方が実態に近い。多いのは、在地系①の土師質土器と唐津系④（その他）で、共に33.33%である。在地系①は、土師質土器焙烙と器種不明品である。唐津系④（その他）は中碗・小皿で、SK479同様食膳具が中心である。次いで、備前系と丹波系が16.67%ある。備前系はお歯黒壺、丹波系は大甕である。

Ⅲ-1期の第51次調査B-2-1区SK461は、破片数では唐津系④（その他）が35.71%を占め、やはり最も多い。これも、碗・皿・鉢などの食膳具である。これが、伊丹郷町遺跡の17世紀前半頃までの一般的あり方であろう。注目すべきは、中国製品がほとんど出土しないことである。同時期の大阪城下町遺跡や堺環濠都市遺跡では、中国製青花や赤絵などが出土しているが、ここではほとんど見られない。この点が、大きく異なっている。次いで多いのが、破片数で28.57%の丹波系である。これは、播鉢・小鉢である。在地系①は、土師質土器灯明皿が中心である。

D-6区SK428は同時期で、肥前系磁器を含む。ここでも、破片数で見た方が実態に近い。破片数では、丹波系の値が33.33%と大きい。小鉢・播鉢・甕が、その内容である。次いで唐津系④（その他）26.67%で、やはり食膳具が中心である。肥前系白磁は、中碗である。碗には、他に中国系の中国製青花が1点、6.67%含まれる。瀬戸・美濃系②は6.67%で、碗である。瀬戸・美濃系も、碗・皿など食膳具の一翼を担っているが、少ない。ほかに、備前系が6.67%あるが、これは中甕である。

第51次調査B-2-1区SK455の資料は、Ⅲ-1 b期からⅢ-2 a期にかけてのものである。これは、

先述したように、焙烙が多くて、破片数では片寄りがある。しかし、資料数が少なく、個体数でも全体像が見えない。一応、破片数をもとにすると、最も多いのは、肥前系染付と在地系①の36.93%である。在地系①は、破片が多くなる焙烙であることから、これを割り引いて考えると、肥前系染付が第1位となろう。器種は、碗・皿類である。唐津系④も碗・皿類を中心とするが、6.15%と少なくなっている。唐津系①（京焼風陶器）3.08%を加えても、及ばない。この頃に、両者の転換が認められる。ほかに、丹波系が15.38%ある。小鉢・播鉢・大甕である。この器種のシェアを争っていた備前系は、もう見られない。このほか、在地系②瓦質土器不明品が1.54%含まれる。

## 11. まとめ

今回のデータは、総じて前回のデータを補強する結果となった。さらに、II～III-1 a期（16世紀後半～17世紀初頭）のB-6区SE02とIII-1 b期（17世紀前半～中頃）のB-12区SK66を加えることによって、近世初頭の遺物組成の変化が明かとなった。具体的には、備前系播鉢・甕の衰退と丹波系播鉢・甕・壺の伸張、瓦質土器製品の衰退、土師質土器皿の灯明皿への転換などが、両者の間に起こっている。さらに注目すべきは、この時期に中国製品がほとんど出土しないことである。同時期の大阪城下町遺跡や堺環濠都市遺跡では、中国製青花や赤絵はもとより、ベトナム・タイなど東南アジア各地の多彩な陶磁器が出土しているが、ここではほとんど見られない。この点が、大きく異なっている。一言でいえば、器種構成・産地組成共に非常にシンプルで、出土量も少なく、必要最低限のものしかないと言える。近世初頭の遺構の分析データを補足するために追加した、第51・97次調査資料でも、同様の傾向がうかがえた。

また、全体を通して、III-1期よりIII-2期、さらにIII-3期へと遺物の総量や器種が増えていくことも、データの上で裏付けることができた。遺物組成の上では、近世を大きく3つに区別することができそうである。

ただ、その変化の微細な時期は、大阪や堺とは、少し違っているようである。柿釉灯明皿の普及などは、少し遅れる。化粧道具なども、遅れて普及しているようである。今後は、このような点について、他の都市遺跡との比較が課題となろう。

表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(1)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
1	S E02	極小皿	在地系①	A	4	6.45	1.13	12.04
2	S E02	小皿	在地系①	A	35	56.45	8.13	86.67
3	S E02	火鉢	在地系②	D	5	8.06	0	0
4	S E02	大甕	その他(須恵器)	混入	1	1.61	0	0
5	S E02	中瓶	その他(須恵器)	混入	1	1.61	0	0
6	S E02	播鉢	備前系	B	3	4.84	0.04	0.43
7	S E02	大甕	備前系	C	3	4.84	0	0
8	S E02	大甕	丹波系	C	2	3.23	0	0
9	S E02	中碗(天目茶碗)	瀬戸・美濃系②(その他)	A	1	1.61	0.04	0.43
10	S E02	不明	唐津系④(その他)	不明	1	1.61	0	0
11	S E02	中碗	肥前系(白磁)(混入)	混入	1	1.61	0	0
12	S E02	小皿	中国系(白磁)	A	2	3.23	0.04	0.43
13	S E02	中皿	中国系(白磁)	A	1	1.61	0	0
14	S E02	中碗	中国系(青花)	A	1	1.61	0	0
15	S E02	小皿	中国系(青花)	A	1	1.61	0	0
総数					62		9.38	
16	S K66	極小皿	在地系①	A	1	0.58	1	4.05
17	S K66	小皿	在地系①	A	5	2.91	1.96	7.94
18	S K66	灯明皿	在地系①	D	9	5.23	3.79	15.36
19	S K66	焙烙	在地系①	B	99	57.56	3.84	15.57
20	S K66	不明	在地系②	不明	3	1.74	0	0
21	S K66	大鉢	丹波系	A	1	0.58	0.29	1.18
22	S K66	播鉢	丹波系	B	2	1.16	0	0
23	S K66	小壺	丹波系	C	1	0.58	0.29	1.18
24	S K66	中碗	唐津系④(その他)	A	1	0.58	0	0
25	S K66	小皿	唐津系④(その他)	A	26	15.12	8.21	33.28
26	S K66	中皿	唐津系④(その他)	A	4	2.33	0.71	2.88
27	S K66	中鉢	唐津系④(その他)	A	2	1.16	0.04	0.16
28	S K66	中皿	肥前系(青磁)	A	1	0.58	0.54	2.19
29	S K66	小碗	肥前系(染付)	A	1	0.58	0.13	0.53
30	S K66	中碗	肥前系(染付)	A	12	6.98	2.29	9.28
31	S K66	大碗	肥前系(染付)	A	1	0.58	0.04	0.16
32	S K66	小皿	肥前系(染付)	A	2	1.16	1.33	5.39
33	S K66	大碗	中国系(赤絵)	A	1	0.58	0.21	0.85
総数					172		24.67	
34	S K69	小皿	在地系①	A	2	4.08	0.13	2.84
35	S K69	灯明皿	在地系①	D	6	12.24	0.33	7.21
36	S K69	火鉢	在地系②	D	2	4.08	0.08	1.75
37	S K69	播鉢	丹波系	B	4	8.16	0.58	12.66
38	S K69	大壺	丹波系	C	1	2.04	0.21	4.59
39	S K69	中甕	丹波系	C	2	4.08	0.33	7.21
40	S K69	大甕	丹波系	C	3	6.12	0.71	15.5
41	S K69	中碗	唐津系①(京焼風陶器)	A	3	6.12	0.38	8.3
42	S K69	小皿	唐津系④(その他)	A	1	2.04	0.04	0.87
43	S K69	中皿	唐津系④(その他)	A	2	4.08	0	0
44	S K69	大鉢	唐津系④(その他)	A	4	8.16	0.08	1.75
45	S K69	中碗	肥前系(白磁)	A	1	2.04	0	0
46	S K69	小皿	肥前系(白磁)	A	3	6.12	0.62	13.54
47	S K69	小碗	肥前系(染付)	A	1	2.04	0.17	3.71
48	S K69	中碗	肥前系(染付)	A	3	6.12	0.04	0.87
49	S K69	中碗	肥前系(染付くらわんか)	A	4	8.16	0.33	7.21
50	S K69	小皿	肥前系(染付)	A	2	4.08	0	0
51	S K69	中皿	肥前系(染付)	A	2	4.08	0.38	8.3
52	S K69	猪口	肥前系(染付)	A	1	2.04	0.13	2.84
53	S K69	中瓶	肥前系(染付)	C	1	2.04	0	0
54	S K69	小皿	肥前系(青磁)	A	1	2.04	0.04	0.87
総数					49		4.58	
55	S E01	小皿	在地系①	A	17	7.69	0.38	3.19
56	S E01	灯明皿	在地系①	D	4	1.81	0.33	2.77
57	S E01	焙烙	在地系①	B	27	12.22	0.75	6.29
58	S E01	瓦燈(傘部)	在地系②	D	4	1.81	0	0
59	S E01	瓦燈(皿部)	在地系②	D	2	0.9	0	0
60	S E01	瓦燈	在地系②	D	4	1.81	0	0
61	S E01	不明	在地系②	不明	1	0.45	0	0
62	S E01	火鉢	泉州系(混入)	混入	1	0.45	0.04	0.34

表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(2)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
63	S E01	焜炉	泉州系 (混入)	混入	2	0.9	0.13	1.09
64	S E01	鬢水入れ	その他 (柿釉)	D	1	0.45	0	0
65	S E01	ミニチュア (土鈴)	産地不明	E	2	0.9	0.67	5.62
66	S E01	小鉢	丹波系	A	2	0.9	0.04	0.34
67	S E01	播鉢	丹波系	B	2	0.9	0	0
68	S E01	中甕	丹波系	C	4	1.81	0	0
69	S E01	大甕	丹波系	C	3	1.36	0	0
70	S E01	大瓶	丹波系	C	3	1.36	0	0
71	S E01	急須	万古系 (混入)	混入	1	0.45	0.29	2.43
72	S E01	中碗 (天目茶碗)	瀬戸・美濃系② (その他)	A	1	0.45	0	0
73	S E01	中碗	瀬戸・美濃系② (その他)	A	2	0.9	0	0
74	S E01	水鉢	瀬戸・美濃系② (その他)	C	1	0.45	0	0
75	S E01	小碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	3	1.36	0.75	6.29
76	S E01	中碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	12	5.43	0.38	3.19
77	S E01	大碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	2	0.9	0.08	0.67
78	S E01	中皿	唐津系② (嬉野焼)	A	5	2.26	0.13	1.09
79	S E01	中碗	唐津系④ (その他)	A	5	2.26	0.33	2.77
80	S E01	大碗	唐津系④ (その他)	A	1	0.45	0.04	0.34
81	S E01	小皿	唐津系④ (その他)	A	1	0.45	0	0
82	S E01	中皿	唐津系④ (その他)	A	4	1.81	0.17	1.42
83	S E01	土瓶	京焼系 (その他) (混入)	混入	1	0.45	0	0
84	S E01	土鍋	京焼系 (その他) (混入)	混入	2	0.9	0	0
85	S E01	小碗	肥前系 (白磁)	A	2	0.9	0.25	2.1
86	S E01	中碗	肥前系 (白磁)	A	7	3.17	0.21	1.76
87	S E01	小壺	肥前系 (白磁)	C	3	1.36	0.21	1.76
88	S E01	水滴	肥前系 (白磁)	D	1	0.45	0.25	2.1
89	S E01	小皿	肥前系 (白磁くらわんか)	A	2	0.9	0	0
90	S E01	中碗	肥前系 (青磁)	A	2	0.9	0	0
91	S E01	香炉	肥前系 (青磁)	D	2	0.9	0.04	0.34
92	S E01	小杯	肥前系 (染付)	A	1	0.45	0	0
93	S E01	小碗	肥前系 (染付)	A	12	5.43	1.42	11.9
94	S E01	中碗	肥前系 (染付)	A	27	12.22	2.58	21.63
95	S E01	中碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	23	10.41	0.79	6.62
96	S E01	大碗	肥前系 (染付)	A	1	0.45	0.04	0.34
97	S E01	仏飯具	肥前系 (染付)	D	2	0.9	0.21	1.76
98	S E01	小皿	肥前系 (染付)	A	4	1.81	0.75	6.29
99	S E01	中皿	肥前系 (染付)	A	3	1.36	0	0
100	S E01	猪口	肥前系 (染付)	A	1	0.45	0	0
101	S E01	大瓶	肥前系 (染付)	C	1	0.45	0	0
102	S E01	蓋物蓋	肥前系 (染付)	A	1	0.45	0.29	2.43
103	S E01	中碗	肥前系 (青磁染付) (混入)	混入	1	0.45	0.04	0.34
104	S E01	香油壺	肥前系 (色絵)	D	3	1.36	0	0
105	S E01	蓋物蓋	肥前系 (色絵)	A	1	0.45	0.21	1.76
106	S E01	猪口	瀬戸・美濃系 (新製焼) (混入)	混入	1	0.45	0.13	1.09
総数					221		11.93	
107	S K98	小皿	在地系①	A	5	1.87	0.13	1.25
108	S K98	灯明皿	在地系①	D	10	3.75	0.83	7.98
109	S K98	焙烙	在地系①	B	48	17.98	1.26	12.12
110	S K98	不明	在地系①	不明	1	0.37	0	0
111	S K98	不明	泉州系 (混入)	混入	2	0.75	0	0
112	S K98	小瓶	その他 (柿釉) (混入)	混入	1	0.37	0	0
113	S K98	播鉢	堺・明石系	B	3	1.12	0.13	1.25
114	S K98	小鉢	丹波系	A	6	2.25	0	0
115	S K98	播鉢	丹波系	B	6	2.25	0.21	2.02
116	S K98	小壺	丹波系	C	1	0.37	0.13	1.25
117	S K98	中壺	丹波系	C	2	0.75	0.08	0.77
118	S K98	中甕	丹波系	C	3	1.12	0	0
119	S K98	大甕	丹波系	C	10	3.75	0.13	1.25
120	S K98	中瓶	丹波系	C	1	0.37	0	0
121	S K98	中碗 (天目茶碗)	瀬戸・美濃系② (その他)	A	1	0.37	0	0
122	S K98	中碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	9	3.37	0.54	5.19
123	S K98	大碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	3	1.12	0.25	2.4
124	S K98	小皿	唐津系② (嬉野焼)	A	3	1.12	0.13	1.25
125	S K98	中皿	唐津系② (嬉野焼)	A	5	1.87	0.17	1.63
126	S K98	小鉢	唐津系② (嬉野焼)	A	1	0.37	0.04	0.38
127	S K98	中碗	唐津系③ (呉器手)	A	1	0.37	0	0

表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(3)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
128	S K98	小碗	唐津系④ (その他)	A	1	0.37	0.04	0.38
129	S K98	中碗	唐津系④ (その他)	A	8	3	0.42	4.04
130	S K98	大碗	唐津系④ (その他)	A	2	0.75	0	0
131	S K98	小皿	唐津系④ (その他)	A	2	0.75	0.08	0.77
132	S K98	中皿	唐津系④ (その他)	A	9	3.37	0.25	2.4
133	S K98	中鉢	唐津系④ (その他)	A	3	1.12	0	0
134	S K98	大鉢	唐津系④ (その他)	A	6	2.25	0.08	0.77
135	S K98	香炉	唐津系④ (その他)	D	1	0.37	0.04	0.38
136	S K98	大瓶	唐津系④ (その他)	C	6	2.25	0	0
137	S K98	中瓶	京焼系 (鏝絵)	C	1	0.37	0.33	3.17
138	S K98	土瓶	京焼系 (灰)(混入)	混入	2	0.75	0	0
139	S K98	小碗	肥前系 (白磁)	A	3	1.12	0.25	2.4
140	S K98	中碗	肥前系 (白磁)	A	8	3	0.21	2.02
141	S K98	中皿	肥前系 (白磁)	A	1	0.37	0.04	0.38
142	S K98	猪口	肥前系 (白磁)	A	1	0.37	0	0
143	S K98	中瓶	肥前系 (白磁)	C	1	0.37	0	0
144	S K98	小碗	肥前系 (青磁)	A	1	0.37	0	0
145	S K98	小皿	肥前系 (青磁くらわんか)	A	1	0.37	0.04	0.38
146	S K98	小碗	肥前系 (染付)	A	16	5.99	0.63	6.06
147	S K98	小碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	3	1.12	0.58	5.58
148	S K98	中碗	肥前系 (染付)	A	35	13.11	1.71	16.44
149	S K98	中碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	13	4.87	0.21	2.02
150	S K98	大碗	肥前系 (染付)	A	1	0.37	0.04	0.38
151	S K98	仏飯具	肥前系 (染付)	D	2	0.75	0.58	5.58
152	S K98	極小皿	肥前系 (染付)	A	1	0.37	0.29	2.79
153	S K98	小皿	肥前系 (染付)	A	1	0.37	0.13	1.25
154	S K98	中皿	肥前系 (染付)	A	4	1.5	0.17	1.63
155	S K98	中皿	肥前系 (染付くらわんか)	A	2	0.75	0	0
156	S K98	猪口	肥前系 (染付)	A	4	1.5	0.25	2.4
157	S K98	中瓶	肥前系 (染付)	C	2	0.75	0	0
158	S K98	大瓶	肥前系 (染付)	C	2	0.75	0	0
159	S K98	中鉢	肥前系 (青磁染付)	A	1	0.37	0	0
160	S K98	中瓶	肥前系 (色絵)	C	1	0.37	0	0
総数						267	10.4	
161	S E03	小皿	在地系①	A	19	15.83	0.54	5.06
162	S E03	灯明皿	在地系①	D	12	10	3.42	32.02
163	S E03	焙烙	在地系①	B	3	2.5	0.08	0.75
164	S E03	灯明皿	その他 (柿釉)(混入)	混入	1	0.83	0	0
165	S E03	小鉢	丹波系	A	1	0.83	0	0
166	S E03	播鉢	丹波系	B	5	4.17	0.21	1.97
167	S E03	小甕	丹波系	C	1	0.83	0	0
168	S E03	中甕	丹波系	C	2	1.67	0	0
169	S E03	大甕	丹波系	C	2	1.67	0	0
170	S E03	大瓶	丹波系	C	1	0.83	0	0
171	S E03	小碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	1	0.83	0.13	1.22
172	S E03	中碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	18	15	2.29	21.44
173	S E03	大碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	2	1.67	0.04	0.37
174	S E03	中鉢	唐津系① (京焼風陶器)	A	7	5.83	0.29	2.72
175	S E03	中碗	唐津系③ (呉器手)	A	1	0.83	0	0
176	S E03	中碗	唐津系④ (その他)	A	1	0.83	0	0
177	S E03	小皿	唐津系④ (その他)	A	3	2.5	0.33	3.09
178	S E03	中皿	唐津系④ (その他)	A	1	0.83	0	0
179	S E03	中瓶	京焼系 (灰)	C	1	0.83	0	0
180	S E03	不明	京焼系 (その他)	不明	1	0.83	0	0
181	S E03	中碗	肥前系 (白磁)	A	4	3.33	0.33	3.09
182	S E03	大碗	肥前系 (白磁)	A	1	0.83	0.04	0.37
183	S E03	小皿	肥前系 (白磁)	A	2	1.67	0.83	7.77
184	S E03	中皿	肥前系 (白磁)	A	2	1.67	0	0
185	S E03	小瓶	肥前系 (白磁)	C	1	0.83	0	0
186	S E03	中碗	肥前系 (青磁)	A	1	0.83	0	0
187	S E03	小杯	肥前系 (染付)	A	1	0.83	0.04	0.37
188	S E03	小碗	肥前系 (染付)	A	1	0.83	0.13	1.22
189	S E03	中碗	肥前系 (染付)	A	9	7.5	0.25	2.34
190	S E03	中碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	2	1.67	0.58	5.43
191	S E03	大碗	肥前系 (染付)	A	1	0.83	0.04	0.37
192	S E03	小皿	肥前系 (染付)	A	1	0.83	0.04	0.37

表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(4)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
193	S E 03	中皿	肥前系 (染付)	A	3	2.5	0.13	1.22
194	S E 03	猪口	肥前系 (染付)	A	1	0.83	0.38	3.56
195	S E 03	灰吹	肥前系 (染付)	D	2	1.67	0.42	3.93
196	S E 03	小瓶	肥前系 (染付)	C	1	0.83	0	0
197	S E 03	中瓶	肥前系 (染付)	C	2	1.67	0	0
198	S E 03	大瓶	肥前系 (染付)	C	1	0.83	0	0
199	S E 03	中碗	肥前系 (色絵)	A	1	0.83	0.13	1.22
総数					120		10.68	
200	S E 04	焙烙	在地系①	B	49	8.67	1.5	2.37
201	S E 04	火鉢	在地系①	D	2	0.35	0	0
202	S E 04	灯明皿	在地系①	D	1	0.18	0	0
203	S E 04	火鉢	在地系②	D	2	0.35	0.04	0.06
204	S E 04	不明	在地系②	不明	1	0.18	0	0
205	S E 04	風炉	泉州系	D	3	0.53	0	0
206	S E 04	火消し壺	泉州系	C	6	1.06	0	0
207	S E 04	火消し壺蓋	泉州系	C	2	0.35	0.29	0.46
208	S E 04	七厘 (さな)	泉州系	D	4	0.71	0.83	1.31
209	S E 04	灯明皿	その他 (柿釉)	D	11	1.95	0.95	1.5
210	S E 04	小瓶	その他 (柿釉)	C	1	0.18	0	0
211	S E 04	燭台 (?)	その他 (施釉)	D	1	0.18	0	0
212	S E 04	涼炉	その他 (深草)	D	4	0.71	0.13	0.21
213	S E 04	ミニチュア (瓶)	産地不明	E	1	0.18	0.25	0.4
214	S E 04	ミニチュア (硯)	産地不明	E	1	0.18	1	1.58
215	S E 04	ミニチュア (衝立)	産地不明	E	1	0.18	0.92	1.46
216	S E 04	ミニチュア (筆箱)	産地不明	E	1	0.18	0.33	0.52
217	S E 04	ミニチュア (天神)	産地不明	E	1	0.18	0.5	0.79
218	S E 04	ミニチュア (大黒)	産地不明	E	1	0.18	0.33	0.52
219	S E 04	ミニチュア (水滴)	産地不明	E	3	0.53	0.42	0.66
220	S E 04	ミニチュア (植木鉢)	産地不明	E	1	0.18	0.33	0.52
221	S E 04	ミニチュア (鈴)	産地不明	E	1	0.18	1	1.58
222	S E 04	ミニチュア (不明)	産地不明	E	4	0.71	1.79	2.83
223	S E 04	小壺	備前系	C	1	0.18	0.46	0.73
224	S E 04	大壺	備前系	C	1	0.18	0	0
225	S E 04	播鉢	堺・明石系	B	26	4.6	1.54	2.44
226	S E 04	建水	丹波系	B	2	0.35	0.5	0.79
227	S E 04	植木鉢	丹波系	D	19	3.36	0.79	1.25
228	S E 04	お歯黒壺	丹波系	D	1	0.18	0	0
229	S E 04	中甕	丹波系	C	13	2.3	0.88	1.39
230	S E 04	大甕	丹波系	C	54	9.56	0.54	0.85
231	S E 04	大瓶	丹波系	C	14	2.48	0	0
232	S E 04	不明瓶	丹波系	C	1	0.18	0	0
233	S E 04	不明	丹波系	不明	1	0.18	0.21	0.33
234	S E 04	中碗 (天目)	瀬戸・美濃系② (その他)	A	1	0.18	0.04	0.06
235	S E 04	中鉢	瀬戸・美濃系② (その他)	A	4	0.71	0.88	1.39
236	S E 04	水鉢	瀬戸・美濃系② (その他)	C	17	3.01	1.75	2.77
237	S E 04	水滴	瀬戸・美濃系② (その他)	D	1	0.18	0	0
238	S E 04	土瓶	京焼系 (白)	B	5	0.88	0	0
239	S E 04	土鍋・行平	京焼系 (白)	B	1	0.18	0.13	0.21
240	S E 04	土鍋・行平蓋	京焼系 (白)	B	3	0.53	0.58	0.92
241	S E 04	中碗	京焼系 (銹釉)	A	1	0.18	0	0
242	S E 04	土瓶	京焼系 (銹釉)	B	7	1.24	0.46	0.73
243	S E 04	土鍋・行平蓋	京焼系 (銹釉)	B	1	0.18	0.21	0.33
244	S E 04	小碗	京焼系 (灰釉)	A	2	0.35	0.33	0.52
245	S E 04	中碗	京焼系 (灰釉)	A	1	0.18	0.21	0.33
246	S E 04	灯明皿	京焼系 (灰釉)	D	2	0.35	0.29	0.46
247	S E 04	灯明受皿	京焼系 (灰釉)	D	1	0.18	0.38	0.6
248	S E 04	水滴	京焼系 (灰釉)	D	4	0.71	0.33	0.52
249	S E 04	香炉	京焼系 (灰釉)	D	1	0.18	0.13	0.21
250	S E 04	土瓶	京焼系 (灰釉)	B	32	5.66	1.84	2.91
251	S E 04	蓋物蓋	京焼系 (灰釉)	A	2	0.35	1.33	2.1
252	S E 04	土鍋	京焼系 (灰釉)	B	6	1.06	0.21	0.33
253	S E 04	行平	京焼系 (灰釉)	B	2	0.35	0.04	0.06
254	S E 04	土鍋・行平	京焼系 (灰釉)	B	11	1.95	0.33	0.52
255	S E 04	土瓶・急須蓋	京焼系 (灰釉)	B	2	0.35	0.71	1.12
256	S E 04	土鍋・行平蓋	京焼系 (灰釉)	B	15	2.65	10.5	16.61
257	S E 04	小碗	京焼系 (その他)	A	3	0.53	0.33	0.52

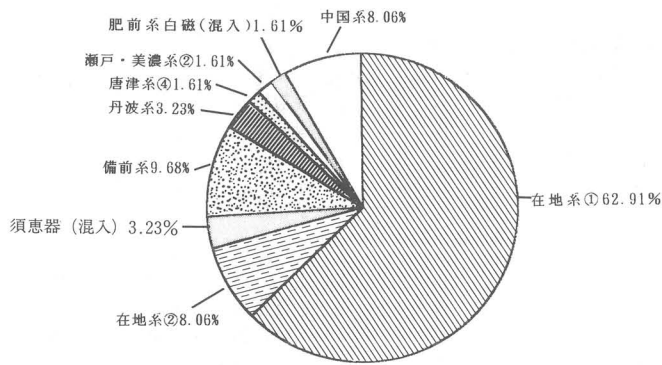


表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(5)

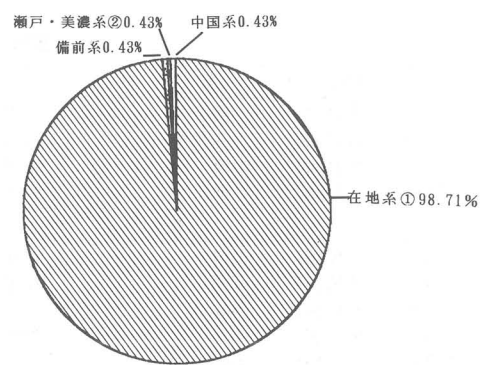
No.	遺構番号	器 種	産 地	用 途	破片数	%	個体数	%
258	S E 04	土瓶	京焼系 (その他)	B	16	2.83	0	0
259	S E 04	土鍋	京焼系 (その他)	B	5	0.88	0.04	0.06
260	S E 04	行平	京焼系 (その他)	B	11	1.95	1.29	2.04
261	S E 04	土鍋・行平	京焼系 (その他)	B	1	0.18	0	0
262	S E 04	急須蓋	京焼系 (その他)	B	1	0.18	0	0
263	S E 04	土瓶・急須蓋	京焼系 (その他)	B	2	0.35	1.13	1.79
264	S E 04	土鍋・行平蓋	京焼系 (その他)	B	6	1.06	0.25	0.4
265	S E 04	小碗	萩焼系	A	2	0.35	0.96	1.52
266	S E 04	小碗	産地不明陶器	A	1	0.18	0.79	1.25
267	S E 04	急須	産地不明陶器	B	2	0.35	0.58	0.92
268	S E 04	不明蓋	産地不明陶器	不明	1	0.18	0	0
269	S E 04	小碗	肥前系 (白磁)	A	2	0.35	0.42	0.66
270	S E 04	中碗	肥前系 (白磁)	A	2	0.35	0.25	0.4
271	S E 04	紅皿	肥前系 (白磁)	D	3	0.53	0.63	1
272	S E 04	猪口	肥前系 (白磁)	A	1	0.18	0	0
273	S E 04	中水注	肥前系 (青磁)	C	2	0.35	0	0
274	S E 04	中碗	肥前系 (青磁くらわんか)	A	1	0.18	0	0
275	S E 04	小杯	肥前系 (染付)	A	1	0.18	0	0
276	S E 04	小碗	肥前系 (染付)	A	8	1.42	1.38	2.18
277	S E 04	小碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	6	1.06	1.88	2.97
278	S E 04	中碗	肥前系 (染付)	A	25	4.42	2	3.16
279	S E 04	中碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	8	1.42	0.92	1.46
280	S E 04	大碗	肥前系 (染付)	A	2	0.35	0.25	0.4
281	S E 04	大碗	肥前系 (染付くらわんか)	A	1	0.18	0.13	0.21
282	S E 04	小皿	肥前系 (染付)	A	3	0.53	1.17	1.85
283	S E 04	小皿	肥前系 (染付くらわんか)	A	1	0.18	0.08	0.13
284	S E 04	中皿	肥前系 (染付)	A	2	0.35	0.17	0.27
285	S E 04	中皿	肥前系 (染付くらわんか)	A	2	0.35	0.42	0.66
286	S E 04	大皿	肥前系 (染付)	A	1	0.18	0	0
287	S E 04	小鉢	肥前系 (染付)	A	10	1.77	0.46	0.73
288	S E 04	小鉢	肥前系 (染付くらわんか)	A	4	0.71	1.46	2.31
289	S E 04	中鉢	肥前系 (染付)	A	3	0.53	0	0
290	S E 04	中鉢	肥前系 (染付くらわんか)	A	1	0.18	0.21	0.33
291	S E 04	段重	肥前系 (染付)	A	2	0.35	0.13	0.21
292	S E 04	蓋物	肥前系 (染付)	A	2	0.35	0.42	0.66
293	S E 04	爛徳利	肥前系 (染付)	B	4	0.71	0.21	0.33
294	S E 04	御神酒徳利	肥前系 (染付)	D	5	0.88	0.21	0.33
295	S E 04	水滴	肥前系 (染付)	D	8	1.42	0.75	1.19
296	S E 04	仏飯具	肥前系 (染付)	D	3	0.53	0.13	0.21
297	S E 04	中瓶	肥前系 (染付)	C	1	0.18	0	0
298	S E 04	花瓶	肥前系 (染付)	D	1	0.18	0.38	0.6
299	S E 04	中碗蓋	肥前系 (染付)	A	7	1.24	0.83	1.31
300	S E 04	中碗蓋	肥前系 (染付くらわんか)	A	2	0.35	0.96	1.52
301	S E 04	小碗	肥前系 (青磁染付)	A	1	0.18	0.38	0.6
302	S E 04	小碗	肥前系 (青磁染付くらわんか)	A	1	0.18	0	0
303	S E 04	小碗	肥前系 (色絵)	A	4	0.71	0.21	0.33
304	S E 04	段重蓋	肥前系 (色絵)	A	1	0.18	0.46	0.73
305	S E 04	小碗	瀬戸・美濃系 (新製焼)	A	6	1.06	1.17	1.85
306	S E 04	中碗	瀬戸・美濃系 (新製焼)	A	12	2.12	2.13	3.37
307	S E 04	蓋物	瀬戸・美濃系 (新製焼)	A	4	0.71	0	0
308	S E 04	中碗蓋	瀬戸・美濃系 (新製焼)	A	2	0.35	1.21	1.91
309	S E 04	小碗	三田系	A	1	0.18	0.21	0.33
310	S E 04	小鉢	三田系	A	1	0.18	0	0
総 数					565		63.2	
311	S K 479	小皿	在地系①	A	1	4.76	0	0
312	S K 479	火入れ	在地系①	D	1	4.76	0.38	22.09
313	S K 479	焙烙	在地系①	B	2	9.52	0.04	2.33
314	S K 479	大甕	備前系	C	1	4.76	0	0
315	S K 479	播鉢	丹波系	B	5	23.81	0.17	9.88
316	S K 479	小皿	瀬戸・美濃系② (その他)	A	1	4.76	1	58.14
317	S K 479	小碗	唐津系④ (その他)	A	4	19.05	0	0
318	S K 479	小皿	唐津系④ (その他)	A	3	14.29	0.13	7.56
319	S K 480	大鉢	唐津系④ (その他)	A	3	14.29	0	0
総 数					21		1.72	
320	S P 507	焙烙	在地系①	B	1	16.67	0	0
321	S P 507	不明	在地系①	不明	1	16.67	0.04	23.53

表10 伊丹郷町遺物計測基礎データ(6)

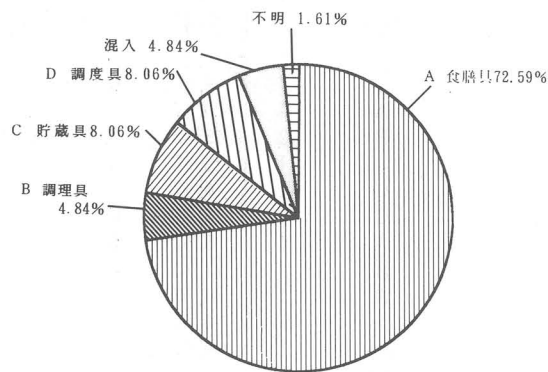
No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	%	個体数	%
322	S P 507	大甕	丹波系	C	1	16.67	0	0
323	S P 507	お歯黒壺	丹波系	D	1	16.67	0	0
324	S P 507	中碗	唐津系④ (その他)	A	1	16.67	0	0
325	S P 507	小皿	唐津系④ (その他)	A	1	16.67	0.13	76.47
総 数					6		0.17	
326	S K 461	小皿	在地系①	A	1	7.14	0.04	5.97
327	S K 461	灯明皿	在地系①	D	1	7.14	0.21	31.34
328	S K 461	小鉢	丹波系	A	2	14.29	0	
329	S K 461	播鉢	丹波系	B	2	14.29	0.04	5.97
330	S K 461	小碗	唐津系④ (その他)	A	1	7.14	0	
331	S K 461	中碗	唐津系④ (その他)	A	1	7.14	0	
332	S K 461	小皿	唐津系④ (その他)	A	2	14.29	0	
333	S K 461	大鉢	唐津系④ (その他)	A	1	7.14	0	
334	S K 461	大甕	その他 (須恵器)	混入	3	21.43	0.38	56.72
総 数					14		0.67	
335	S K 428	中甕	備前系	C	1	6.67	0	
336	S K 428	小鉢	丹波系	A	1	6.67	0.13	30.95
337	S K 428	播鉢	丹波系	B	2	13.33	0.29	69.05
338	S K 428	中甕	丹波系	C	1	6.67	0	
339	S K 428	大甕	丹波系	C	1	6.67	0	
340	S K 428	中碗	瀬戸・美濃系②	C	1	6.67	0	
341	S K 428	中碗	唐津系④ (その他)	A	1	6.67	0	
342	S K 428	小皿	唐津系④ (その他)	A	2	13.33	0	
343	S K 428	小鉢	唐津系④ (その他)	A	1	6.67	0	
344	S K 428	中碗	肥前系 (白磁)	A	1	6.67	0	
345	S K 428	小碗	肥前系 (染付) (混入)	混入	1	6.67	0	
346	S K 428	中碗	肥前系 (青磁) (混入)	混入	1	6.67	0	
347	S K 428	小碗	中国系 (青花)	A	1	6.67	0	
総 数					15		0.42	
348	S K 455	小皿	在地系①	A	2	3.08	0	0
349	S K 455	焙烙	在地系①	B	22	33.85	0.34	23.78
350	S K 455	不明	在地系②	不明	1	1.54	0	0
351	S K 455	小鉢	丹波系	A	4	6.15	0.38	26.57
352	S K 455	播鉢	丹波系	B	4	6.15	0	0
353	S K 455	大甕	丹波系	C	2	3.08	0	0
354	S K 455	中碗	唐津系① (京焼風陶器)	A	2	3.08	0.21	14.69
355	S K 455	小碗	唐津系④ (その他)	A	1	1.54	0	0
356	S K 455	中碗	唐津系④ (その他)	A	1	1.54	0.29	20.28
357	S K 455	中皿	唐津系④ (その他)	A	1	1.54	0	0
358	S K 455	中鉢	唐津系④ (その他)	A	1	1.54	0	0
359	S K 455	中碗	肥前系 (染付)	A	21	32.31	0.21	14.69
360	S K 455	小皿	肥前系 (染付)	A	2	3.08	0	0
361	S K 455	小瓶	肥前系 (染付)	C	1	1.54	0	0
総 数					65		1.43	



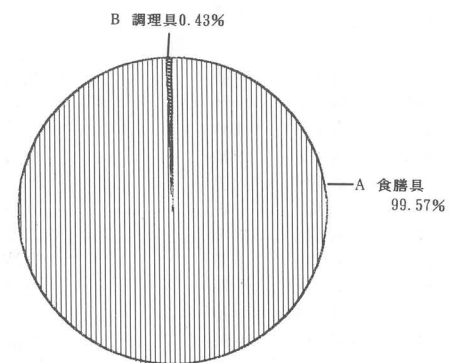
S E 0 2 産地別破片数グラフ



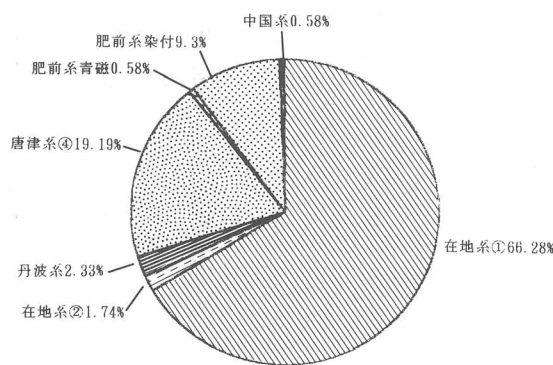
S E 0 2 産地別推定個体数グラフ



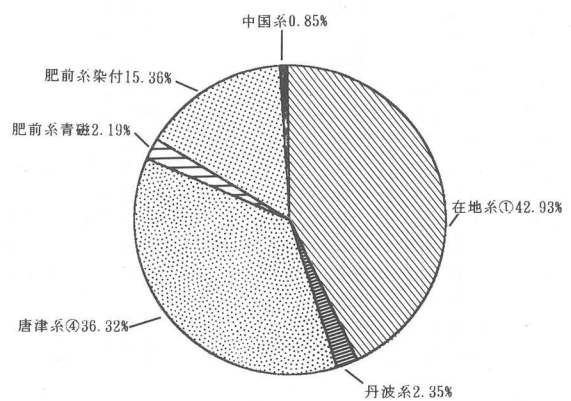
S E 0 2 用途別破片数グラフ



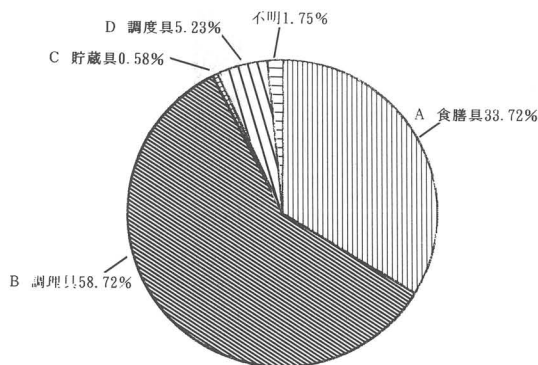
S E 0 2 用途別推定個体数グラフ



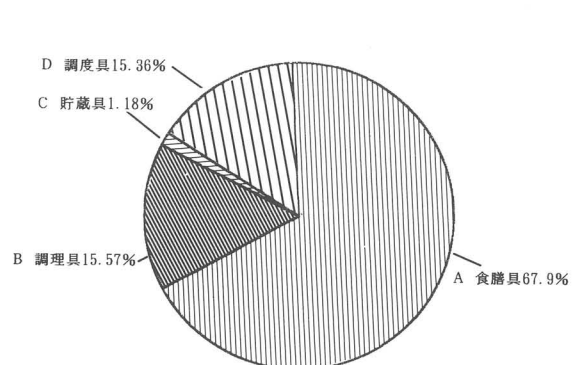
S K 6 6 産地別破片数グラフ



S K 6 6 産地別推定個体数グラフ

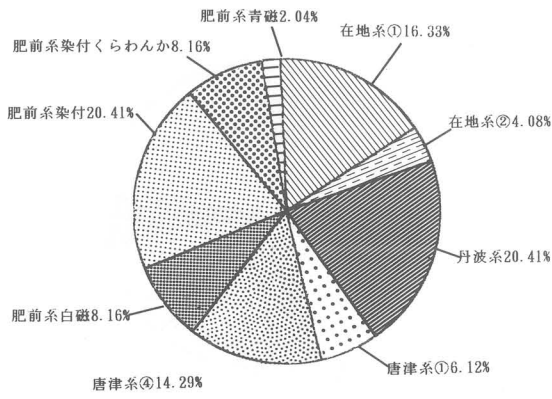


S K 6 6 用途別破片数グラフ

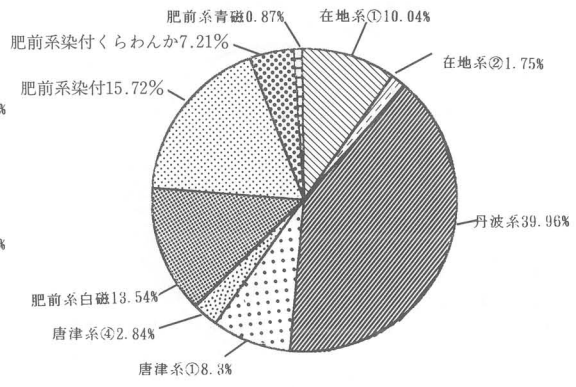


S K 6 6 用途別推定個体数グラフ

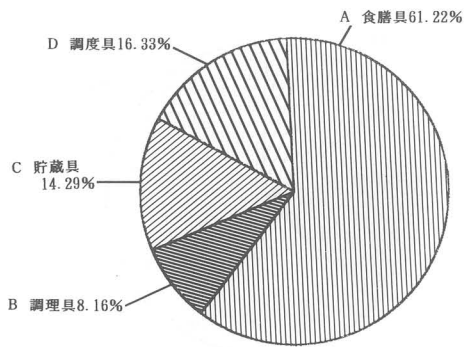
第164図 B-6区 S E 0 2・B-12区 S K 6 6産地別・用途別構成比グラフ(1)



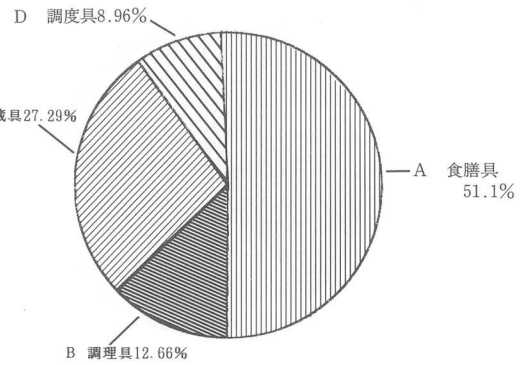
SK69産地別破片数グラフ



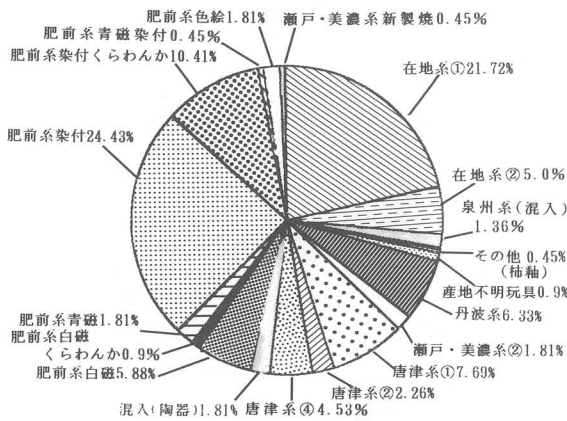
SK69産地別推定個体数グラフ



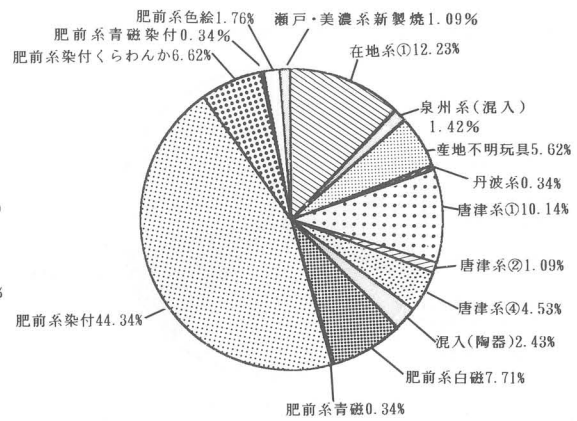
SK69用途別破片数グラフ



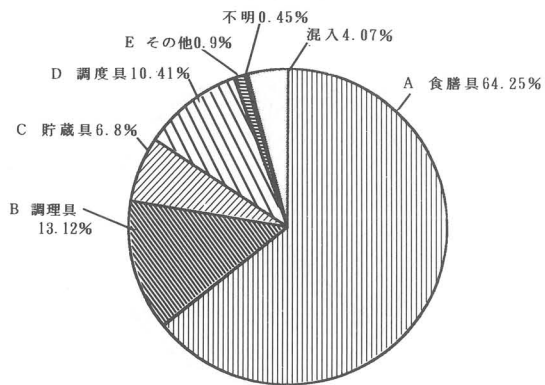
SK69用途別推定個体数グラフ



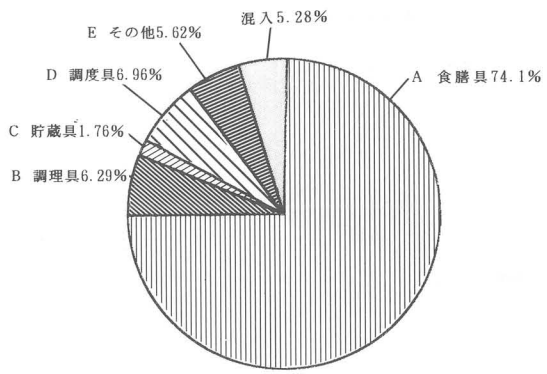
SE01産地別破片数グラフ



SE01産地別推定個体数グラフ

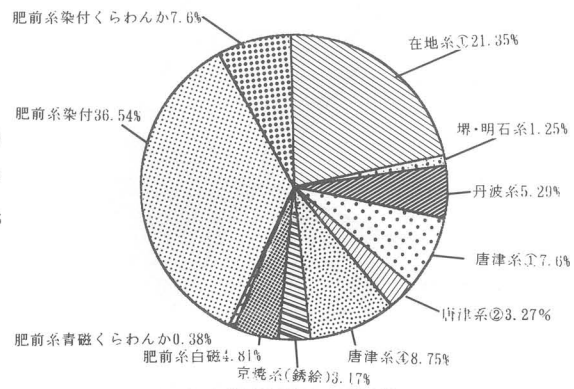
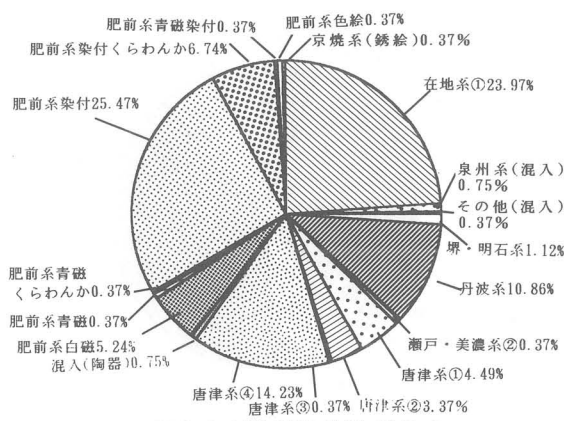


SE01用途別破片数グラフ



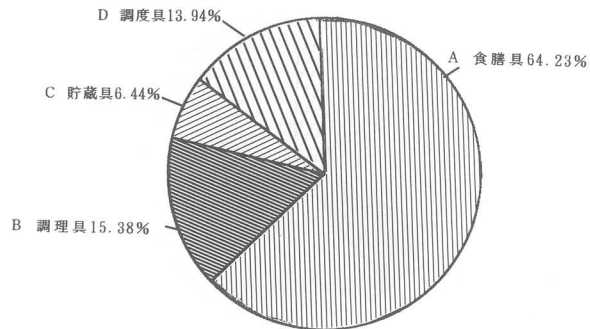
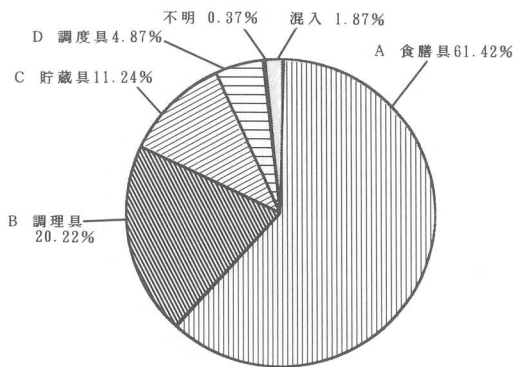
SE01用途別推定個体数グラフ

第165図 B-4区SK69・B-6区SE01産地別・用途別構成比グラフ(2)



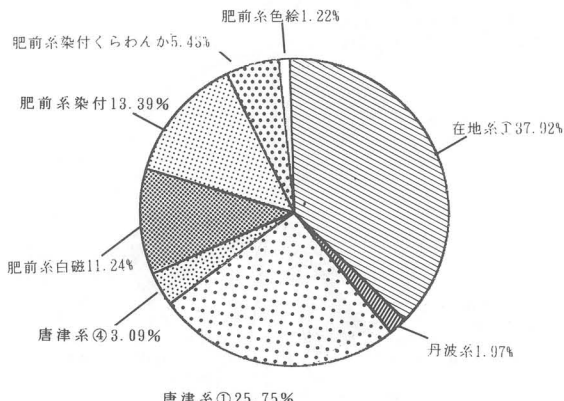
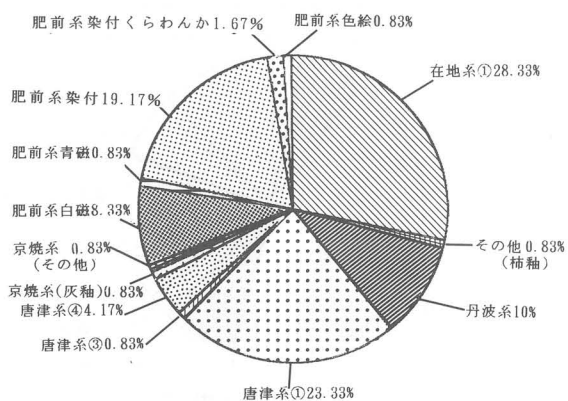
SK98産地別破片数グラフ

SK98産地別推定個体数グラフ



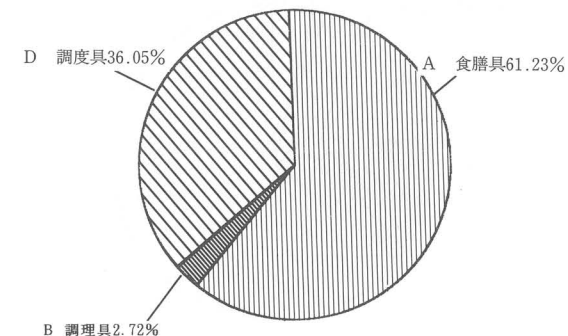
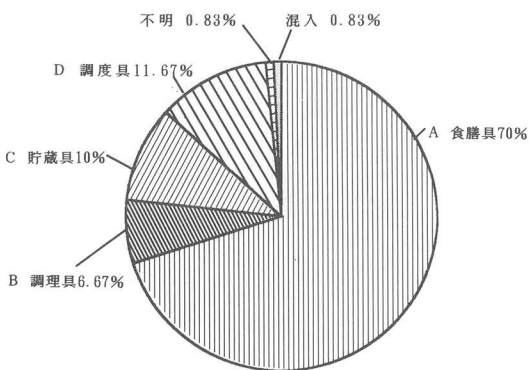
SK98用途別破片数グラフ

SK98用途別推定個体数グラフ



SE03産地別破片数グラフ

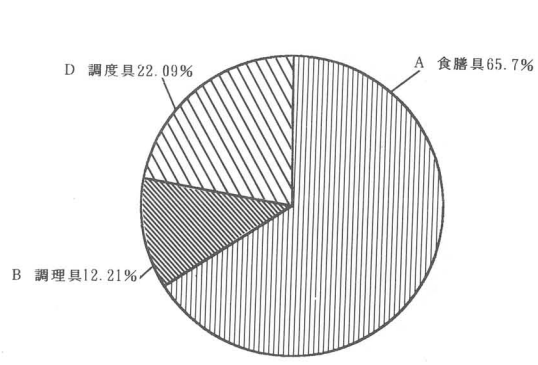
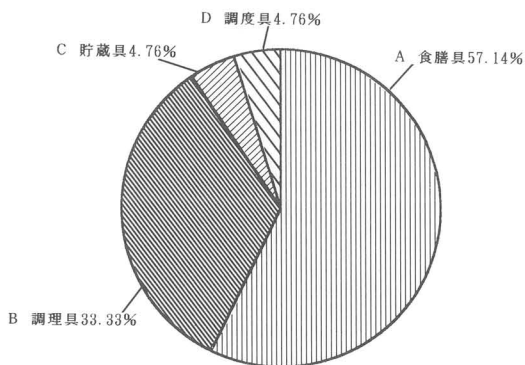
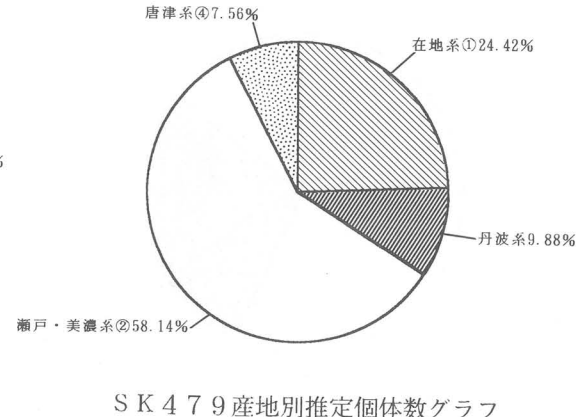
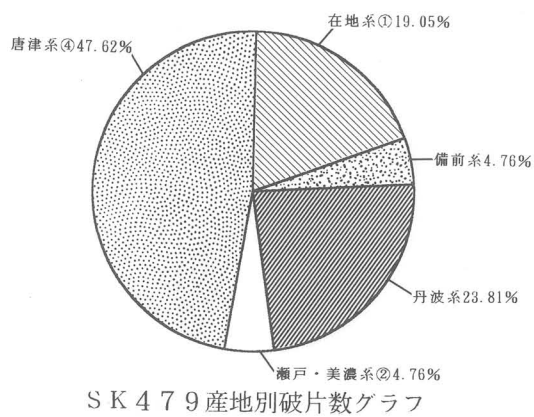
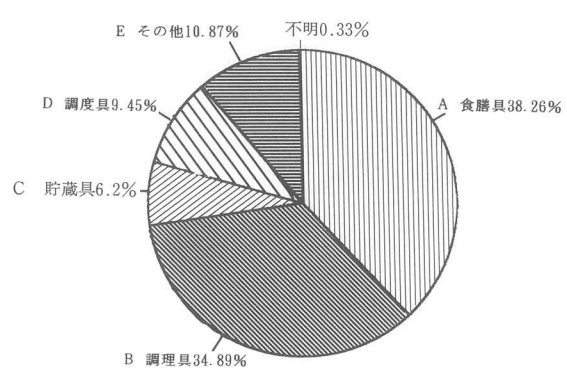
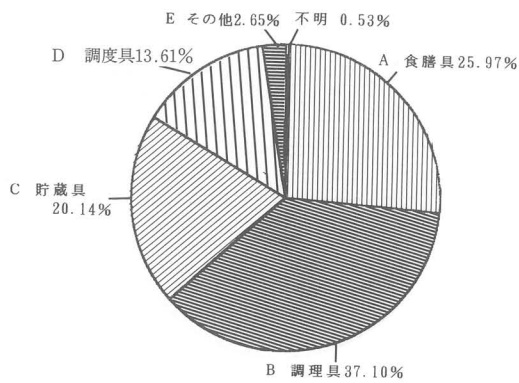
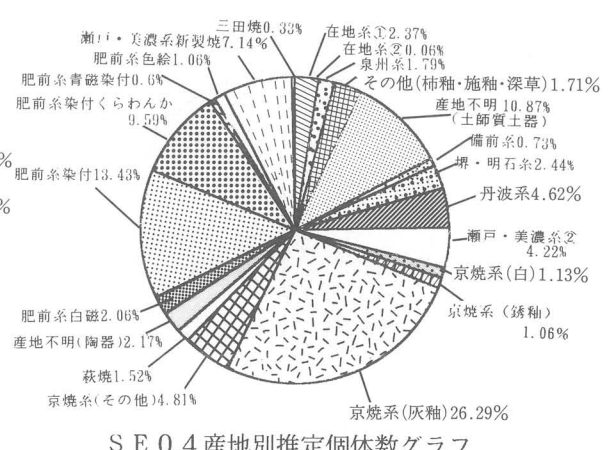
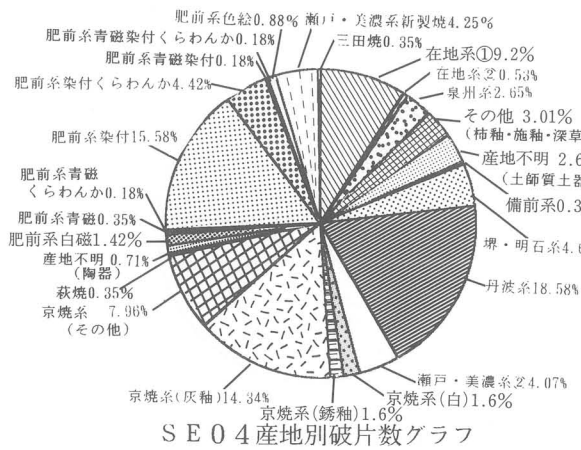
SE03産地別推定個体数グラフ



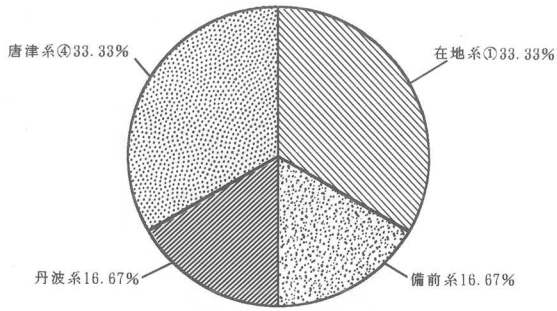
SE03用途別破片数グラフ

SE03用途別推定個体数グラフ

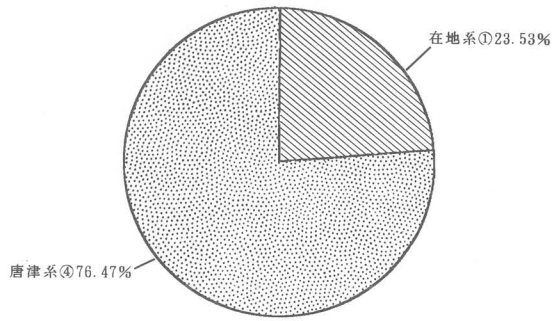
第166図 B-9区SK98・B-12区SE03産地別・用途別構成比グラフ(3)



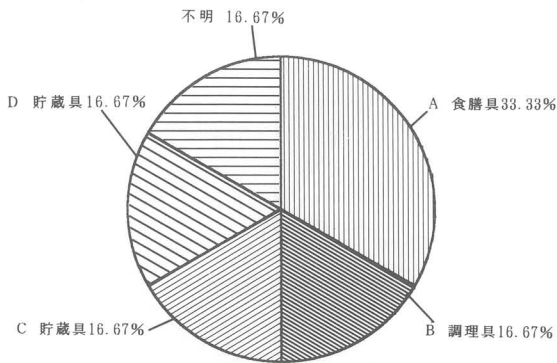
第167図 B-4区SE04・B-2-1区SK479産地別・用途別構成比グラフ(4)



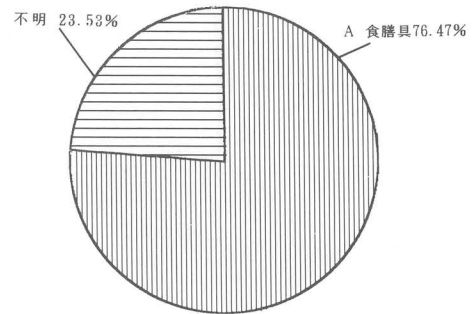
SP507産地別破片数グラフ



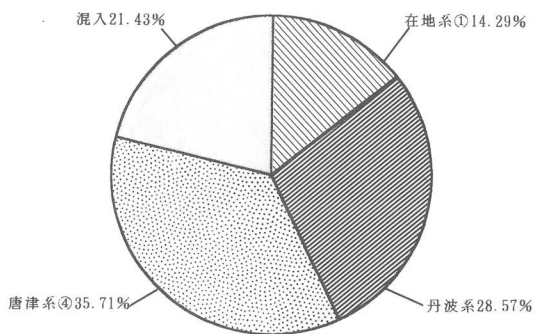
SP507産地別推定個体数グラフ



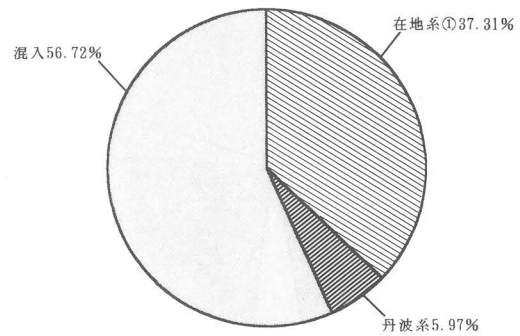
SP507用途別破片数グラフ



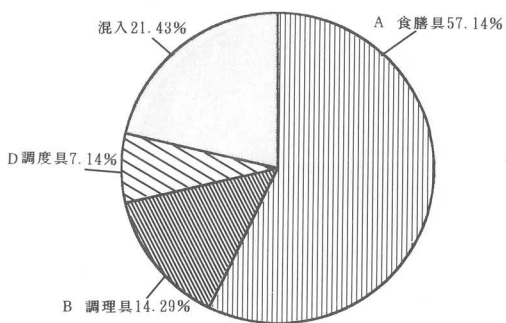
SP507用途別推定個体数グラフ



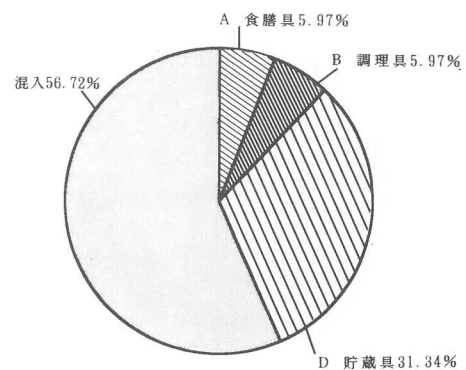
SK461産地別破片数グラフ



SK461産地別推定個体数グラフ

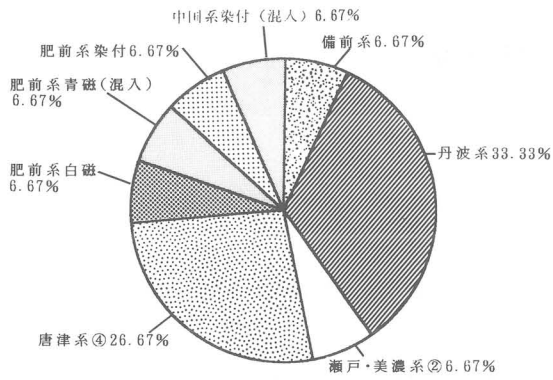


SK461用途別破片数グラフ

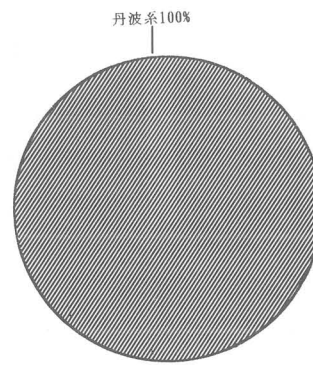


SK461用途別推定個体数グラフ

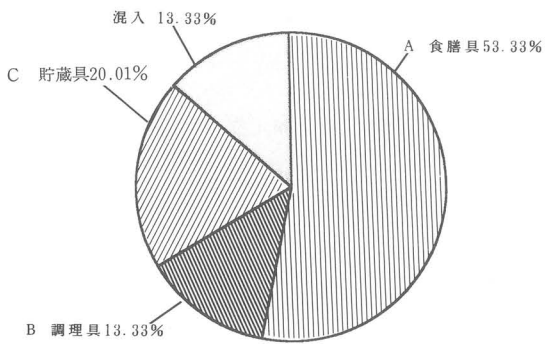
第168図 D-6区SP507・B-2-1区SK461産地別・用途別構成比グラフ(5)



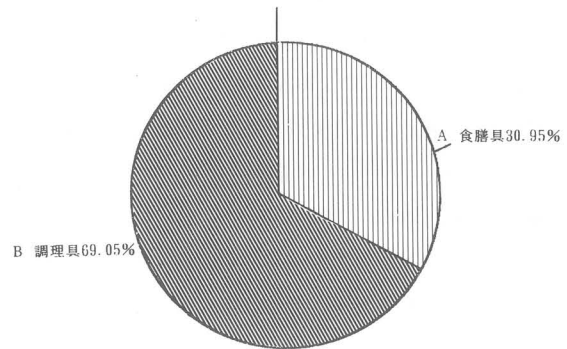
SK 4 2 8 産地別破片数グラフ



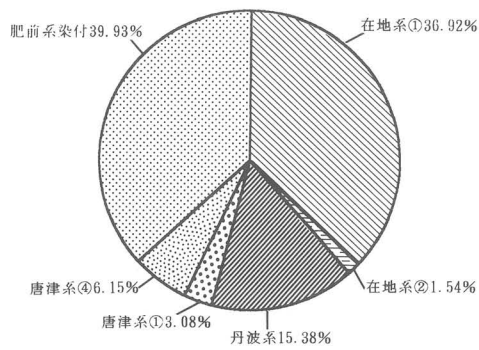
SK 4 2 8 産地別推定個体数グラフ



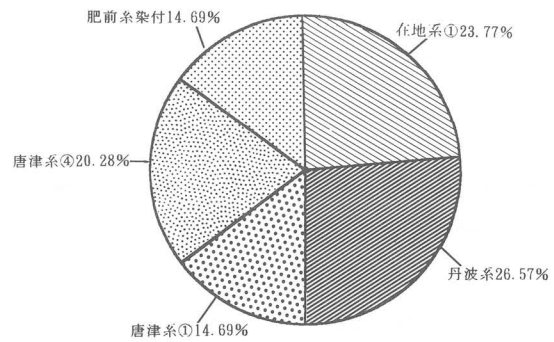
SK 4 2 8 用途別破片数グラフ



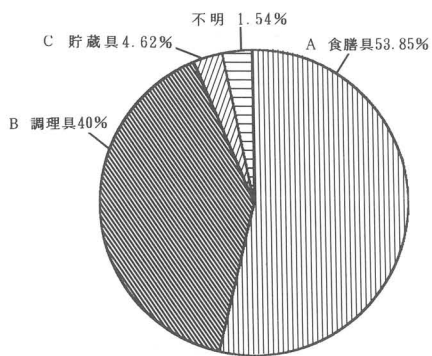
SK 4 2 8 用途別推定個体数グラフ



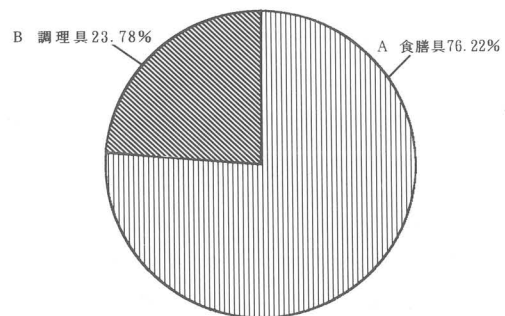
SK 4 5 5 産地別破片数グラフ



SK 4 5 5 産地別推定個体数グラフ



SK 4 5 5 用途別破片数グラフ



SK 4 5 5 用途別推定個体数グラフ

第169図 D-6区SK428・B-2-1区SK455産地別・用途別構成比グラフ(6)



## 参考・引用文献

- 青木重男『兵庫のやきもの』 神戸新聞総合出版センター 1993年
- 朝倉治彦・柏川修一『守貞謾稿』 第2巻 東京堂出版 1992年
- 有田町教育委員会『窯の谷・多々良の元窯 丸尾窯・樋口窯一町内古窯群分布調査報告 第2集一』 1989年
- 有田町教育委員会『赤絵町一佐賀県西松浦郡有田町1604番地の調査一』 1990年
- 井汲隆夫他『東京都新宿内藤町遺跡一放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』 新宿内藤町遺跡調査会 1992年
- 石神由貴「三田焼の変遷について一三輪明神窯跡出土品より」『日本の青磁 三田の青磁』 第12回歴史講演会別添資料 1999年
- 井上光貞監修『図説歴史散歩事典』 山川出版社 1979年
- 井上喜久男『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社 1992年
- 大阪府教育委員会『「府立大阪博物館」旧蔵美術工芸図版目録』 1991年
- 大塚達朗編『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 1992年
- 大橋康二『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989年
- 大橋康二『古伊万里の文様一初期肥前磁器を中心に一』 理工学社 1994年
- 大平 茂「下相野窯址一近世丹波焼の調査一」『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書』 兵庫県教育委員会 1992年
- 岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡一近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書』 兵庫県教育委員会 1989年
- 岡崎正雄他『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ 都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う発掘調査報告(1)』 兵庫県教育委員会 1997年
- 岡山市教育委員会社会教育部文化課編『木村コレクション 古備前図録』 1985年
- 小川啓司『そば猪口絵柄事典』 光芸社 1974年
- 小川 望「刻印からみた焼塩壺の系統性について」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡医学部付属病院地点』 1990年
- 小野政敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982年
- 小長谷正治「伊丹郷町発見の焙烙窯(兵庫県伊丹)」『関西近世考古学研究Ⅰ』 関西近世考古学研究会 1991年
- 小長谷正治・川口宏海「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究Ⅰ』 関西近世考古学研究会 1996年
- 小長谷正治他『兵庫県伊丹市有岡城跡 発掘調査報告書Ⅸ』 伊丹市教育委員会 1993年
- 小長谷正治他『伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査』 伊丹市教育委員会 1995年
- 垣内光次郎「江州高鳴硯の生産」『江戸遺跡研究会第7回大会江戸時代の生産遺跡』 江戸遺跡研究会 1994年
- 桂 又三郎『時代別 古備前名品図録』 光美術工芸 1973年
- 加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』 淡交社 1972年
- 川口宏海(a)「胞衣壺考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第9号』 大手前女子学園 1989年
- 川口宏海(b)「関西における住空間」『江戸遺跡研究会第2回大会江戸の住空間とその周辺』 1989年
- 川口宏海「近世在郷町における屋敷地利用の変遷一摂津国伊丹郷町を中心として」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第11号』 大手前女子学園 1991年
- 川口宏海(a)「第23次調査」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ一J R伊丹駅市街地再開発に伴う発掘調査報告書一』 第1分冊 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992年

- 川口宏海(b)「中・近世都市における便所遺構の所様相」『関西近世考古学研究Ⅲ』 関西近世考古学研究会 1992年
- 川口宏海「江戸時代の土師質土器の製作技法―兵庫県伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として―」『大手前女子短期大学  
・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第15号』 大手前女子学園 1995年
- 川口宏海(a)「池状遺構について」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 川口宏海(b)「土師質土器皿の分類について」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研  
究所 1997年
- 川口宏海「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『橿崎彰一先生古希記念論文集』 1998年
- 川口宏海「有岡城跡・伊丹郷町遺跡の井戸について」『史学論集―仏教大学文学部史学科創設三十周年記念』 1999年
- 河原正彦「丹波―近世以降の展開―」『世界陶磁全集4 桃山(一)』 小学館 1977年
- 関西近世考古学研究会編『近世陶磁器の諸様相―消費地における18・19世紀の器種構成―』 関西近世考古学研究会  
1994年
- 九州近世陶磁学会『第9回九州陶磁学会「江戸中・後期における九州・山口地方の陶器」―窯跡資料を中心とした  
―』 発表資料 1999年
- 古泉 弘『江戸の考古学』 ニュー・サイエンス社 1987年
- 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質焔炉について」『江戸在地土器の研究Ⅰ』 江戸在地土器研究会 1991年
- 駒込一丁目遺跡(日本住宅パネル工業協同組合ビル地区)調査団『豊島区埋蔵文化財報告10 伝中・上富士前Ⅱ』  
1998年
- 佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクションⅠ～Ⅵ』 1990～1998年
- 佐賀県立九州陶磁文化館『福岡の陶磁展』 1992年
- 佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- 白神典之「摺摺鉢考」『東洋陶磁VOL.9』 東洋陶磁学会 1989-92年
- 鈴木重治「京焼と京焼写し―生産と流通―」『江戸の陶磁器』 発表要旨資料編・江戸遺跡研究会 1990年
- 世界焔の博覧会波佐見町運営委員会『世界焔の博覧会 波佐見青磁・くらわんか展』 1996年
- 瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇 四』 1993年
- 田口昭二『美濃焼』 ニュー・サイエンス社 1985年
- 富樫雅彦他『三栄町遺跡』 東京都新宿区教育委員会 1988年
- 長崎県窯業試験場編『波佐見古陶磁文様集』 肥前波佐見焼振興会 1985年
- 永井久美男編『日本出土銭総覧』 兵庫県埋蔵銭調査会 1996年
- 長崎県教育委員会『現川焼窯跡発掘調査報告書』 1998年
- 長佐古真也「“江戸”遺跡に流通する量産陶器の編年(Ver.2.1)」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ～18世紀代を中  
心とする編年研究の試み～』 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 橿崎彰一・他監修『瀬戸市史 陶磁器篇 四』 瀬戸市史編纂委員会 1993年
- 橿崎彰一編「丹波」『日本陶磁全集11』 中央公論社 1977年
- 橿崎彰一他『萩焼古窯』 日本工芸会山口支部 1990年
- 成瀬晃司「江戸遺跡出土磁器碗・皿の変遷―文様、銘款を中心に―」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ～18世紀代  
を中心とする編年研究の試み～』 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 難波洋三「徳川氏大坂城時代の焙烙」『難波宮趾の研究第九』 大阪市文化財協会 1992年
- 波佐見町教育委員会『波佐見町内古窯群調査報告書―波佐見町文化財調査報告書第4集―』 1993
- 波佐見町教育委員会『長田山窯跡―波佐見町文化財調査報告書第4集―』 1997年
- 長谷川真「丹波焼播鉢について」『中世土器基礎研究Ⅳ』 日本中世土器研究会 1988年
- 長谷川真『伊丹郷町発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1995年
- 姫路市史編纂専門委員会『姫路市史』 第十五巻 中 別編文化財編Ⅰ 姫路市 1995年

- 福岡市美術館 尾崎直人編『ベトナムの陶磁器』 福岡市美術館 1992年
- 福岡市美術館 尾崎直人編『現川 長与 亀山展』 福岡市美術館 1993年
- 藤井直正「近衛家会所」所用の屋瓦』『地域研究いたみ第18号』 伊丹市立博物館 1987年
- 藤井直正・藤本史子・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰー三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書ー』 伊丹市教育委員会・大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 藤井直正・川口宏海・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町ⅡーJ R駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書ー』 第1分冊・第2分冊 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992年
- 藤井直正・川口宏海・藤本史子・小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子・山崎晴世『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳー宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書ー』 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1995年
- 藤井直正・川口宏海・赤松和佳・川上啓子・小出匡子・渡辺晴香『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴー宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書ー』 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 藤澤良祐「近世瀬戸磁器編年の再検討ー磁器端反碗を中心にー」『榑崎彰一先生古希記念論文集』 1998年
- 堀内秀樹「東京大学本郷内の遺跡出土陶磁器の編年の考察」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱー18世紀代を中心とする編年研究の試みー』 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 前川 要「有岡城惣構の再検討」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』 大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 前川 要「近世城下町発生に関する考古学研究」『ヒストリア第121号』 大阪歴史学会 1988年
- 前川 要「伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景」『いな文化財調査室だよりNo.2』 大手前女子大学史学研究所文化財調査室 1990年
- 前川 要『都市考古学の研究ー中世から近世への展開ー』 柏書房 1991年
- 間壁忠彦『備前焼』 ニュー・サイエンス社 1991年
- 間壁忠彦・間壁菫子「備前研究ノート (1~4)」『倉敷考古館研究集第1~3・18号』 倉敷考古館 1966年~1984年
- 満岡忠成・奥田直学編『世界陶磁全集4 桃山 (一)』 1977年
- 水野正好「江州高島産石硯資料瞥見録」『滋賀考古学論叢刊行会』 1985年
- 村上伸之「肥前における初期陶器生産に関する考察ー主として地域差の問題を中心にー」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 研究紀要第6号』 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 1997年
- 村上泰樹「明石城下搬入の明石周辺諸窯の製品」『歴史と神戸』 33巻 4号 1994年
- 森田克行『摂津高槻城本丸発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1984年
- 両角まり(a)「近世における土器の型式と系統ー土師質塩壺類の胎土分析ー」『東京考古14』 1996年
- 両角まり(b)「瓦質土師質土器の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱー18世紀代を中心とする編年研究の試みー』 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1996年
- 両角まり「土師質塩壺類」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰー江戸出土遺物による編年研究の試みー』 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年
- 八木哲浩他『伊丹市史』 第1~5巻伊丹市役所 1982年
- 八木哲浩他『伊丹資料叢書6 伊丹古絵図集成』 伊丹市役所 1982年
- 森田 勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 1982年
- 森村健一「福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年ーいわゆる「福建・広東産青花」「スワトウ」「呉須手・赤絵」の窯跡陶片と日本の遺跡出土品の比較ー」『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3 ー設立10周年記念論集ー』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1995年
- 和歌山県立博物館『紀州徳川家陶磁の美』 1995年

## 表紙図版解説

本冊の表紙には、本文中に収録している各遺構のうち、京焼系陶器を中心に刻印のあるものを抽出し、その刻印の拓影を集めてみた。配列は第170図の通りで、任意に並べただけで特別の意味はない。それぞれの刻印をもつ土器・陶器の出土地点と遺構、および年代については一覧表（表11）に示した。なお大きさは原寸の86%である。

元来、近世陶磁器に疎い私には、何の知識も持ち合わせていないが、『角川日本史辞典』（昭和41年12月、初版）を見ると、京焼について次の解説が載せられている。

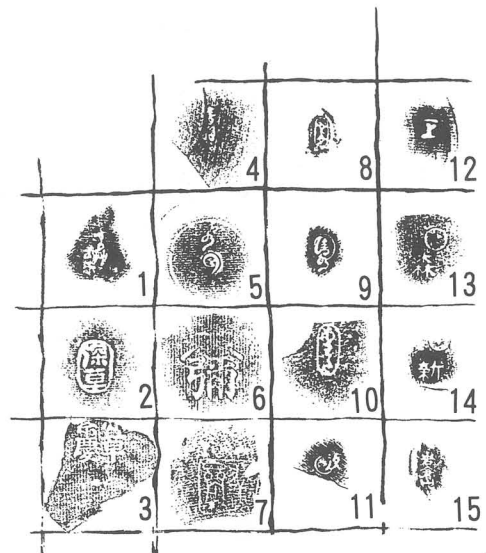
江戸初期以降、京都でつくられた楽焼以外の陶磁器の総称。従来、京都粟田口・押小路・深草で焼かれていたが、酒井田柿右衛門ら肥前の色絵磁器釉法の影響を受けて京焼色絵磁器がおこり、明暦（1655—57）のころ野々村仁清によって完成された。その後清水焼（古清水）・粟田焼の2系統に受け継がれ、地方窯にも影響、元禄（1688—1703）の末には尾形乾山が出て優れた作品を残した。乾山の死後一時不振となったが、18Cのはじめ磁器を焼き始めた清水焼が主流となって盛況を呈し今日に及ぶ。

読んでわかるように、まったく一般的な流れが述べられているだけで、細部にわたる発展過程等については触れられていない。

考古学の世界にあっては、肥前陶磁については大橋康二氏を中心とする方々によって精緻な研究がすすめられ、全国の消費地での調査・研究と相俟って大きな成果が収められている。これに対して京焼系陶磁については、地元京都・大坂・堺といった大消費地を抱えているにもかかわらず、その調査・研究はまったく進められていないという現状である。

本冊に紹介した京焼系陶磁の刻印は、その研究を進める上においても、これを入手した伊丹郷町の背景を考える上においても重要な資料となるものである。15の「岩倉山」の刻印を持つ筒型碗については大手前女子大学日本文化学科岡佳子講師の玉稿をいただいたが、京焼系陶磁研究の必要を痛感するとともに、これを進める上において貴重な文献ということができるのである。

（藤井直正）



第170図 表紙図版の刻印配列図

表11 表紙所載刻印一覧表

番 号	刻 印	調査次数	出土遺構	摘 要	年 代
1	ふ か 艸 □ □	第63次	B-6区 S K71	深草焼五徳、脚の付け根部	19C後~20C初
2	深 草	第86次	B-12区 S K06	深草焼火鉢、底部	19C前~後
3	園 慶 園 草	第51次	B-1-3区 S K138	深草焼風炉、高台内	18C後~19C初
4	音 羽	第86次	B-11-2区 S K05	音羽焼行平、底部	18C後~19C初
5	清 水	第63次	B-6区 S E01	京焼風陶器碗、高台内	17C後~18C初
6	彌	第83次	B-9区 S K24	土師質土器、姫路産 「弥七焜炉」、脚部外面	19C前~後
7	(不 明)	第86次	B-12区 S K31	土師質土器火鉢?	18C後~19C前
8	□ 女?	第86次	B-11-1区 S U03	産地不明陶器小杯、高台内	18C後~19C初
9	清 水	第86次	B-12区 S K132	京焼風陶器碗、高台内	17C末~18C初
10	あ ち た	第63次	B-4区 S E04	粟田焼涼炉、体部	19C前~後
11	清?	第83次	B-9区 S K98	京焼風陶器碗、高台内	17C後~18C初
12	上	第86次	B-12区 S K24	備前焼德利、底部	18C後~19C前
13	森	第63次	B-4区 S K69	京焼風陶器碗、高台内	17C後~18C初
14	新	第86次	B-12区 S E02	京焼風陶器碗、高台内	17C末~18C初
15	岩 倉 山	第86次	B-11-2区 S K05	岩倉焼陶器筒型碗、高台内	18C後~19C初

## 扉図版解説

古清水 色絵孔雀羽根文筒茶碗片（「岩倉山」印）

大手前女子大学 岡 佳 子

調査地中央に位置する廃棄土坑S K05より出土した、盛上手の古清水筒形茶碗片である。胎土はきめ細かく、卵白色を呈す。腰がくっきりと折れた筒形の形状をもち、内面のみ白釉を掛け、見込みに目跡が残る。その数は二箇だが、類品などから推測して三角の三点目跡であろう。茶碗の外表面は釉が掛からず露胎で、胴部に色絵装飾が施されている。文様は孔雀の尾羽根を意匠化した文様で、底部にも円斑がめぐらされている。白釉で文様を描いた上に、紺青を主体として緑、黄色の三色の色絵具が施され、絵具が二重にかかった部分が分厚い盛り上りをみせている。高台内の左側に「岩倉山」の銘が残っている。「音羽」銘の片口行平、丹波焼片口鉢、土師質土器焙烙などが同伴しており、時期は、ほぼ18世紀後半～19世紀初頭かと推測される。

岩倉山は、京都栗田口焼の陶家で、屋号は飴屋、栗田口東町に代々居住した。明治10年の『観古図説』には宝暦（1751～64）頃、北岩倉より栗田口に窯を移したのがその始まりと伝える。宝暦6年に、江戸時代初期より、将軍家茶碗の御用をつとめた三文字屋九左衛門家に代わって、岩倉山こと飴屋吉兵衛が、錦光山こと鍵屋 喜兵衛とともに、御用茶碗調進役をつとめるようになったという（『本朝陶器攷証』）。おそらく、岩倉山吉兵衛家は18世紀中期以後に、勢力を増した新興の栗田口陶家であったのだろう。寛政11年（1799）の栗田職方仲間の「定」（「雲林院宝山文書」）には、窯元筆頭に岩倉山吉兵衛の名が上がっている。19世紀前半には栗田口窯場を先導する有力窯元であった岩倉山も、維新の激動に耐え切れずに、明治初年に廃業した。

「岩倉山」銘の類品として、「銹地色絵孔雀羽根文茶碗」（大阪府教育委員会蔵）が伝世している。該遺物に比べると、茶碗の腰部が丸みを帯びた筒形を呈し、外面に高台裏まで鉄銹が塗られている。しかし、大きさはさほど変わらず、孔雀羽根文様の図様構成も同様で、内面のみ施釉されており、見込みに三点の目跡が残る。また江戸紀州藩上屋敷跡の19世紀前半の土坑S K11より「岩倉山」銘を持つ盛上手の土瓶が出土している。これも銹地で、孔雀羽根文を地文とし窓絵に山水図を描いている（『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告』千代田区紀尾井町調査会1988年）。この盛上手の技法は岩倉山窯独自のものではなかった。新装版『日本陶磁体系26 京焼』（河原正彦編、平凡社1991年）には、栗田口の有力陶家帯山与兵衛作として「盛上手 唐草文花瓶」が紹介されている。本品は銹地に盛上手の孔雀羽根文が施された花細口花瓶である。これら諸品から、紺青を主体とした孔雀羽根文の盛上げ手色絵は、19世紀の京都栗田口窯場の主要な技法として、広範に製作されたものと推測される。

本陶片は、後期京焼における盛上手の製作時期と、その流通のありかたが明確になる良質の出土品であるといえるだろう。



写真4 古清水色絵孔雀羽根文筒型碗



写真5 刻印



# 付章 研究篇

## 第1節 有岡城跡・伊丹郷町出土の貝類

### I はじめに

有岡城跡・伊丹郷町遺跡では、多くの遺物が出土する。その中には動物遺存体も出土する。その動物遺存体の内で8割が貝類である。出土する貝類は、時代を通してみられ、種類も豊富である。近年の発掘調査においても新しい種類のものが出土している。筆者は以前、宮ノ前地区出土の貝類資料を用いて伊丹郷町遺跡の食文化や商品流通を述べたことがある⁽¹⁾。

そこで今回は、対象区域を広げ、比較的調査の進んでいる宮ノ前地区の他にJR伊丹駅前周辺地区の資料などを加えて、伊丹郷町遺跡全体の貝類の特徴をみていきたいと思う。また、文献史料にみえる伊丹郷町の商家の食事に用いられた貝類の記録も、発掘資料と共に考察し、当時の食文化・流通を考えてみたい。

伊丹郷町遺跡で出土した貝類は23種類である(表1)。出土する貝類は、遺構外で採集されたものが大半であるが、今回対象とした資料は、年代が分かる遺構内から出土した貝類に限定した。対象とした遺構に関しては表2に、調査地点の位置については第1図にまとめた。対象とした遺構は総数78カ所である。

### II 貝類出土の調査区の概要と時期区分

#### (1) 調査区の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、兵庫県伊丹市のほぼ中程に位置する。中世以降、在地武士伊丹氏や戦国大名荒木村重の城下町として発展するが、天正十一年(1585)に廃城となった後、江戸時代には酒造業で栄える在郷町となる。

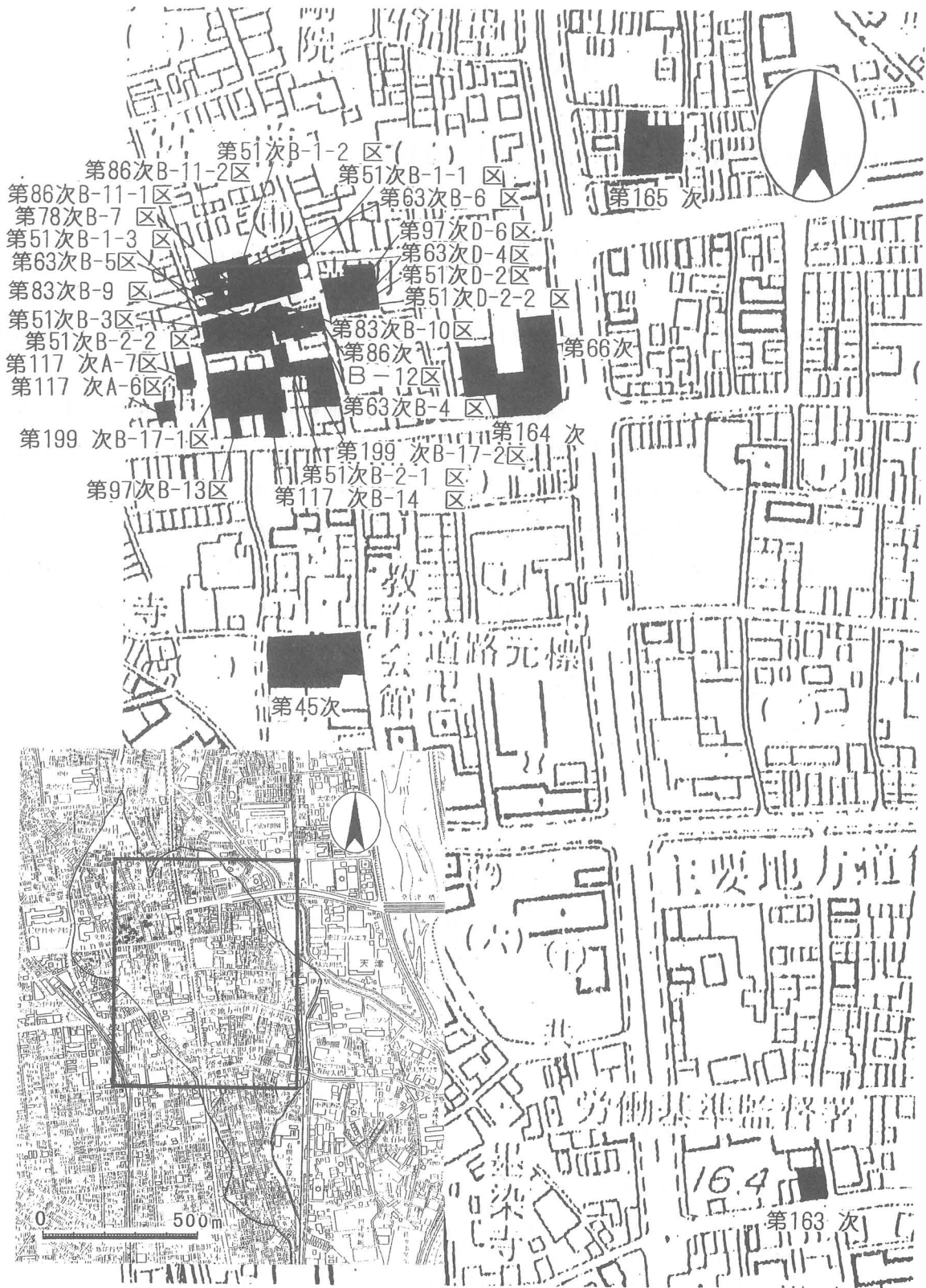
貝類が出土した調査区は30カ所である。調査次数別に遺跡の概要を説明したいと思う。

第45次調査区は、遺跡の西側に位置し、調査区の北側には、西から法巖寺・正善寺・大蓮寺と三軒の寺が建っている。ここからは17世紀前半～20世紀前半までの町屋を検出している。

表1 出土貝類種名表

軟体動物	Phylum Mollusca		
腹足綱	Class Gastropoda	斧足類	Class Pelecypoda
アカニシ	Rapana venosa (Valenciennes)	アカガイ	Anadara (Scapharca)
クロアワビ	Haliotis (Nordotis) discus discus Reeve	イガイ	Mytilus corsucus Gould
メカイアワビ	Notohaliotis sieoldi (Reeve)	イタヤガイ	Pectitniidae gen. et sp. indet.
マダカアワビ	Notohaliotis gigantea (Gmelin)	ウチムラサキ	Saxidomus puratus (SOWERBY)
サザエ	Batillus cornutus (Lightfoot)	カガミバイ	Dosinia (phacosoma) troscheli (Reeve)
ツメタガイ	Glossulax didyma (Roding)	バカガイ	Mactra chinensis Philippi
シマバイ	Babylonia japonica (Reeve)	ハマグリ	Meretrix lusoria (Roding)
テングニシ	Hemifusus ternatanus (Gmelin)	マツガサガイ	Inversidens japonensis (LEA)
ボウシュウボラ	Charonia sauliae (Reeve)	セタシジミ	Corbicula sandai Reinhardt
トコブシ	Sulculus supertexta (Lischke)	マシジミ	Corbicula (Corbiculina) leana Prime
マイマイ	Stylommatophora fam. indet.	ヤマトシジミ	Corbicula (Corbicula)
マルタニシ	Cipangopaludinc chinensis malleata (Reeve)		





第1図 調査地点

第51・63・78・86・97・115・199次調査区は、遺跡の西北側に位置する宮ノ前地区である。17世紀前半～20世紀代の町屋を検出している。ここは、一部7～8世紀代の遺構も確認されているが、遺構が検出されるのは、主に、16世紀後半以降である。町屋が形成されるのは16世紀末～17世紀初頭以降であり、17世紀前半

表2 貝類出土遺構一覧表

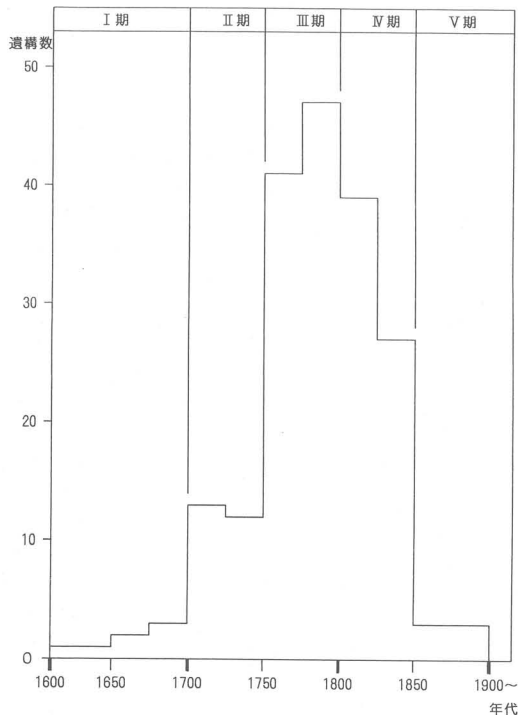
	調査区	遺構番号	時期	時期区分	性格	文献		調査区	遺構番号	時期	時期区分	性格	文献
1	第199次B-17-1区	S K447	17c前半～17c中頃	I	町屋	未	40	第51次B-2-1区	S K104	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V
2	第51次D-2区	S E301	17c後半～18c初頭	I II	町屋	有 V	41	第63次B-5区	S K101	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V
3	第117次A-7区	S K108	17c末～18c前半	I II	町屋	未	42	第97次D-6区	S K329	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V
4	第117次A-6区	S K314	18c前半	II	町屋	未	43	第97次D-6区	S E04	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V
5	第199次B-17-1区	S K412	18c前半	II	町屋	未	44	第97次D-6区	S K42	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V
6	第51次D-2区	S P113	18c前半～18c中頃	III	町屋	有 V	45	第51次B-1-1区	S K436	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
7	第97次B-13区	S K28	18c中頃～18c後半	III	町屋	有 V	46	第51次B-1-1区	S K389	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
8	第51次B-1-1区	S E02	18c中頃～18c末	III	町屋	有 V	47	第51次B-1-1区	S K13	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
9	第51次B-2-2区	S K589	18c中頃～18c末	III	町屋	有 V	48	第51次B-1-1区	S K72	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
10	第51次B-1-1区	S K90	18c後半	III	町屋	有 V	49	第51次B-2-1区	S E01	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
11	第51次B-1-1区	S K276	18c後半	III	町屋	有 V	50	第51次B-2-2区	S K710	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
12	第51次B-1-1区	S K64	18c後半	III	町屋	有 V	51	第97次D-6区	S K345	18c後半～19c前半	III IV	町屋	有 V
13	第51次B-1-1区	S K15	18c後半	III	町屋	有 V	52	第117次A-7区	S K13	18c後半～19c前半	III IV	町屋	未
14	第51次B-1-1区	S K141	18c後半	III	町屋	有 V	53	第199次B-17-1区	S K121	18c後半～19c前半	III IV	町屋	未
15	第51次B-1-1区	S K305	18c後半	III	町屋	有 V	54	第66次	S V15	19c前半	IV	酒蔵	未
16	第51次D-2区	S X114	18c後半	III	町屋	有 V	55	第51次B-1-1区	S K05	19c前半	IV	町屋	有 V
17	第51次D-2区	S X102	18c後半	III	町屋	有 V	56	第51次B-2-2区	S K649	19c前半	IV	町屋	有 V
18	第117次A-7区	S K103	18c後半	III	町屋	未	57	第51次B-3区	S K208	19c前半	IV	町屋	有 V
19	第117次A-7区	S K102	18c後半	III	町屋	未	58	第163次	S V3	19c前半	IV	酒蔵	未
20	第117次B-14区	S E600	18c後半	III	町屋	未	59	第199次B-17-1区	S K638	19c前半	IV	町屋	未
21	第164次	竈G・H01	18c後半	III	酒蔵	注23	60	第199次B-17-1区	S K518	19c前半	IV	町屋	未
22	第165次	S K37	18c後半	III	寺院	注24	61	第51次B-1-1区	S K441	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
23	第165次	S P13	18c後半	III	寺院	注24	62	第97次B-13区	S K23	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
24	第199次B-17-1区	S K521	18c後半	III	町屋	未	63	第63次B-5区	S K29	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
25	第199次B-17-1区	S K900	18c後半	III	町屋	未	64	第63次B-5区	S K74	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
26	第199次B-17-1区	S K18	18c後半	III	町屋	未	65	第97次D-6区	S P39	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
27	第51次B-2-2区	S K635	18c後半	III	町屋	有 V	66	第97次D-6区	S K90	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
28	第51次B-1-1区	S K282	18c前半～18c後半	II III	町屋	有 V	67	第63次D-4区	S X212	19c前半～19c中頃	IV	町屋	有 V
29	第51次D-2区	S K201	18c前半～18c後半	II III	町屋	有 V	68	第199次B-17-1区	S E402	19c前半～19c中頃	IV	町屋	未
30	第199次B-17-1区	S K636	18c前半～18c後半	II III	町屋	未	69	第51次B-2-2区	S K528	19c前半～19c後半	IV V	町屋	有 V
31	第199次B-17-1区	S K201	18c前半～18c後半	II III	町屋	未	70	第63次B-5区	S K35	19c前半～19c後半	IV V	町屋	有 V
32	第199次B-17-1区	S K208	18c前半～18c後半	II III	町屋	未	71	第97次B-13区	S K14	19c前半～19c後半	IV V	町屋	有 V
33	第51次B-1-1区	S K264	18c中頃～19c後半	III IV	町屋	有 V	72	第199次B-17-1区	S K95	19c前半～19c後半	IV V	町屋	未
34	第51次B-2-1区	S K160	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	73	第199次B-17-1区	S K210	19c前半～19c後半	IV V	町屋	未
35	第51次B-2-1区	S K62	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	74	第97次D-6区	S K11	19c中頃～19c後半	IV V	町屋	有 V
36	第51次B-2-1区	S K170	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	75	第51次B-2-1区	S E02	19c初頭～20c	IV V	町屋	有 V
37	第51次B-2-1区	S K348	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	76	第117次A-7区	S K20	19c前半以降	IV V	町屋	未
38	第51次B-2-1区	S K184	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	77	第51次B-1-1区	S X153	19c～20c	IV V	町屋	有 V
39	第51次B-2-1区	S K05	18c後半～19c初頭	III IV	町屋	有 V	78	第97次D-6区	S K62	20c	V	町屋	有 V

には、宮ノ前地区の中心を南北に通っている猪名野神社参道沿いに掘立柱建物が建てられるが、裏側は耕作地である。それが、17世紀末以降徐々に、猪名野神社参道沿いより奥まったところにも建物が建てられる。

第66次調査区は、遺跡の北部中央にあたる。弥生中期・16世紀代～19世紀後半までの遺構を確認した。調査区は3地区に分かれ、これらの地区からは、17世紀中頃の酒造関係遺構を検出しており、この頃には酒蔵が建っていたことが分かった。また、19世紀代の酒造用竈が検出されていることから、この時期までここで酒造業を営んでいたようである。

第163次調査区は、遺跡の南側に位置する。有岡城期（16世紀後半）には、主郭の西側に侍町があり、この調査区はその侍町の南西隅に位置する。有岡城期の遺構は少なかったが、17世紀前半～20世紀初頭の遺構を検出した。そのなかで、18世紀中頃～19世紀初頭の酒造関係の遺構（竈・搾り場）が検出され、江戸中期～後期にかけて酒蔵が建っていたことが分かった。

第164次調査区は、先に述べた宮ノ前地区の南東隅に位置する。この調査区は、現在、国の重要文化財に指定されている酒蔵建物の解体修復に伴って行われた調査区である。調査の結果、17世紀代の酒造用竈を



第2図 時期別遺構数比

別に分類したのが時期別遺構数比である(第2図)。それをみると、17世紀代は遺構数が3カ所と少ないが、18世紀代に入ると遺構数は急速に増え始め、18世紀中頃～18世紀後半になるとピークになる。19世紀代に至ると、遺構数は次第に減っていくが、19世紀中頃までは遺構数がまだ40カ所近くある。19世紀後半以降は急に激減してしまうが、それは特殊な遺構(伊丹郷町遺跡の場合、酒造関係遺構及び建物遺構)以外は、調査の対象外とされてしまうからである。この結果から、18世紀初頭に小画期がみられ、18世紀後半～19世紀初頭に大画期が認められる。この画期を基準に下記の通りの時期に区分した。

- I期 17世紀代
- II期 18世紀前半～18世紀中頃
- III期 18世紀中頃～18世紀末
- IV期 19世紀前半～19世紀中頃
- V期 19世紀中頃以降

### III 伊丹郷町遺跡出土の貝類の特徴

#### (1) 伊丹郷町遺跡出土の貝類の年代別組成

伊丹郷町遺跡において、各時期ごとに貝類の特徴を明らかにし、当遺跡における貝類の変遷を見てみたいと思う。変遷を考えるにあたっては、時期別遺構数比の時期区分にもとづいて行いたい(第2図)。また、これとともに、主な貝類の種別に見た貝類の出土個数の変化図(第4図)も合わせてみてみたい。

まず、I期は、海水産3種(アカガイ・バイガイ・ハマグリ)、淡水産2種(マシジミ・ヤマトシジミ)、計5種にのぼる。種類別にみると、海水産のものが多く、数量的には淡水産のほうが多い。1カ所から出土する量が多いためでもあるが、遺構外から採集される貝類もシジミ類が多くみられる。なお、伊丹郷町期において、最も古く確認されている例は、第199次調査B-17-1区で、17世紀前半～17世紀中頃の土壌

検出し、それ以降、19世紀代までの竈を多く検出し、酒造用の竈が幾度も改築されていることが分かった。

第165次調査区は、遺跡の北側に位置する。万徳寺解体事業に伴う調査であり、14世紀～20世紀代の遺構を確認した。文献の記録では、天正八年(1580)に建てられ、貞享元年(1684)に寺院が火災に遭い、正徳元年(1711)に再建したとあるが、発掘調査では、17世紀末～18世紀初頭の間には2回の火災痕を確認し、貞享元年(1684)の他に、もう一度火災に遭っていたことが分かった。

このように、対象となった調査区は、町屋が中心であるが、寺院や酒蔵の調査区でも貝類が出土していることが分かる。

#### (2) 出土遺構数による時期区分

では、対象とした遺構数が時期別にどのように変化しているかを示すことによって、伊丹郷町遺跡の貝類の出土量の様相の変化をつかみたいと思う。

まず、時期区分を考えるため、対象とした遺構を年代

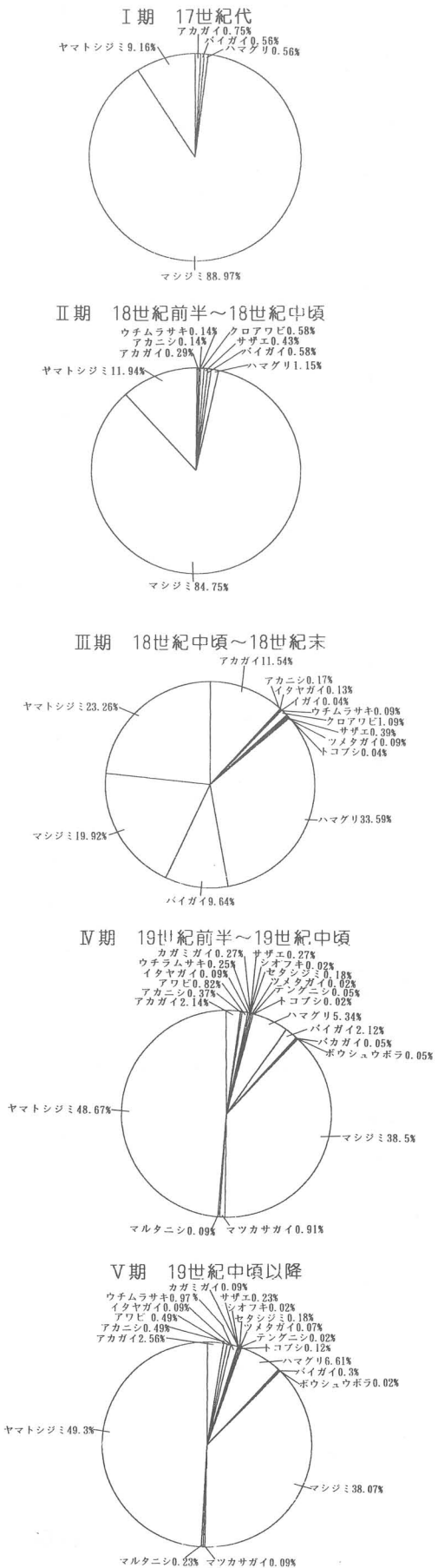
(SK447) から、バイカイ・アカガイ・ハマグリが出土している。量的には少量であったが、この頃には、すでに海水産のものが流通していたことが分かる資料である。

II期は、海水産7種（アカニシ・クロアワビ・サザエ・バイガイ・アカガイ・ウチムラサキ・ハマグリ）、淡水産2種（マシジミ・ヤマトシジミ）、計9種である。この中で一番多いのはシジミ類である。それ以外の貝類はI期に比べて種類も増えているが、全体的に少ない。

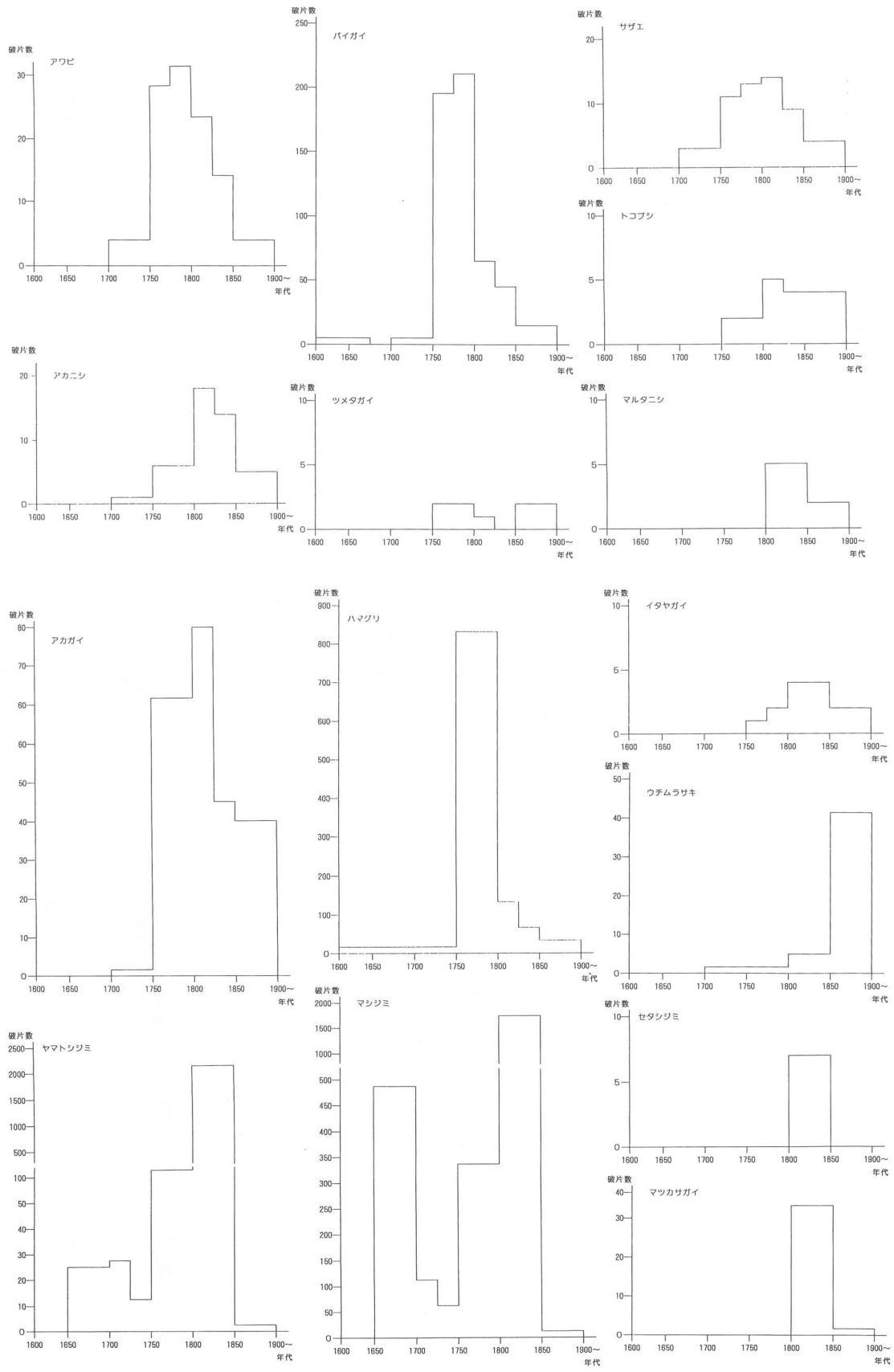
III期では、海水産11種（アカニシ・クロアワビ・サザエ・ツメタガイ・トコブシ・バイガイ・アカガイ・イガイ・イタヤガイ・ウチムラサキ・ハマグリ）、淡水産2種（マシジミ・ヤマトシジミ）、計13種となる。出土する遺構数が、この時期がもっとも多いためか、出土量も倍増している。海水産の種類が増えているが、この時期でもシジミ類の出土量が一番多い。また、シジミ類以外の貝類（バイガイ・アカガイ・ハマグリ）が単種で1カ所から多量に出土するなど（表3）、後述するような祝宴的な行事で食されたと思われるものがみられるようになる。

IV期は、海水産15種（アカニシ・クロアワビ・サザエ・ツメタガイ・テングニシ・トコブシ・バイガイ・ボウシュウボラ・アカガイ・イタヤガイ・ウチムラサキ・カガミガイ・シオフキ・バカガイ・ハマグリ）、淡水産5種（セタシジミ・マシジミ・マツカサガイ・ヤマトシジミ・マルタニシ）、計20種である。この時期は、III期に比べると貝類出土の遺構数は少なくなっているが、貝類の出土量や種類はこの時期が一番多い。その中でも一番多く出土するのはシジミ類である。また、淡水産のタニシ類が出土し始めるなど、淡水産の種類が増えている。その他の特徴として、アワビやサザエ・ハマグリなどの貝類に大型のものがみられ始める。

V期は、海水産14種（アカニシ・クロアワビ・サザエ・ツメタガイ・テングニシ・トコブシ・バイガイ・ボウシュウボラ・アカガイ・イタヤガイ・ウチムラサキ・カガミガイ・シオフキ・ハマグリ）、淡水産5種（セタシジミ・マシジミ・マツカサガイ・ヤマトシジミ・マルタニシ）、計19種である。時期別遺構数比（第2図）をみても分かるように、V期に属する遺構は少ないが、貝類の種類はIV期とほぼ一緒である。第51次調査B-1-1区SK153からは、ウチムラサキが40個も出土しており（表3）、これも祝宴的な行事で食された



第3図 時期別貝類組成



第4図 種別に見た貝類の出土個数変化

と思われる。

以上のように、時代を通して主流は、シジミ類であるが、ハマグリやアカガイなども時代を通して少量ながらも出土している。このことから、これらの貝類が一般的に食されていたのであろう。

## (2) 調査区別にみた貝類の特徴

ここでは、調査区別に貝類の組成比をつくり、どのような違いがあるのか検討したい。今回対象とした調査区の概要は先に述べた。それで、貝類が多く出土する時期、時期区分（第3図）でⅢ～Ⅳ期の遺構を対象にし、比較的出土量の多い遺構6カ所を取り上げた。取り上げた遺構は次ぎの遺構である。

第51次調査B-2-1区 S K170 18c 後半～19c 初頭Ⅲ～Ⅳ期（町屋）・第117次調査A-7区 S K103 18c 後半Ⅲ期（町屋）

第163次調査S V 3 19c 前半Ⅳ期（酒蔵）・第164次調査竈G・H 18c 後半～19c 初頭 Ⅲ～Ⅳ期（酒蔵）

第165次調査S P13 18c 後半Ⅲ期（寺院）・第199次調査B-17-1区 S E402 19c 前半～19c 中頃Ⅳ期（町屋）

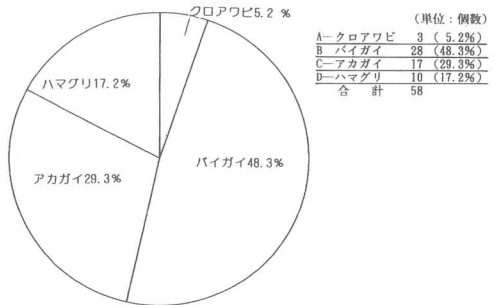
これらの遺構から出土した貝類の組成比を作成したものが第5図である。

まず、第51次調査の町屋の廃棄土壌 S K170であるが、5種類（クロアワビ・バイガイ・アカガイ・ハマグリ・マシジミ）の貝類がみられる。海水産のものが中心であるが、淡水産のマシジミが18%含まれている。次に、第117次調査の町屋の廃棄土壌 S K103は、5種類の貝類がみられ、海水産が3種（バイガイ・アカガイ・ハマグリ）、淡水産が2種類（マシジミ・ヤマトシジミ）出土している。出土量をみると、淡水産のシジミ類が大半を占め、海水産のものは少量であった。第163次調査の酒蔵で使用された酒造用竈 S V 3は、11種類の貝類が出土した。海水産が10種（アカニシ・クロアワビ・マダカアワビ・メダイアワビ・サザエ・バイガイ・ボウシュウボラ・アカガイ・イタヤガイ・ハマグリ）、淡水産1種（マシジミ）に分けられる。こちらは、海水産が中心で、3種のアワビ類が出土した。アワビ類の総数は15個で、全体の17.44%であった。アワビ類が1カ所からこんなに出土した例はなく、特殊な例であり、日常的というよりむしろ祝宴的な行事で用いられた可能性がある。第164次調査で酒蔵で使用された酒造用竈 G・Hは、7種類で海水産（クロアワビ・アカガイ・イタヤガイ・トコブシ・ツメタガイ・バイガイ・ハマグリ）のみである。この特徴は、アカガイ・ハマグリに大型のものが目立ち、平均殻長が5cm位のものが主流であった。このことから、これも祝宴的な行事で用いられた可能性がある。第165次調査万徳寺の廃棄土壌 S P13は5種類で、海水産3種（アカガイ・バイガイ・ハマグリ）、淡水産2種（マシジミ・ヤマトシジミ）である。ここでは、ハマグリをはじめ2種類のシジミ類が主流であった。最後に、第199次調査町屋の井戸 S E402は9種類で、海水産6種（アカニシ・イタヤガイ・サザエ・バイガイ・アカガイ・ハマグリ）、淡水産3種（マシジミ・ヤマトシジミ・マツカサガイ）が出土した。

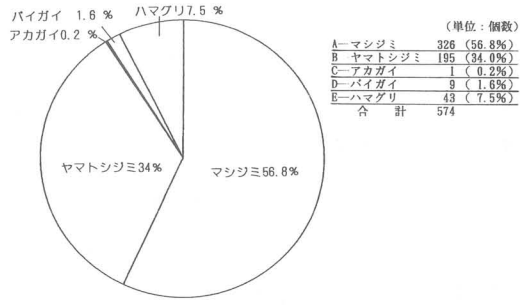
以上のことから、酒蔵から出土した貝類は、アワビが多量に出土したり、大型の貝類が出土するなど、日常的に用いられたというよりむしろ特別な行事で食された可能性がある。また、先にも述べたが、単種で1カ所から多量に出土し、祝宴的な行事で食されたと思われるものがあるが（表3）、これらが出土している地点は町屋に位置し、酒蔵から出土した貝類とは違うことが分かる。一方、町屋から出土する貝類は、一般

表3 一括廃棄貝類一覧表

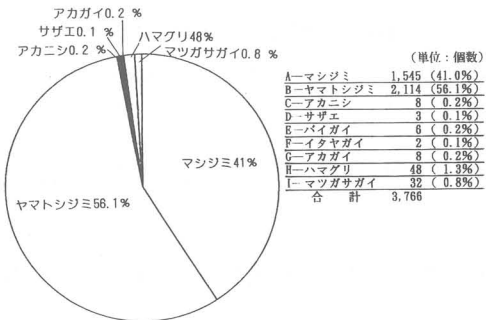
地 区	遺構番号	貝種類名	個数	年 代
第51次調査B-1-1区	S K153	ウチムラサキ	40	明治～昭和
第51次調査B-2-1区	S K104	ハマグリ	86	18世紀後半～19世紀初頭
	S K106	アカガイ	17	18世紀後半～19世紀初頭
	S K170	アカガイ バイガイ	17 28	18世紀後半～19世紀初頭
第63次調査B-5区	S K35	ハマグリ	34	19世紀中頃～19世紀後半
第51次調査D-2区	S X102	バイガイ	144	18世紀後半



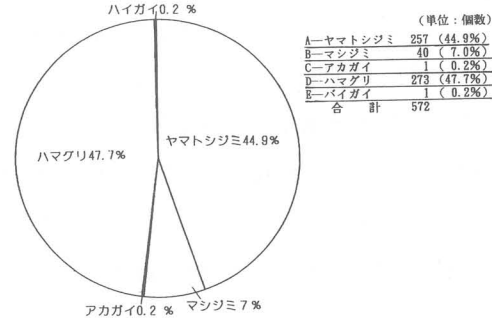
第51次 B-2-1区SK170 町屋



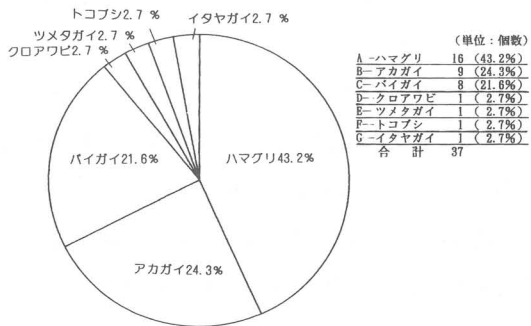
第117次 A-7区SK103 町屋



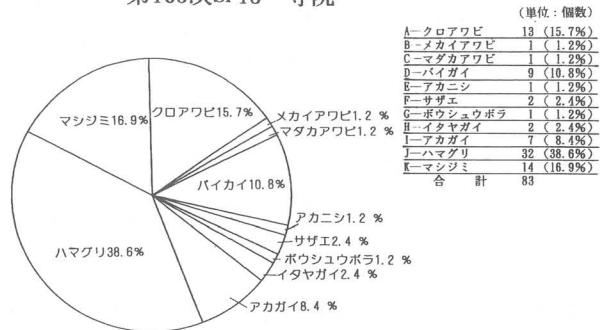
第199次 B-17-1区SE402 町屋



第165次 SP13 寺院



第164次 竈 G・H 酒蔵



第163次 SV3 酒蔵

第5図 遺構別貝類組成

的には多種類の貝類がみられるが、主流は、二枚貝のシジミ類やハマグリが大半を占めており、酒蔵から出土した貝類より一般的なものであった。さらに、寺院から出土した貝類も町屋から出土する貝類と状況は似ており、日常的に食されたものと思われる。

### Ⅲ 一括廃棄遺構出土のシジミ類の構成の特徴

#### (1) 伊丹郷町遺跡のシジミ類の構成

先にも述べたが、伊丹郷町遺跡において一番多く出土する貝類はシジミ類である。そのシジミ類の流通についても以前述べたことがある⁽²⁾。今回は、一括廃棄遺構出土のシジミ類を中心にどのような違いがあるのか細かく観察し、伊丹郷町遺跡出土のシジミ類の特徴を考えたいと思う。

伊丹郷町遺跡において、シジミ類が一括廃棄された遺構は8カ所である。それを年代順に並べシジミ類の出土状況をあらわしたのが第6図である。

出土したシジミ類は、セタシジミ・マシジミ・ヤマトシジミの3種類である。これらのシジミ類の特徴に

ついでに表4を参照していただきたい。つぎに、遺構ごとに種類をみると、2つの組成に別れることが分かる。

A. マシジミとヤマトシジミのみで構成されたもの - D-2区SE301・A-6区SK314・A-7区SK103・165次SP13・B-14区SE600・B-17-1区SE402

B. マシジミとセタシジミのみで構成されたもの - B-13区SK23・B-3区SK208

次に、時期別にどの様に変化しているかをみてみると、以下のように時期ごとに微妙に変化していることが分かった。マシジミとヤマトシジミのみで構成されたものが時代を通してみられ、この構成が主流と考えられる。しかし、マシジミとヤマトシジミのみで構成されたものの中でも、比率は変化している。18世紀中頃以前は、マシジミの方が大半を占めていたのが、18世紀後半以降、ヤマトシジミが増えてほぼ同率へと変化している。この組成がそのまま生息地での生息率を表していたとすると、採集場所が違う可能性がある。

採集場所の違いがあるとすると、18世紀中頃以前は、淡水域にすむマシジミが汽水域に生息するヤマトシジミよりも大半を占めているため、採集場所は河口域より奥まったところと考えられ、具体的な採集場所として、伊丹近郊では、猪名川・藻川もしくは武庫川と考えられる。それが、18世紀後半になると、ヤマトシジミとマシジミの比率がほぼ同率になるため、採集場所として考えられるのは、河口に近いところで、武庫川や神崎川の河口が想定できる。さらに、19世紀代に入ると、マシジミとヤマトシジミの構成以外に、琵琶湖水系でしか採集されないセタシジミが、マシジミといっしょに少量ながらみられ始める。採集場所として考えられるのは、琵琶湖水系である淀川・寝屋川が考えられる。このように、時代よって変化していることが分かる。江戸時代中期以降、尼崎周辺でシジミ漁が活発に行われていたが⁽³⁾、18世紀中頃以前は、伊丹郷町遺跡近郊の川で採集されたものが食されている可能性がある。18世紀後半以降は、ヤマトシジミの比率が高くなる。これは、八木氏が指摘した尼崎大物周辺（神崎川河口）のシジミ漁が、江戸時代中期以降に盛んになり、そこで採集されたものが伊丹郷町にも流通した結果と考えられる。

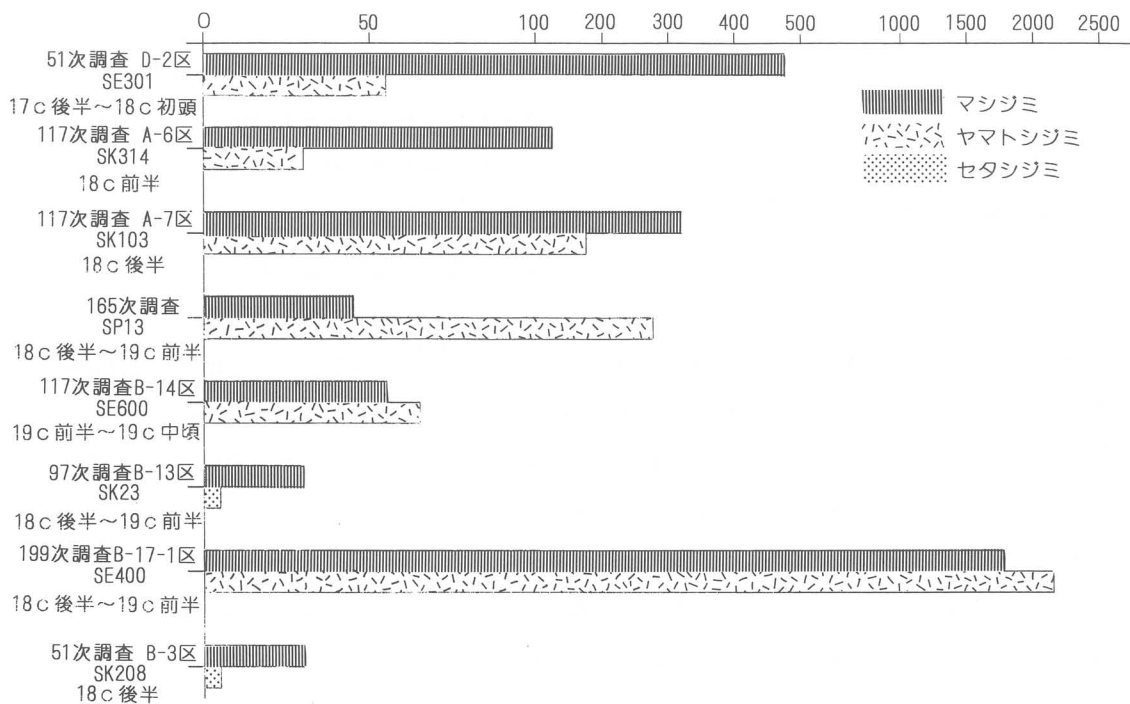
(2) 他の近世遺跡のシジミ類の構成

このように、伊丹郷町遺跡内においてはシジミ類の中心はマシジミとヤマトシジミであったが、その他の近世遺跡ではどうであろうか。大坂城下町遺跡において、住友銅吹所遺跡⁽⁴⁾や大坂魚市場跡⁽⁵⁾からは、多くの貝類が出土していた。その中にはシジミ類も多く出土している。これらのシジミ類には、伊丹郷町遺跡で出土している3種類の他に、オキシジミが出土していた。組成をみると、伊丹郷町遺跡におけるシジミの組成（マシジミ・ヤマトシジミの組み合わせ、マシジミ・セタシジミの組み合わせ）はみられなかった。なお、その他の大坂城下の近世遺跡に関しても、先に述べた2カ所の遺跡と同様であった⁽⁶⁾。また、枚方宿遺跡においては、三矢町に位置する第23次調査区の宝永八年（1711）の火災面からシジミが出土している。出土したシジミはセタシジミのみであった。また、

表4 シジミ類別特徴一覧表  
(滋賀の自然観察シリーズNo.5 滋賀の水生動物より)

種類	マシジミ	セタシジミ	ヤマトシジミ
形			
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>琵琶湖沿岸部の砂レキや砂泥の所や、周辺の川にいる。</li> <li>三角形の25mmくらいの殻で黒色。</li> <li>幼貝には茶褐色の扇形の模様が見られる。</li> <li>琵琶湖周辺の水路などにある横長の殻のものはアワシジミと呼ばれることもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>琵琶湖沿岸の砂レキや砂泥の所にいる。</li> <li>マシジミより深い所に多い。</li> <li>三角形の40mmくらいの殻。老成すると殻の後端が伸びる。</li> <li>幼貝は黄～黄緑色。</li> <li>殻の内面は紫色をしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>汽水域に生息する。</li> <li>琵琶湖にはいないが、淀川の河口域に多い。</li> <li>成貝は正三角形に近い形、殻表は光沢のある栗色。</li> <li>食用で売られているものはこの種類に多い。</li> </ul>
すんでいる所など	<ul style="list-style-type: none"> <li>本州、四国、九州のきれいな河川や湖</li> <li>琵琶湖沿岸や周辺の川</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>琵琶湖固有種</li> <li>琵琶湖沿岸部</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>琵琶湖やその周辺にはいない。</li> <li>全国の汽水域にいる。</li> </ul>





第6図 一括廃棄遺構出土のシジミ類組合

堤町に位置する第14次調査区の17世紀末～18世紀後半土層からも、セタシジミのみが採集されており⁽⁷⁾、伊丹郷町遺跡でみられるシジミの組合わせはなかった。明石城下町遺跡西中ノ町地区・東中ノ町地区の調査でも、オキシジミ・ヤマトシジミはみられたが他のシジミ類は出土していなかった⁽⁸⁾。

以上、これらの遺跡では、伊丹郷町遺跡でみられるシジミ類の構成とは違うことが分かった。これは、採集場所の違いだと思われる。枚方宿遺跡や明石城下町遺跡で出土されたものは、遺跡周辺で採取した可能性がある。枚方宿遺跡の場合、琵琶湖水系の淀川に接しており、琵琶湖水系しか採取されないセタシジミが出土していることから、出土したシジミは淀川で採取されたものと考えられる。また、明石城下町遺跡でも、オキシジミ・ヤマトシジミがみられたが、これらのシジミ類は汽水域に生息するため、明石城下町遺跡の西側を流れる明石川河口付近で採取された可能性はある。これに対して、大坂城下町では多種類のシジミ類が出土している。これは、各地で採集されたシジミ類が大坂城下町に流通しているためと考えられる。

補足ではあるが、伊丹郷町遺跡で出土したシジミは成長線分析の結果、春に採集されたものが多く、伊丹郷町遺跡では春を中心に食されていたようである⁽⁹⁾。

## V 文献史料でみる伊丹郷町貝類

伊丹郷町遺跡において、多くの貝類が出土することは分かったが、文献史料で、江戸時代の貝類がどのように使用されたかをみてみたいと思う。参考とした史料は、伊丹の有力酒造家の小西家に伝わるもので、『女永代日記』という題目の享保年間（1716～1735）から安政年間（1854～1859）まで記された日記である。この史料は全8冊で⁽¹⁰⁾、現在、伊丹市博物館に寄託されている。主に、祝宴の献立や進物を記録したもので、当時の食文化や流通の一端を知る事のできる史料である。

その中で貝類が記載されているところを表にまとめてみた（表5）。それをみると、全部で5種類の貝類

の名がある。トリガイが時代を通してみられ、次にアカガイと続く。これらは、正月料理の献立に多くみられ、鱈料理に使われていた。鱈料理は、古くは奈良・平安時代からあり、江戸時代には多種の料理法が加わったが、基本は魚・鳥や野菜を酢で和えたものである。日記には、上座の人はアカガイ、使用人等にはトリガイと使われており（表5・元文二年（1738）条正月他）、トリガイはアカガイより一般的だったのであろう。トリガイ漁は尼崎浜が有名で、『日本山海名産図会』⁽¹¹⁾にも描かれている。しかし、伊丹郷町遺跡からは貝殻の出土例がなく、その他の近世遺跡でもほとんどみられない。『和漢三才図会』⁽¹²⁾によると、（上略）摂州尼崎ニ多有テ之。冬春ニ出ツ。他國有未聞。魚人、殻ヲ去テ之販ク。（下略）

とあり、尼崎でむき身にされたものが、伊丹郷町に流通していた可能性があると思われる。

また、『女永代日記』には、節句の祝儀に、ハマグリやアカガイが送られている記載がある。それをみると、

享保三年戊正月 岡山

(1718)

節句ノ祝儀

酒貳

一、はうぼ 一本 宗林へ  
はまくり少

酒三

一、赤かい 三  
はまくり少 平衛門様へ  
さざい十ヲ

ひいな道具 おわんへ遣候

此方へ参候

一、ひしの餅 平衛門様与

二重

はまくり

右使へ百文遣候

とあり、他に、享保二年（1717）、五年（1720）にも節句の祝儀として、貝類が送られている記載があった。三月の節句と貝類の関係は、喜多川守貞の『近世風俗誌』（慶応三年（1867））⁽¹³⁾によると、

（上略）古民間ニハ、紙、土偶等ヲ並べ、諸器モ木葉、蛤殻等ヲ用フノ類ナルベシ。近世迄、雛祭ニハ、物ヲ供ズルニ蛤殻ヲ用ヒシ、ト聞ク。今三部ハ蛤ヲ供スモ、昔殻ヲ用ヒシ遺意ナラン。或古老曰、昔ノ雛遊ノ調度ハ質素ニテ、今世ノ如キ善美ノ物ヲ用ヒズ。飯器、皆、蛤貝ヲ用フ。宝暦頃ヨリ漸ク廃シテ、貧民ノ児ノミ用レ之云々。是、民間ノコトナレドモ、貧戸ノミナラズ用レ之。宝暦後モ、貧家ノ児ハ、猶、蛤殻ヲ用ヒシ也。

とあり、三月の節句と貝類の関係が深いことが分かる。さらに、『近世風俗誌』に雛膳についての記載がある。

（上略）今日、雛膳及ビ食事ニモ、必ラズ、蛤ヲ用フヲ例トス。江戸ハ、正月蛤ヲ用ヒ、今日、雛膳ニ

表5 『女永代日記』内貝類記載一覧表

年号	内容	調理法	貝類	その他	
享保一年(1716)申	進物		トリガイ		
享保二年(1717)	正月二十三日	正月料理献立	鱈	トリガイ	大こん
	二月二十五日	節句ノ祝儀		ハマグリ	ひし餅
	三月朔日	節句ノ祝儀の返し		アカガイ・ハマグリ	
享保三年(1718)戌正月	十五日	正月料理	鱈	トリガイ	大こん
	十日	本家こしき仕舞	鱈	トリガイ	大こん
	十八日	家こしき仕舞	鱈	トリガイ	
	三月	節句ノ祝儀		アカガイ・サザエ・ハマグリ	ひし餅
享保四年(1719)亥正月	元日	正月料理	ぞうに 鱈	串かい トリガイ	花かつお・大こん・こもち・焼とうふ 大こん・しょうが
	三日		鱈	トリガイ	大こん・かき
	五日		鱈汁 坪	アカガイ ハマグリ くし貝	大こん・なまこ・せり・くり・しょうが はしらかし ごぼう
					大こん・しょうが
享保五年(1720)子正月	三日	正月料理	口三寸	トリガイ	大こん・しょうが
	五日	家食事	鱈	トリガイ	
	十一日	主屋白まわし料理	鱈	トリガイ	大こん・せり・しょうが
	三月一日	節句の祝儀 祝儀の返し		ハマグリ トリガイ	ひしの餅
	二日	節句の祝儀		大ハマグリ	アマダイ
元文二年(1737)巳正月	十四日	正月料理	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
		夜食	酒肴	アカガイ	はせ・数の子・牛蒡
元文三年(1738)丑正月		正月料理	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・しょうが・せり 大こん・しょうが
元文四年(1739)未正月	十四日	三家こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり
寛保元年(1741)酉正月	十八日	こしき仕舞	鱈(上人) 酒肴 鱈(下人)	アカガイ サザエ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 数の子・牛蒡 大こん・しょうが
寛保二年(1742)戌正月	四日	白仕まわし	鱈(上人) 酒肴(上人) 鱈(下人)	アカガイ サザエ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 数の子・牛蒡 大こん・しょうが
寛保三年(1743)亥正月	十五日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
	三月	節句祝儀		ハマグリ	
延享元年(1744)子正月		こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	トリガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
延享二年(1745)丑正月	九日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	トリガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
	十二月十九日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	トリガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
延享四年(1746)卯正月		こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
寛延元年(1748)辰正月	十日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
寛延二年(1749)巳正月	五日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
	二十三日	正月料理献立	鱈	トリガイ	大こん・せり
寛延三年(1750)丑正月	十日	正月料理献立	鱈	トリガイ	大こん
	正月	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	アカガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
宝暦元年(1751)未正月	十二日	こしき仕舞	鱈(上人) 鱈(下人)	トリガイ トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・しょうが
宝暦二年(1752)申正月	十日	こしき仕舞	鱈	トリガイ	大こん・くり・しょうが・せり
宝暦三年(1753)戌正月	十日	正月料理献立	鱈(上人) 坪 酒肴 鱈(下人)	アカガイ サザエ サザエ アカガイ	大こん・くり・しょうが・せり 大こん・牛蒡 数の子・牛蒡 大こん・しょうが
宝暦十年(1760)辰十二月二十五日		くばりもの		くし貝	
天明二年(1782)寅正月一〜三日		正月料理材料		アカガイ(上人)・トリガイ(下人)	大こん・もち・めぐる
		報恩講料理	鱈 酒の肴	アカガイ・トリガイ バイガイ	数の子
天明三年(1783)卯正月一〜三日		正月料理材料		トリガイ	大こん・もち・めぐる
天明四年(1784)辰正月一〜三日		正月料理材料		トリガイ	大こん・もち・めぐる
天明五年(1785)巳正月	元日	廣蔵17人分材料		トリガイ	大こん・このしろ・こんぶ・塩たい
	正月一〜三日	正月料理材料		トリガイ	大こん・もち・めぐる
天明七年(1787)未正月	五日	廣蔵材料		トリガイ	大こん・酢しょうが・こんぶ・塩たい

必ラズ榮螺ヲ用フ。

とみられるように、1867年頃の上方面では、雛膳に蛤を用い、江戸では榮螺を用いている。『女永代日記』の記された享保三年（1718）には、上方面でも蛤とともに榮螺を用いており、まだ、明確な区別をしていなかった可能性がある。いずれにせよ、蛤や榮螺が雛の節句で食されていたようである。さらに、伊丹市内の明治～昭和までの民俗調査によると⁽¹⁴⁾、三月の節句料理の調査結果で、旧伊丹郷町内では、本膳に散らしずし・ハマグリの吸い物・なますを食していたようである。また、その周辺の村（寺本・昆陽・西桑津）では、ひし餅・巻きずし・アカガイやバイガイとわけぎの酢あえを食べていたということである⁽¹⁵⁾。以上のことから、三月の節句と貝類との関わりは深いことが分かる。

一方、発掘調査においても興味深い結果がでている。アカガイやハマグリ・サザエが出土するのは先にも述べた。そのなかで、第51次調査B-2-1区SK104では、ハマグリが86個も出土している例がある⁽¹⁶⁾。これを計測分類すると（第7図）、大きく2タイプにわかれることが分かった。それを見ると、3.5cm以上のものが21個、2～3.5cmのものが41個あり、大きさによって使い分けられていたと思われる。また、このハマグリは、成長線分析の結果、春に採集されているものが多いという結果が出ており⁽¹⁷⁾、春の祝宴すなわち雛祭りで食された可能性がある。

では、一回の祝宴で、どの位の量を使用しているのであろうか。『女永代日記』の天明二年（1782）の史料をみると次の通りである。

世帯方正月七日

□（報か）恩講等迄入用之品遣候事

（上略）

上ノ分と申

膾の子格子ノ間部屋之人数

凡廿人前

○赤貝七ツニ而宜候

右同断中道り五十人斗

○鳥貝ニ候ハハ百五十鳥貝

無之候へハふり四ツ分々ニテ

宜候

（中略）

焼物上廿人之分

○塩小鯛廿枚

中通り与

○塩ふり 大なれハ貳本

小なれハ三本

引肴の

○数の子 壹本

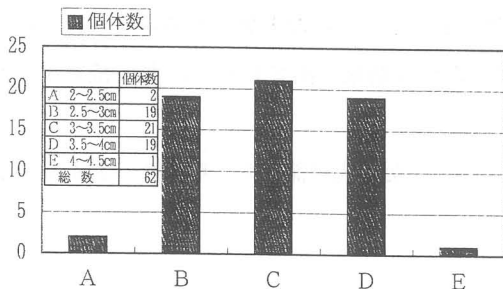
ばい 大なれハ七十

小なれハ八百

（下略）

表6 『茶湯百亭百会之記』内貝類記載一覧表

日時	場所	調理法	貝類	その他
十月十七日	喜多脇一元亭	鱈吸物	赤貝 蛤	さより・くり・しょうが
六月九日	坂上松左衛門亭	煮冷	生かい	牛蒡・岩たけ・かつお
三月十二日	森本七左衛門亭	大猪口	生かい	青あし
正月六日	西郡仙齋亭	鱈	赤貝	生子・おろし大根
二月廿二日	北川原吉三郎亭	かい焼	生かい 赤貝	くわい・たい 玉子
三月六日	上嶋九良兵衛亭	汁	蛤	青干菜・めうと
正月九日	坂上伊兵衛亭	汁	生かい	青干菜・めうと
四月十六日	坂上伝右衛門亭	煮冷	生かい	玉子・竹の子
十二月五日	松坂屋喜左衛門亭	大猪口	生かい	
十二月四日	鴻池道徳亭	吸物	赤貝	ふきのとう
四月十二日	福嶋屋了意亭	吸物	生かい	めうかの子
五月十二日	関長兵衛亭	煮冷	赤貝	竹の子・ささげ
五月廿日	播磨屋助久亭	煮冷	生かい	なすび・玉子
九月廿一日	姫路田崎十良右衛門亭	平	生かい	車えび・松たけ
五月十四日	近藤宗故亭	吸物	みる	塩鳥
三月廿一日	坂上尉右衛門亭	焼物	生かい	伊勢海老・焼鳥・鱈・青串・浅草のり



第7図 第51次調査B-2-1区SK104 ハマグリ殻長分類図

と「倍」を掛けて、バイガイが好んで食されていたことが分かる。その他にも、表3にみられるように、SX104と同じような出土例がある。第51次調査B-2-1区ではアカガイが17個・バイガイ28個出土し、これらも同様に食されていたと思われる⁽²⁰⁾。

また、伊丹出身の茶人有岡道端が記した『茶湯百亭百会之記』⁽²¹⁾がある。この書の成立年代は、天和元年(1681年)~享保十二年(1727年)までの間と考えられており、伊丹や京都の茶会が中心である。そのなかに、伊丹の住民上嶋九良兵衛亭でひらかれた茶会席で貝類が料理された記載がある。

五十一 三月六日 上嶋九良兵衛亭

- 一 掛軸 利久文 有岡道瑞
- 一 丸釜 ヲハナフクホヤノメクリノ一村ニ 三宅文雅
- 一 香合 時代 一菜籠 上嶋勝右衛門
- 一 花生 宗和作 牡丹 たい 汁 青干菜
- 一 水指 古備前 銘昔男藤谷中将殿筆 膾 くり はまぐり
- 一 茶入 米市 袋緞子 南京皿 一 鯛 浜焼 食 香物
- 一 茶碗 熊川 一 滴ノ切 一 平 玉子 白うを
- 一 茶杓 慶首座 一 車海老 てんかく
- 書院 一 掛物 雪舟筆 一 棚ニ青磁香炉 一 羊羹

とあり、このような茶会の席でも三月にハマグリが食されていたことが分かる。そのほかの茶会でも貝類が料理されている記載があった(表7)。⁽²²⁾時期は、3月~10月が中心で、料理されているのはハマグリやアカガイで、調理法は汁物と鱈であった。

このように、文献における貝類の記載が3月～10月が中心で、それ以外の季節はみられなかったのが残念であったが、ハマグリなどの成長線分析結果から春に採集されたものが多かったことから、貝類が春を中心に食されたと思われる。その一方、発掘において多く出土するシジミ類は全く記載がない。これは祝宴に利用されず、むしろ普通の食事に用いられたためであろう。

## VI 結 語

以上のように、有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の貝類から、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の食文化や商品流通の一端をみる事ができた。今回は、対象地区を広げたことによって、新たな成果が得られた。調査区別の貝類構成比では、町屋から出土する貝類は、多種類の貝類が出土するが、主流は二枚貝のハマグリやシジミ類であることがわかった。この他には、単種の貝類が多量に出土する例があり、その中で、ハマグリやアカガイは、町屋でも酒蔵でも多量に出土している。これは、酒造家小西家の『女永代日記』に見られる春の祝宴（雛祭など）での用いられ方と一致し、この様な席で食されたと考えられる。

その他に、町屋とは同じ種類の貝類でも大型のものや、アワビが15個も出土している例が酒蔵で見られる。酒造家小西家の『女永代日記』では、この手掛かりはなく、これについては、雛祭や正月以外の用途を考えるべきであろう。それとも、小西家以外では同じ祝宴でも違った種類の貝類を用いていたのであろうか。現在のところ、結論に至らない。

シジミ類については、組合わせをみることで、有岡城跡・伊丹郷町遺跡のシジミ類の組合わせは、マシジミ・ヤマトシジミの組合わせが主流であることが分かった。また、この組合わせの中でも変化がみられ、18世紀中頃以前は、マシジミが大半を占めていたが、18世紀後半以降になると、マシジミとヤマトシジミの比率が同率に変化していることが分かった。この変化は、採集場所の違いと考えられ、18世紀中頃以前は、伊丹郷町遺跡周辺の猪名川や藻川・武庫川で採集されたものを、18世紀後半以降は、尼崎大物周辺で採集されたものを食していたと思われる。

また、他遺跡のシジミ類の組合わせをみると、枚方宿遺跡ではセタシジミのみで、枚方宿遺跡に接している淀川で採集されたと考えられ、また、明石城下町遺跡ではオキシジミとヤマトシジミの組合わせがみられることから、明石城下町遺跡の西側を流れる明石川河口付近で採集されたと考えられる。このことから、枚方宿遺跡や明石城下町遺跡のシジミ類は、地元周辺の川で採取したものを食していたと思われる。一方、大坂城下町の場合、多種類のシジミ類が出土している。これは、各地から採取されたものが流通しているためである。このように、大坂城下町遺跡以外の出土したシジミ類は、遺跡近郊で採取されたものを食していたことが分かった。

伊丹郷町遺跡の調査は、今も継続的に行われている。その中で多くの動物遺存体が出土している。しかし、比較的確認が簡単である貝類は採集されるが、それ以外の動物遺存体は見逃されている。貝類以外のものではどうであるかを検討することによって、より一層、伊丹郷町遺跡の食文化をみられるのではないかとと思われる。これらの点については、今後の課題としたい。

最後に、この本稿作成にあたり、大阪市文化財協会久保和士氏に、貝類の保存方法や観察方法など、皆無に近い筆者にご教示いただき、また、多くの参考文献を提供して下さった。しかし、突然の訃報で、本稿が刊行できたお礼を伝えることができなくなり、大変残念に思う。書中失礼ではございますが、謹んでご冥福をお祈り致します。

また、貝類の鑑定については日本貝類学会評議委員鹿取秀雄先生・清風学園紀平肇教諭、文献史料は伊丹

市立博物館和島恭仁雄館長・同博物館石川道子調査員にご教示いただいた。また、お忙しい中資料提供していただいた兵庫県埋蔵文化財事務所岡崎正雄氏・財) 枚方市文化財研究調査会下村節子氏・伊丹市教育委員会小長谷正治氏・瀬川眞美子氏・岡野理奈氏にお礼申し上げる。また、大手前女子大学藤井直正教授・大手前栄養文化学院川口宏海助教授にはご助言いただき、同大学研究室の後輩たちには協力を得た。末文ながら、ここに感謝致します。

#### 注

- 1) 赤松和佳「伊丹郷町出土の貝類」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1997年
- 2) 注1) を参照
- 3) 伊丹周辺では、兵庫県尼崎市大物付近川で、江戸時代中期頃からシジミ漁を活発に行っていたようである。  
八木哲浩「尼崎城下の産業と周辺農村の商品生産」『尼崎市史』第2巻 尼崎市役所 1968年
- 4) 久保和士「住友銅吹所跡出土の動物遺体」『住友銅吹所跡発掘報告』大阪市文化財協会 1998年
- 5) 久保和士「近世大坂における水産物の流通と消費に関する考古学的研究」『助成研究の報告7』味の素食の文化センター 1997年
- 6) 他の大坂城下町遺跡の貝類に関しては、大阪市文化財協会久保和士氏からご教示いただいた。
- 7) 枚方市文化財研究調査会下村節子氏のご協力で、第14次・第23次調査の貝類を直接みせていただいた。全体的に出土量は少量であったが、シジミ類はセタシジミのみであった。
- 8) 『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会 1992年
- 9) 富岡直人「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の分析結果報告」『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ⅵ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1999年(本調査報告第4章所収)
- 10) 『小西新右衛門氏文書目録』(近世編) 上 伊丹市酒造家資料調査委員会1995年
- 11) 薮 関月『日本山海産図会』名著刊行会1979年
- 12) 寺島良安(著)／島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳(訳注)『和漢三才図会』7 平凡社(東洋文庫)1987年
- 13) 朝倉治彦・柏川修一(編)『守貞漫稿』第二巻 東京堂出版 1992年
- 14) 『聞き書き 伊丹のくらし 明治・大正・昭和』伊丹市立博物館 1989年
- 15) 注14) を参照
- 16) 注1) を参照
- 17) 注9) を参照
- 18) 注1) を参照
- 19) 注12) を参照
- 20) 注1) を参照
- 21) 『伊丹文芸資料』伊丹資料叢書
- 22) 『伊丹文芸資料』伊丹資料叢書
- 23) 『重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書』(災害復旧) 兵庫県伊丹市 1999年
- 24) 『平成7年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年

#### 参考文献

- 1) 赤松和佳「出土遺物からみた江戸時代の食文化」『城・町・くらし』大手前女子大学史学研究所 1992年
- 2) 伊丹市役所『伊丹市史』第2巻 1969年
- 3) 稲葉正子「栗東湖底遺跡のセタシジミの貝殻成長線分析」『動物考古学』第8号 動物考古学研究会 1997年

- 4) 吉良哲明 『原色日本貝類図鑑』 保育社 1992年
- 5) 久保和士 「大坂魚市場跡出土の動物遺体と木簡」 『大阪府漁業史』 大阪府漁業史編さん協議会 1997年
- 6) 久保和士 「平安京左京六条三坊七町出土の動物遺体」 『京都文化博物館調査研究報告第11集』 京都文化博物館 1995年
- 7) 原田信男 『江戸の料理史』 中央公論社（中公新書）1989年





# 版 图





1 昭和23年



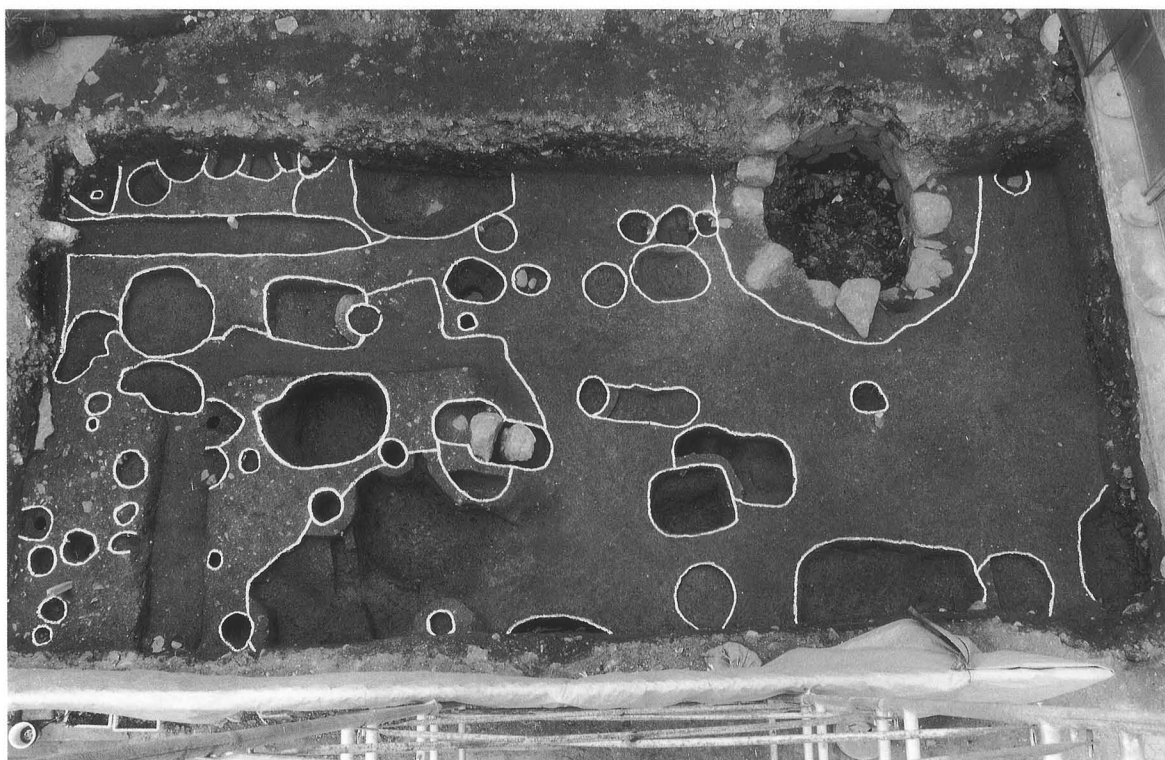
2 昭和36年



1 第51次調査B-1-2区 第3次面全景(南より)



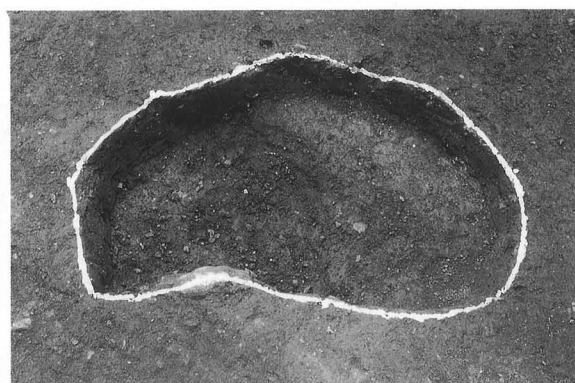
2 第51次調査B-1-2区 第2次面全景(南より)



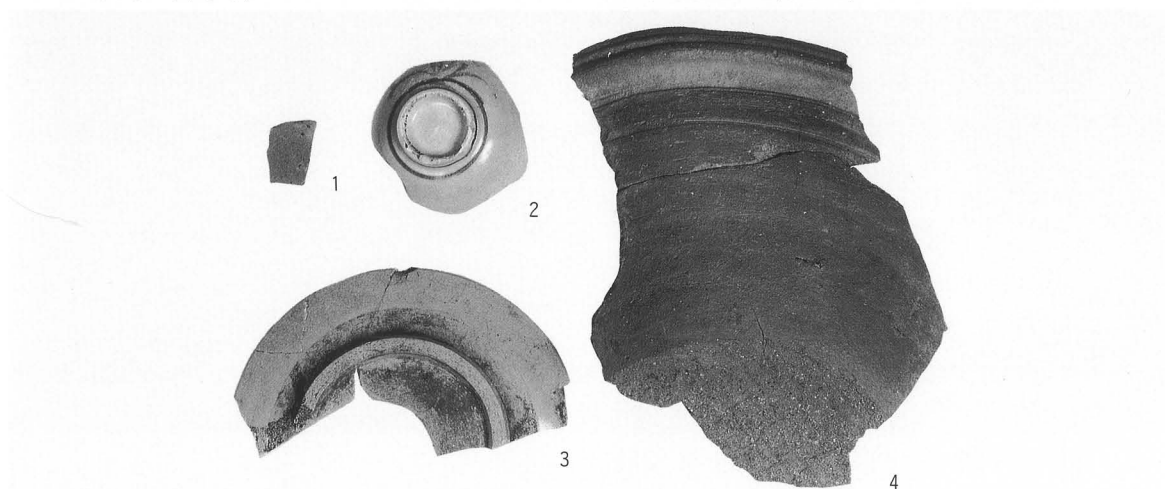
1 第51次調査B-1-2区 第1次面全景(南より)



2 SV01(東より)



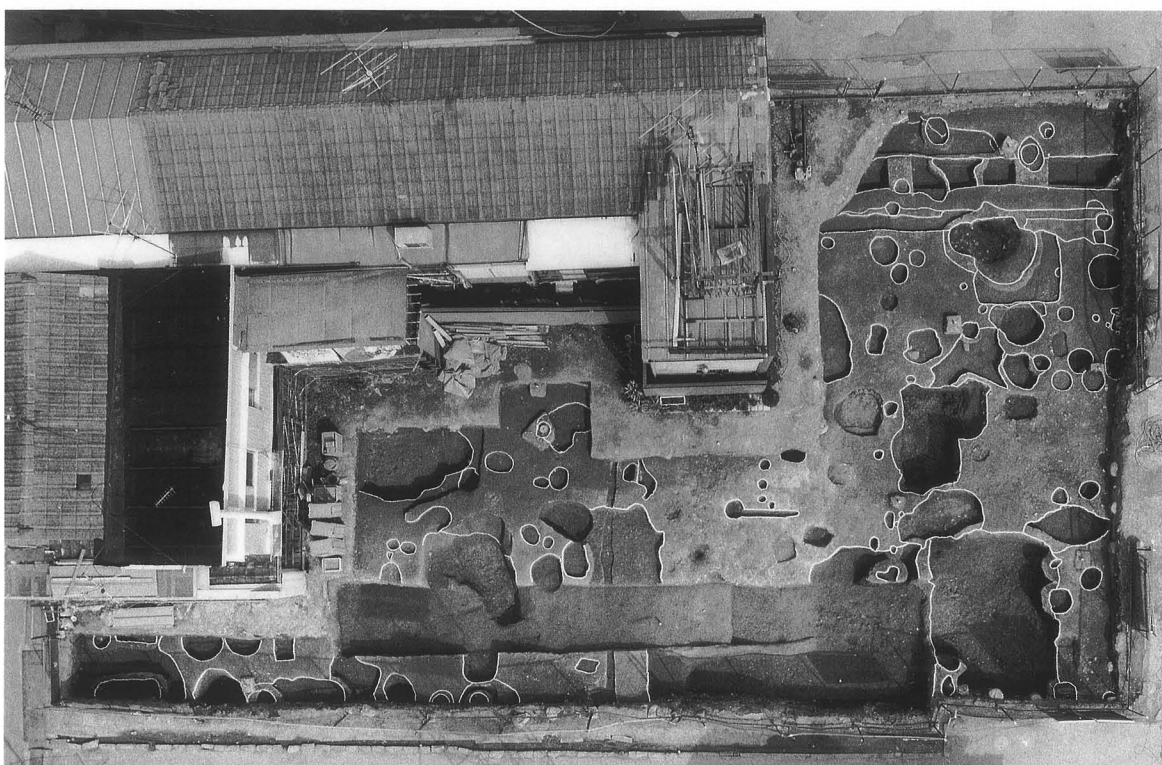
3 SK754(北より)



4 SK754(1)・SV01(2・3)・SK734(4)



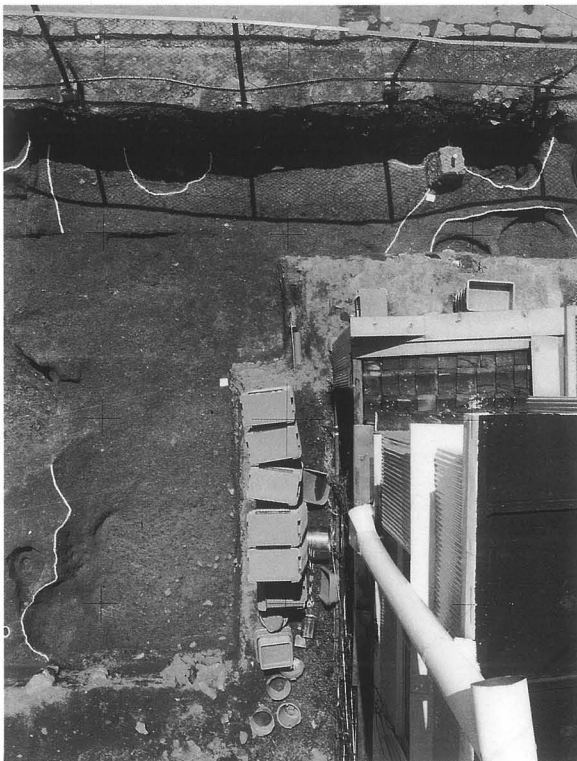
1 第51次調査B-1-3区 第3次面全景(垂直)



2 第51次調査B-1-3区 第2次面全景(垂直)



1 第51次調査B-1-3区 第1次面全景(垂直)

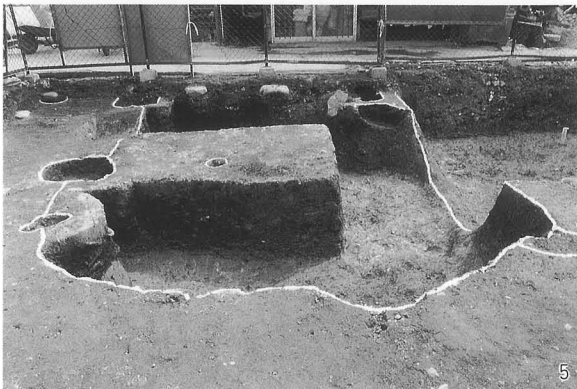
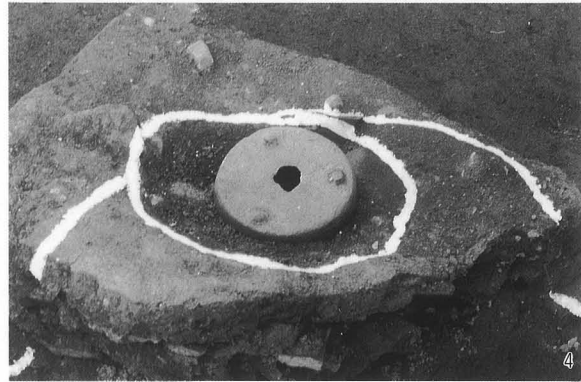
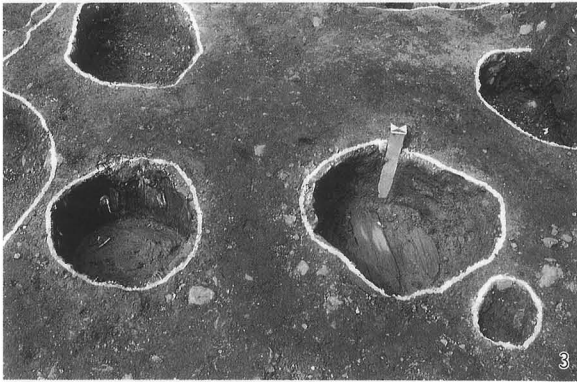
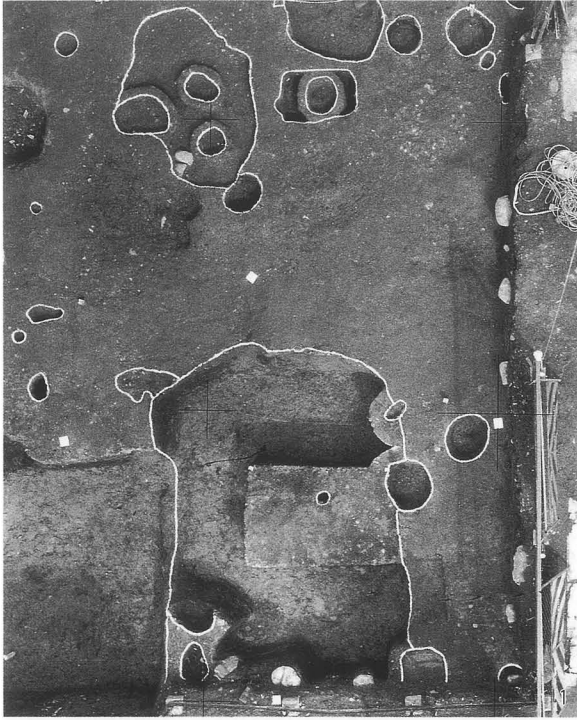


2 SD05(垂直)



3 SD04(西より)





1 SB01 (垂直)  
3 SU01・02 (南より)  
5 SK70・SK192 (北より)

2 SB03 (垂直)  
4 SK91 (南より)  
6 SU03 (南より)



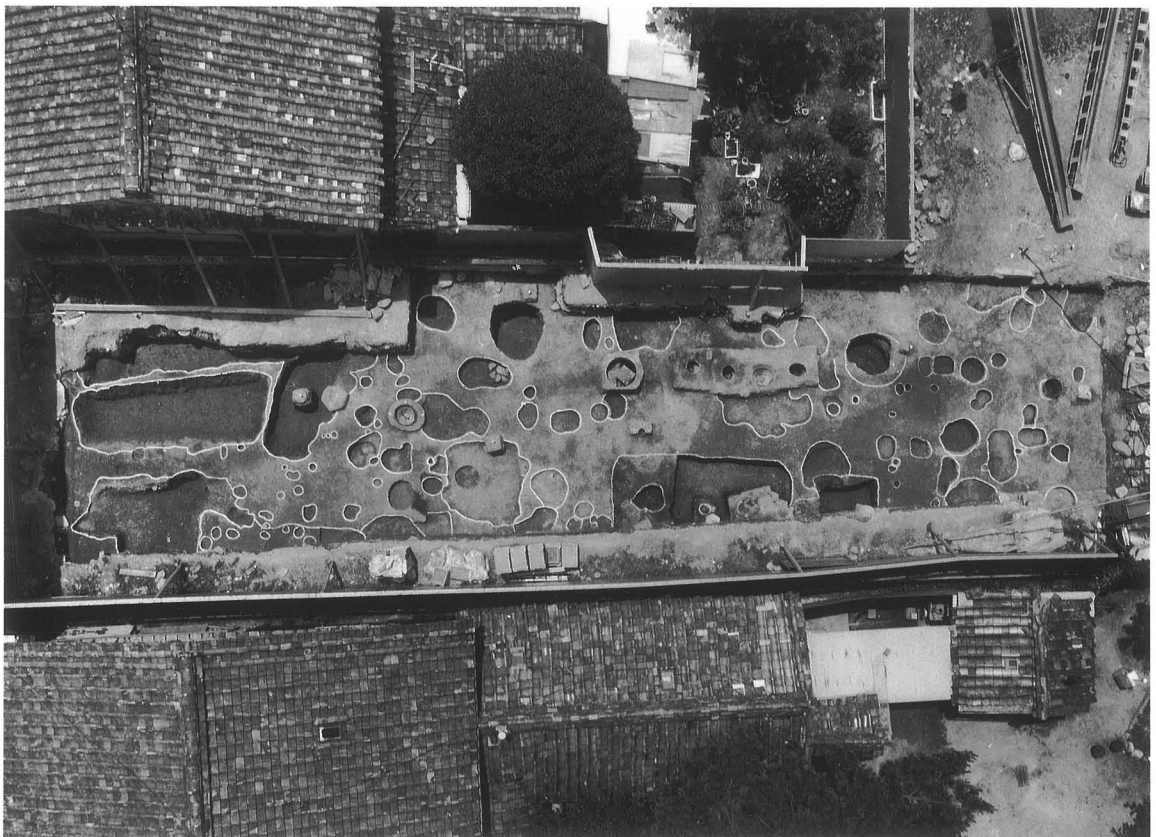
SK223 (1・2)・SK242 (3・4)・SK220 (5~10・12)・SK192 (11)・SK138 (13~19)



SK138 (1)・SK200 (2・3)・SK217 (4~14)・SK91 (15)・SU02 (16)・SK33 (17)・SK70 (18)  
 ・第1次面包含層出土遺物 (19)・第2次面包含層出土遺物 (20)



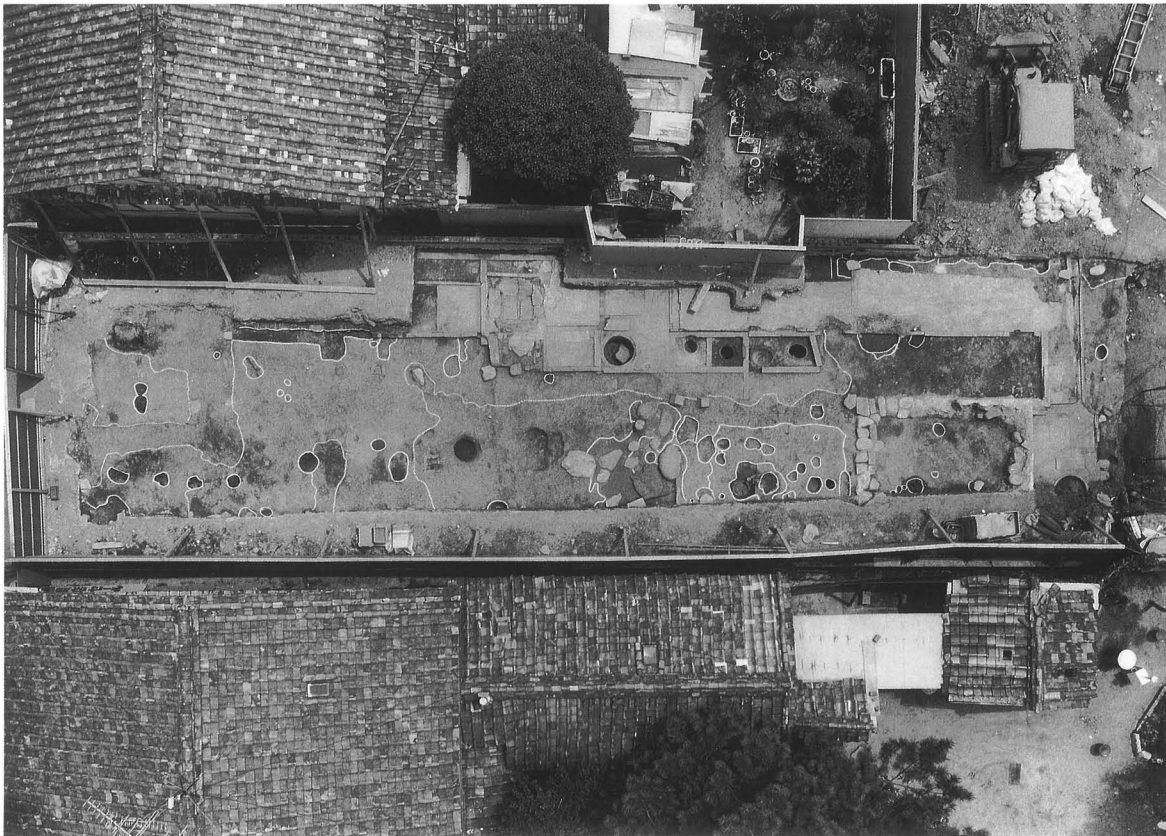
1 第63次調査B-4区 第4次面全景(垂直)



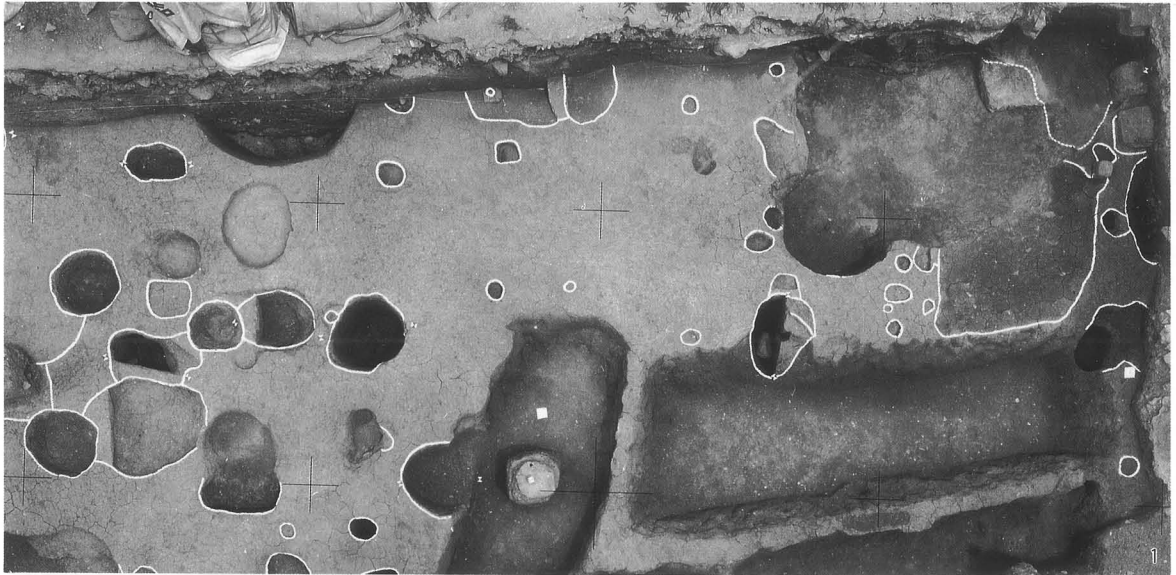
2 第63次調査B-4区 第3次面全景(垂直)



1 第63次調査B-4区 第2次面全景(垂直)

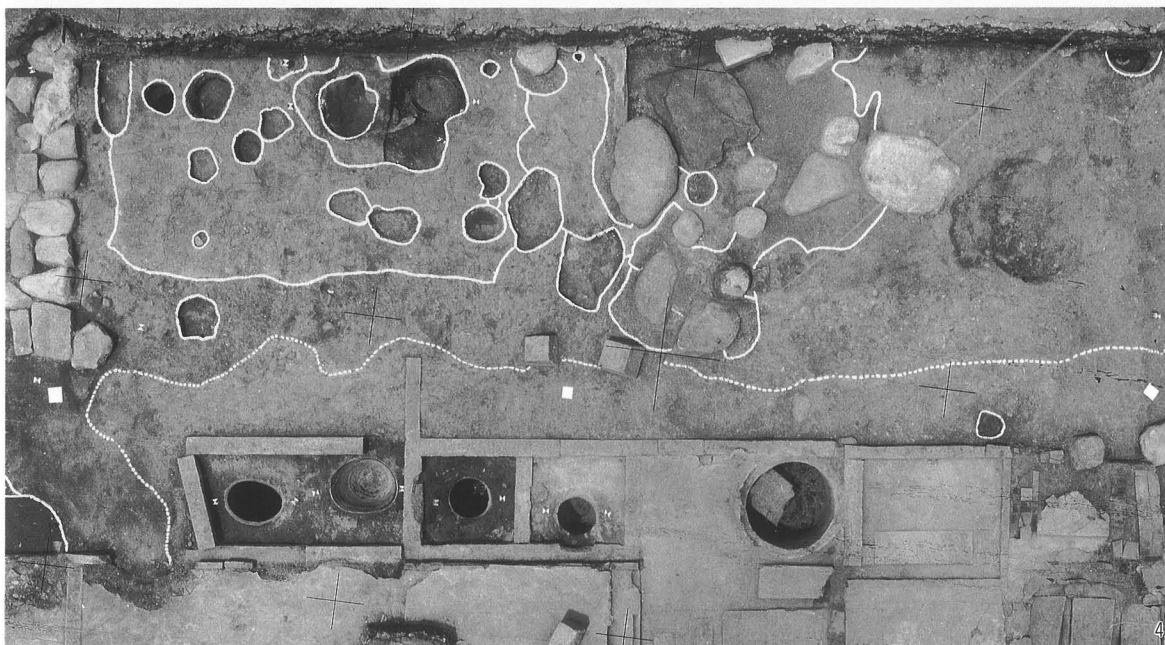


2 第63次調査B-4区 第1次面全景(垂直)



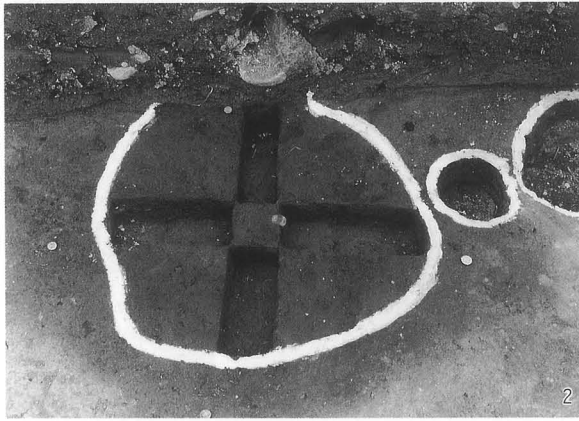
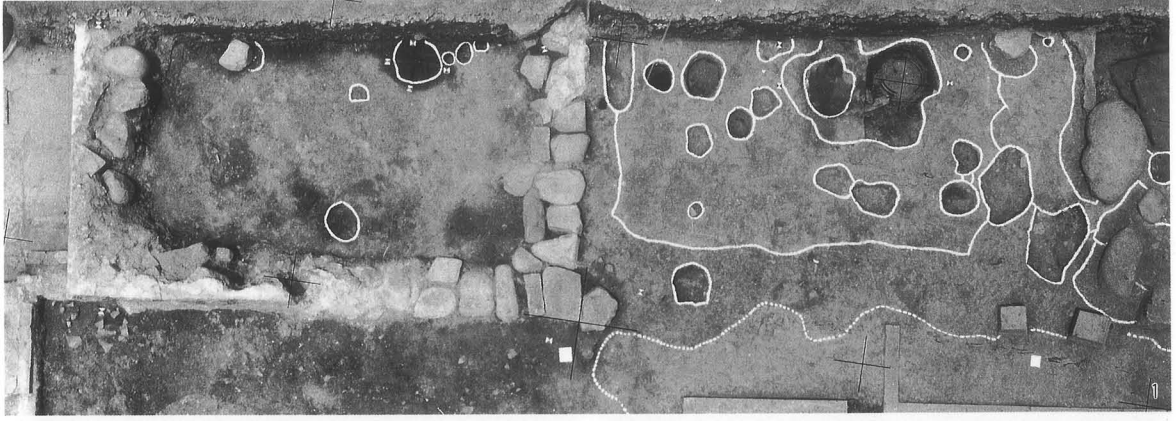
1 SB04 (垂直)  
2 SE04 (南より)  
4 SB05 (南より)

3 SW07 (北より)  
5 SY02 (北より)  
6 SU01 (東より)



1 SW06 (北より)  
3 SB01 (垂直)

2 SK69 (東より)  
4 SB02 (垂直)



1 SB03 (垂直)  
2 SV01 (南より)  
4 SY01上面 (南より)  
6 SW01・02 (北より)

3 SW05 (南より)  
5 SY01下面 (南より)  
7 SW03・04 (北より)





1 SW01・SW02・SW03・SW04 (北より)



1



2



3



4



5



6



7



11



8



9



12



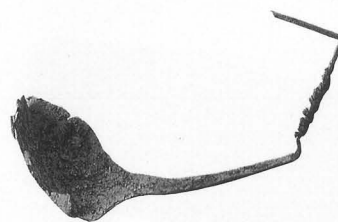
13



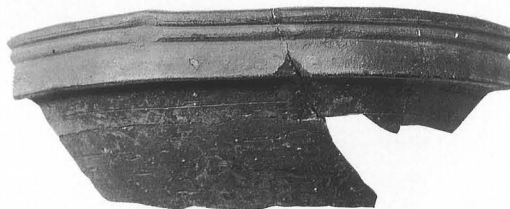
10



10'



14



17



15



16

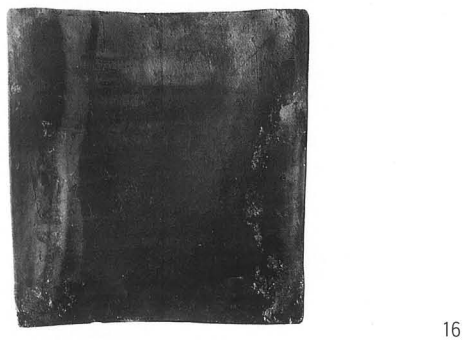
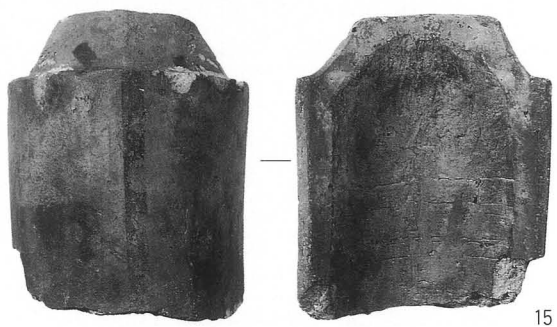
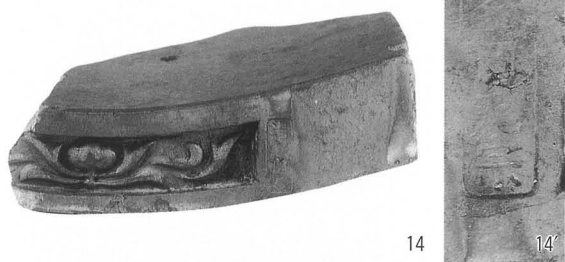
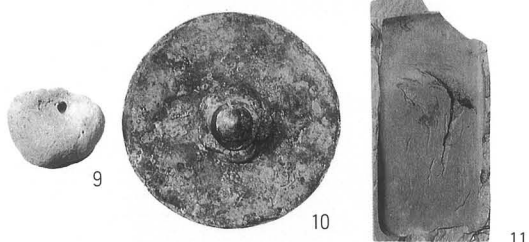
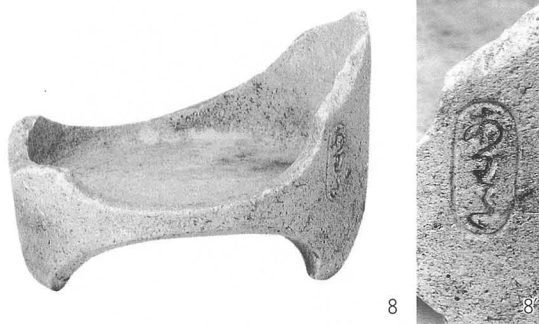
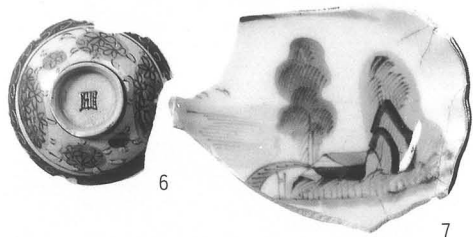
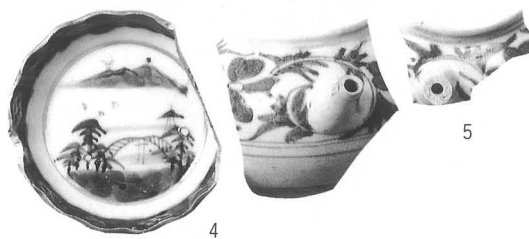
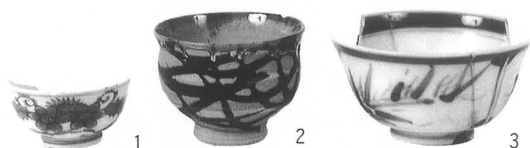


18

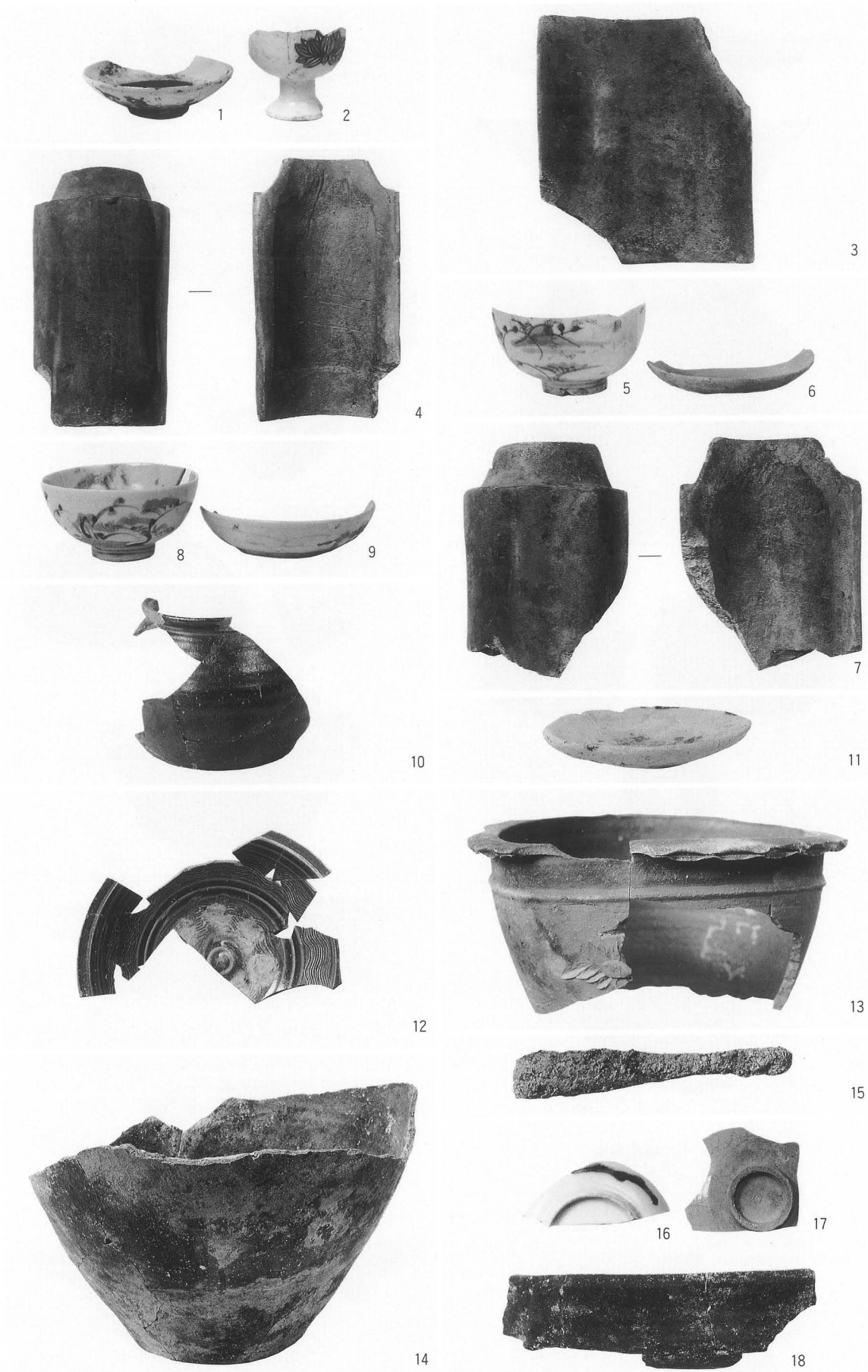


19

SP214 (1)・SP222 (2)・SK236 (3~5)・SK260 (6~19)



SE04 (1~16)・SW07 (17)



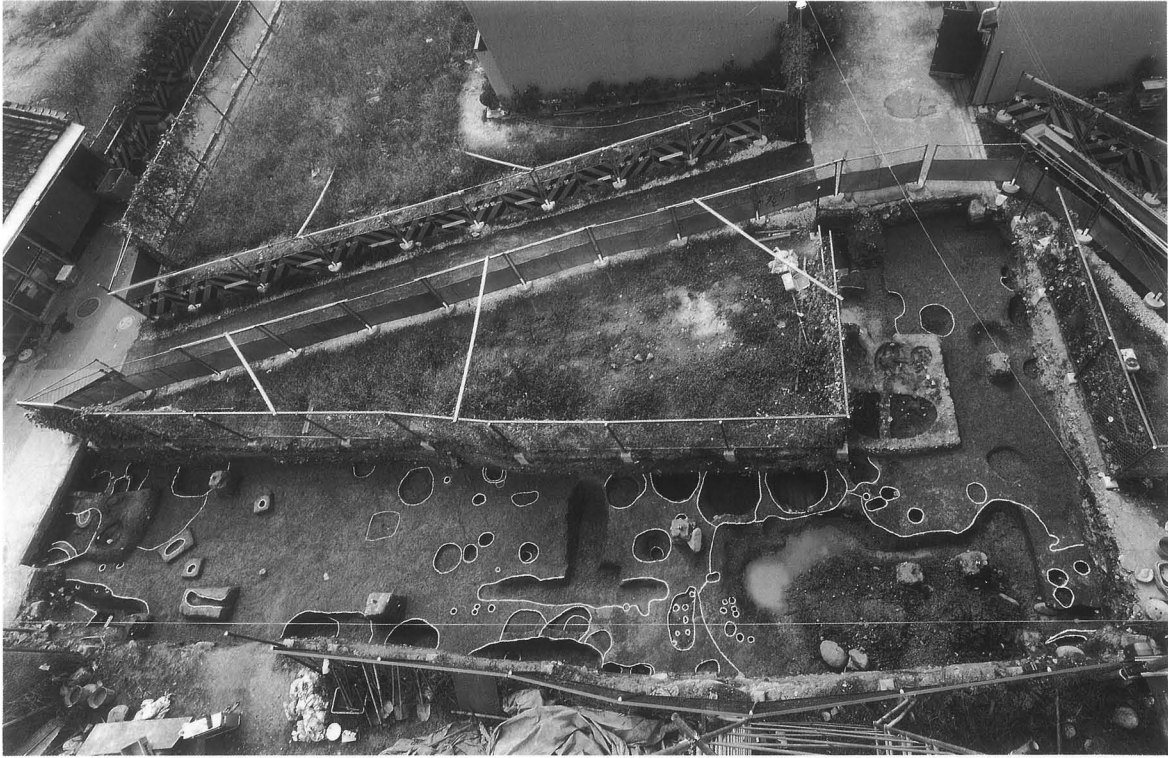
SK156 (1~4)・SK196 (5~7)・SK135 (8~12)・SY02 (13)・SW06 (14)・SU01 (15~18)



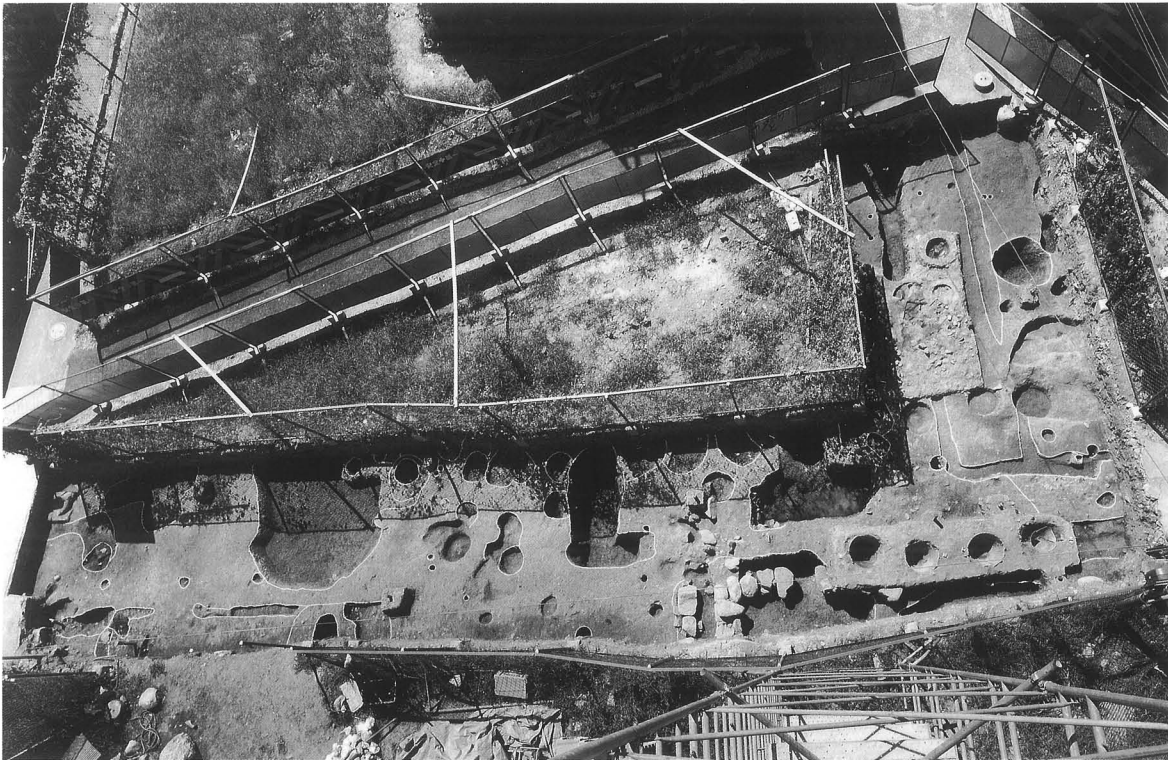
SK69上層 (1)・SK69 (2~6)・SK70 (7~11・13~15)・SK71 (12・16)・SK93 (17~20)・SK44 (21)



SY01 (1)・SW05 (2)・SW03 (3)・SW04 (4)・SW02 (5)・SP214 (6・7)・SP222 (8)・  
 SP223 (9・10)・SK186 (11・12)・SK70 (13)



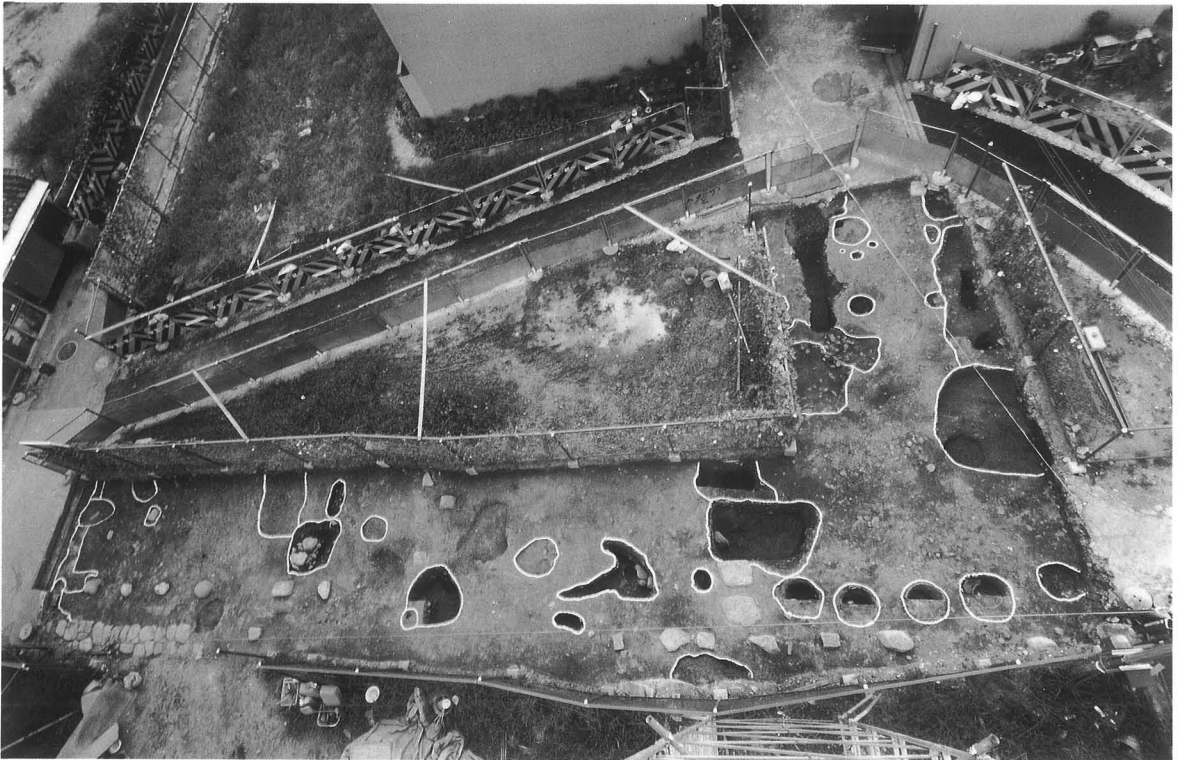
1 第63次調査B-6区 第4次面全景(東より)



2 第63次調査B-6区 第3次面全景(東より)

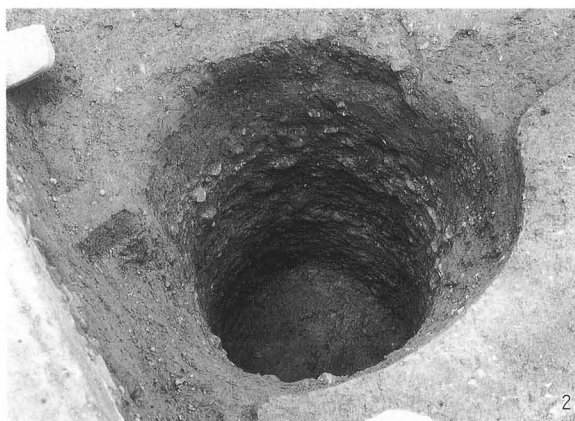


1 第63次調査B-6区 第2次面全景(東より)



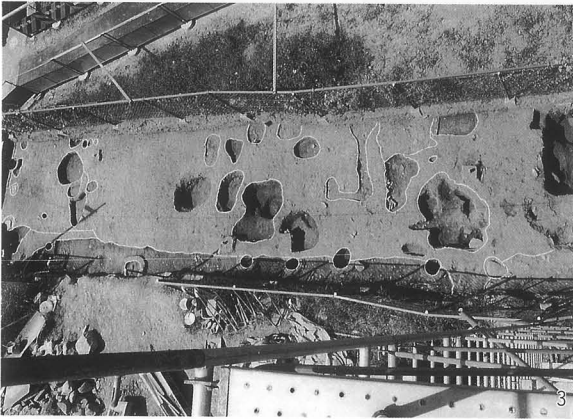
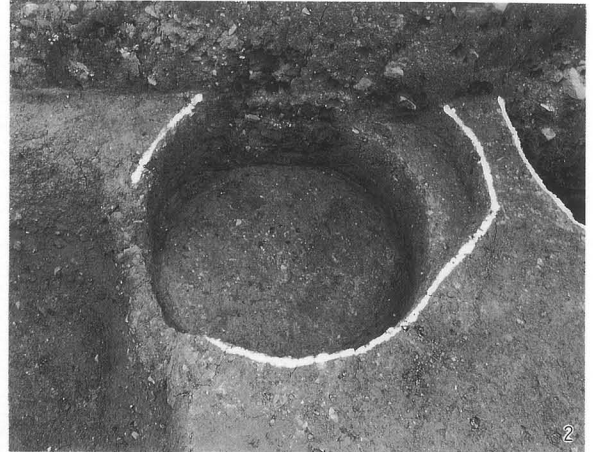
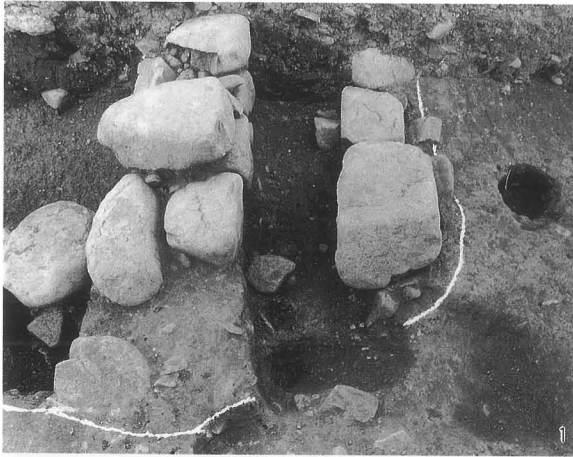
2 第63次調査B-6区 第1次面全景(東より)





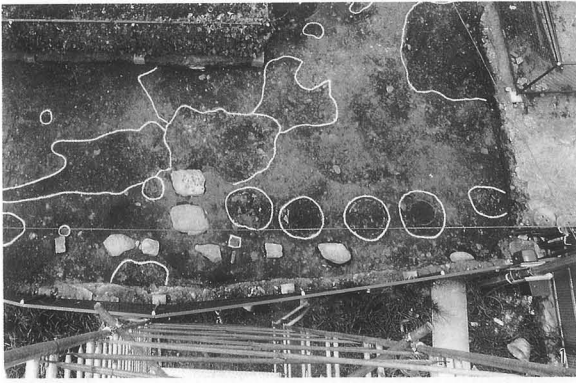
- 1 SP105 (南より)
- 3 SE01 (東より)
- 5 SX109 (東より)
- 6 SA01 (東より)

- 2 SE02 (東より)
- 4 SU02 (東より)
- 7 SV05・06 (東より)



1 SD06 (西より)  
 3 SB04 (東より)  
 5 SW05 (北より)  
 7 SB01 (東より)

2 SU01 (東より)  
 4 SV01・02・03 (東より)  
 6 SW06 (東より)  
 8 SB01・02 (南より)



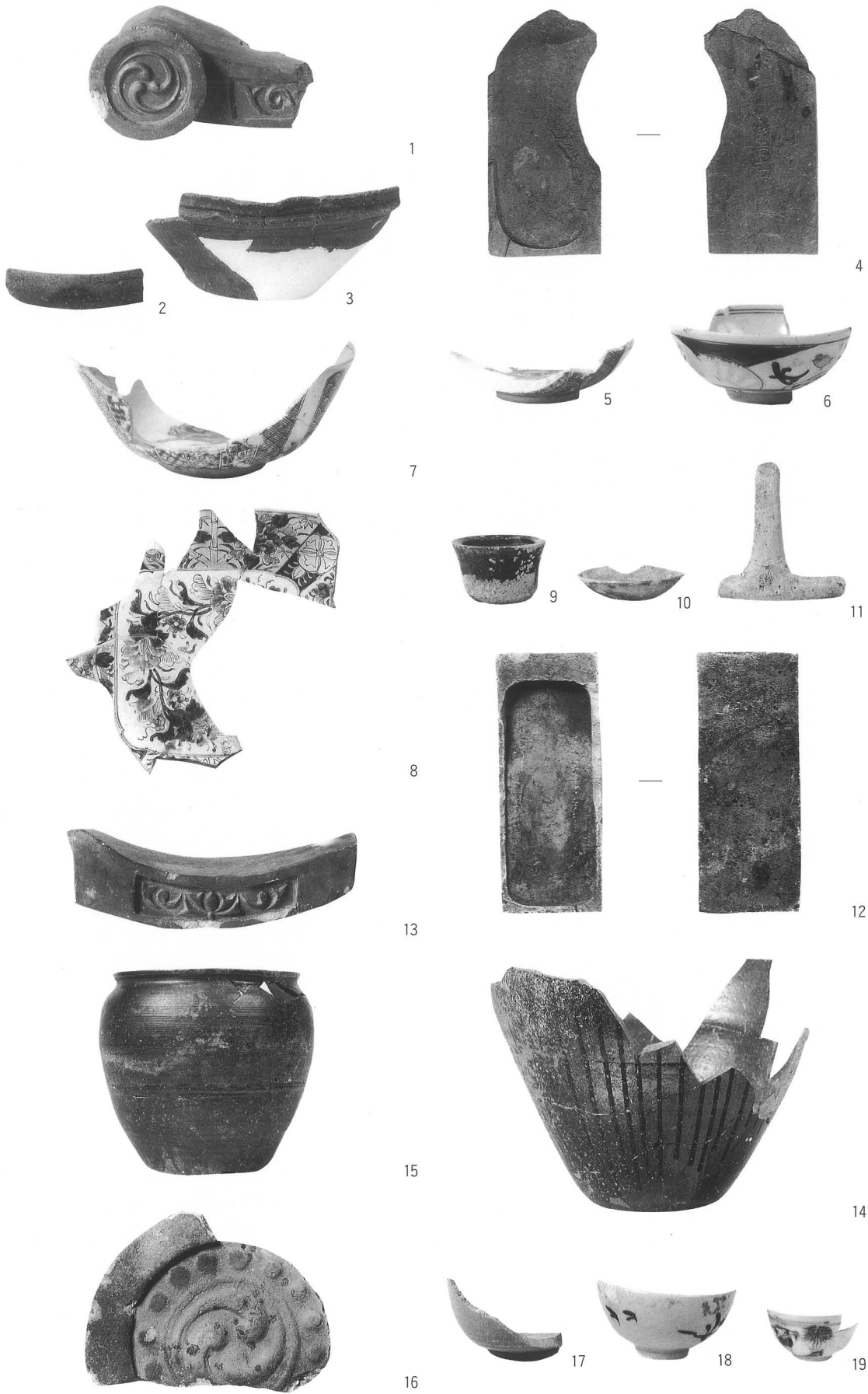
1 SB03 (東より)

2 SI07 (北より)

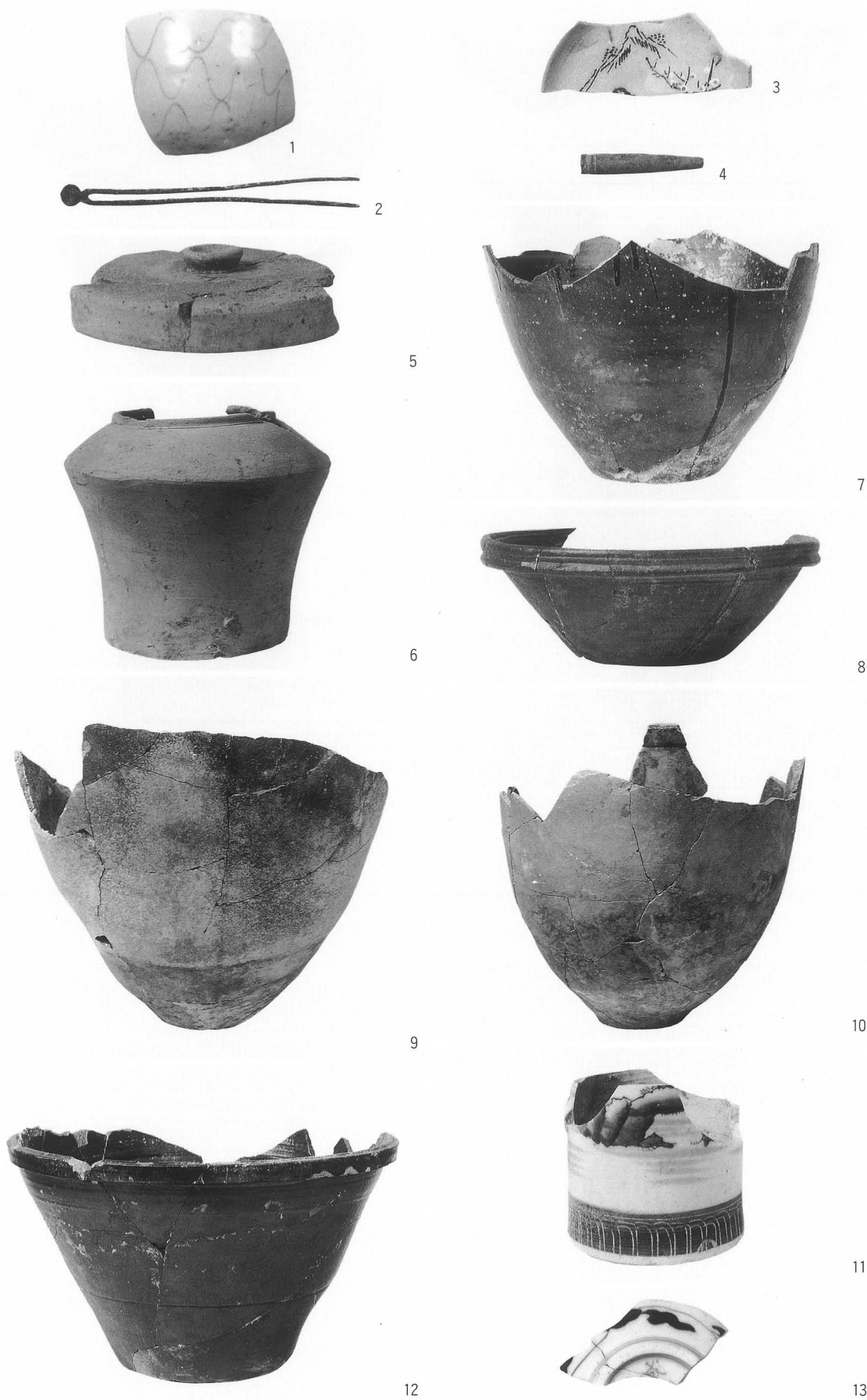
3 SW01・02・03・04 (西より)



SE02 (1~11・18)・SE01 (12・14~17)・SK115 (13)・SK60 (19)・SK63 (20)・SK60下層 (21)・SK81 (22~24)・SD06 (25・26)



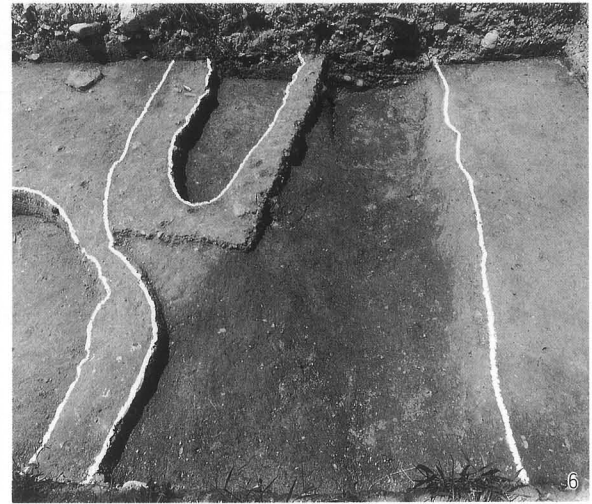
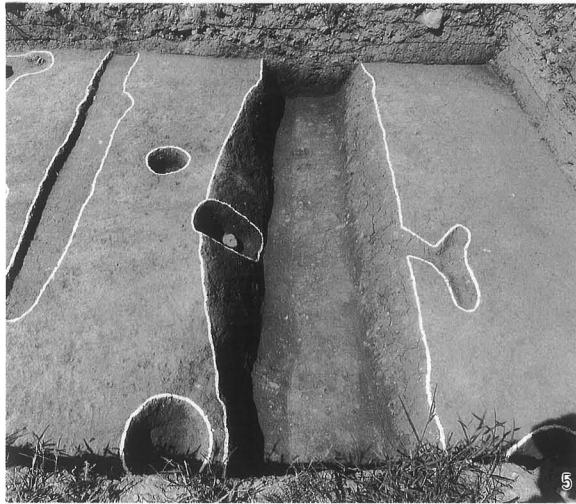
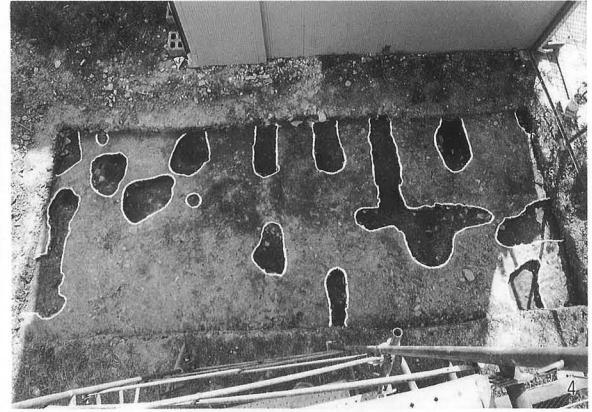
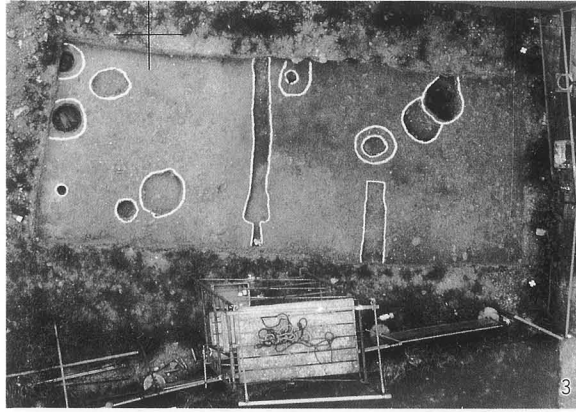
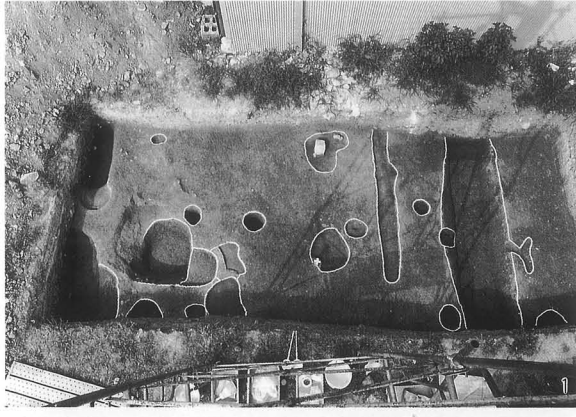
SK81 (1)・SK63 (2~4)・SK71 (5~13)・SW05 (14)・SW06 (15)・SV02 (16)・SK47 (17・18)・SK49 (19)



SK47 (1)・SK49 (2)・SW04掘形 (3・4)・SI07 (5・6)・SW04 (7)・SW01 (8・9) SW02 (10・11)・SW03 (12・13)



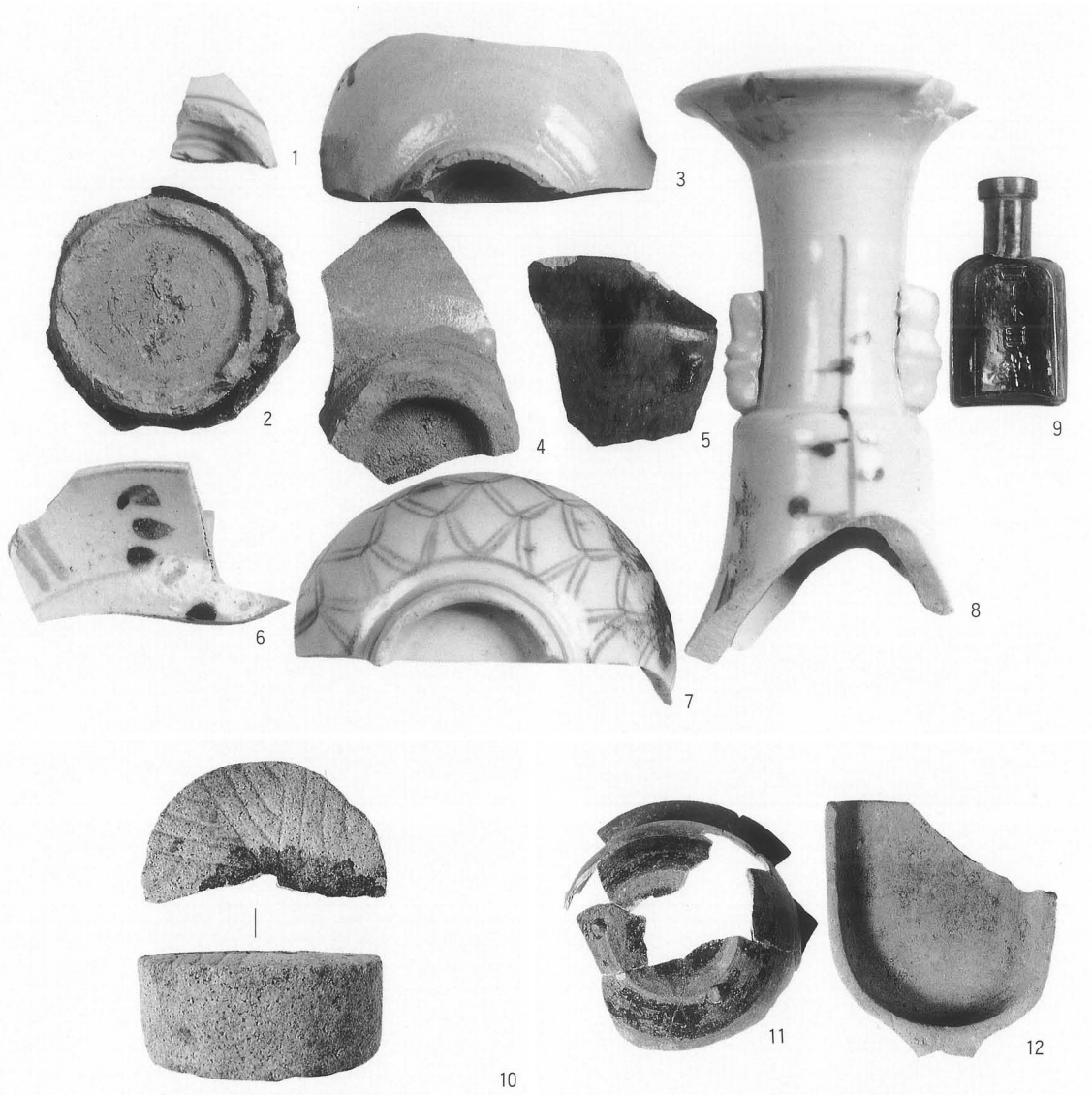
SK14 (1 ~ 7) ・表採遺物 (8) ・SK47 (9) ・SK18 (10) ・SK15 (11)



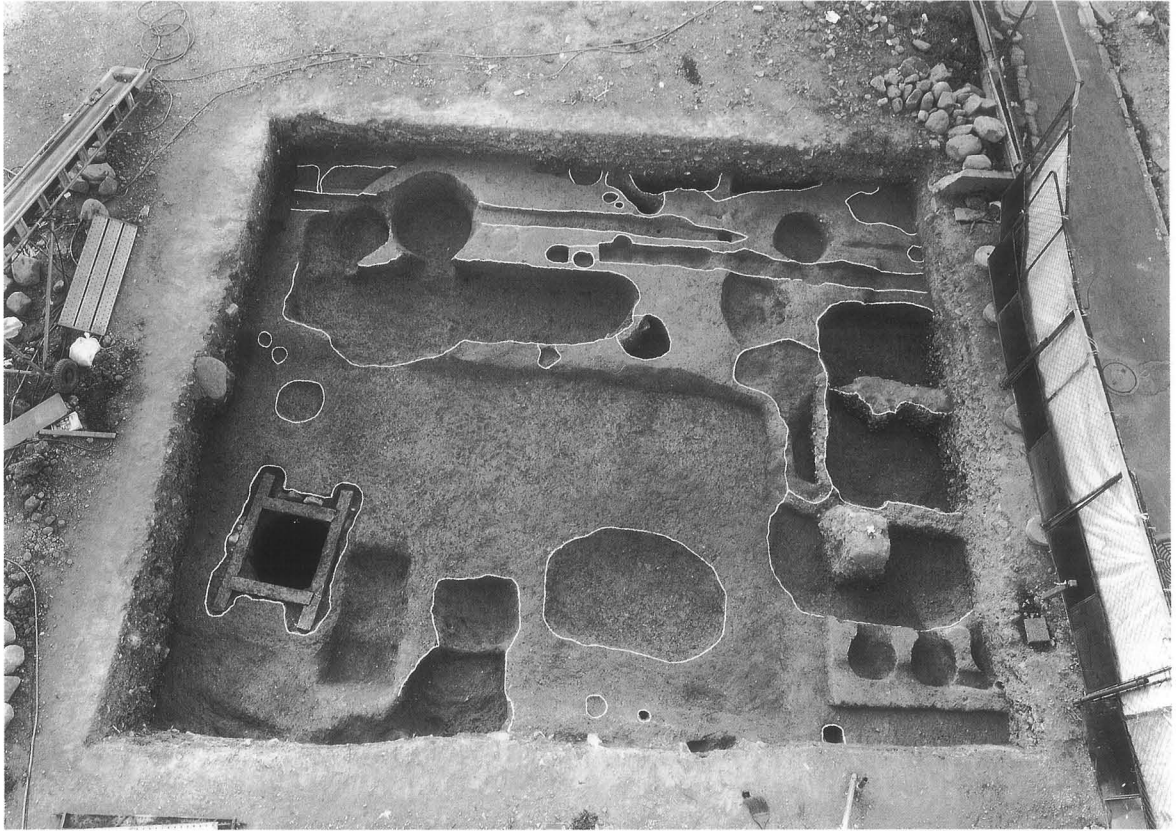
1 第78次調査B-7区第4次面全景(東より)  
 3 第78次調査B-7区第2次面全景(垂直)  
 5 SD04(東より)  
 7 SU01(北より)

2 第78次調査B-7区第3次面全景(東より)  
 4 第78次調査B-7区第1次面全景(東より)  
 6 SD03(東より)  
 8 SU02(北より)

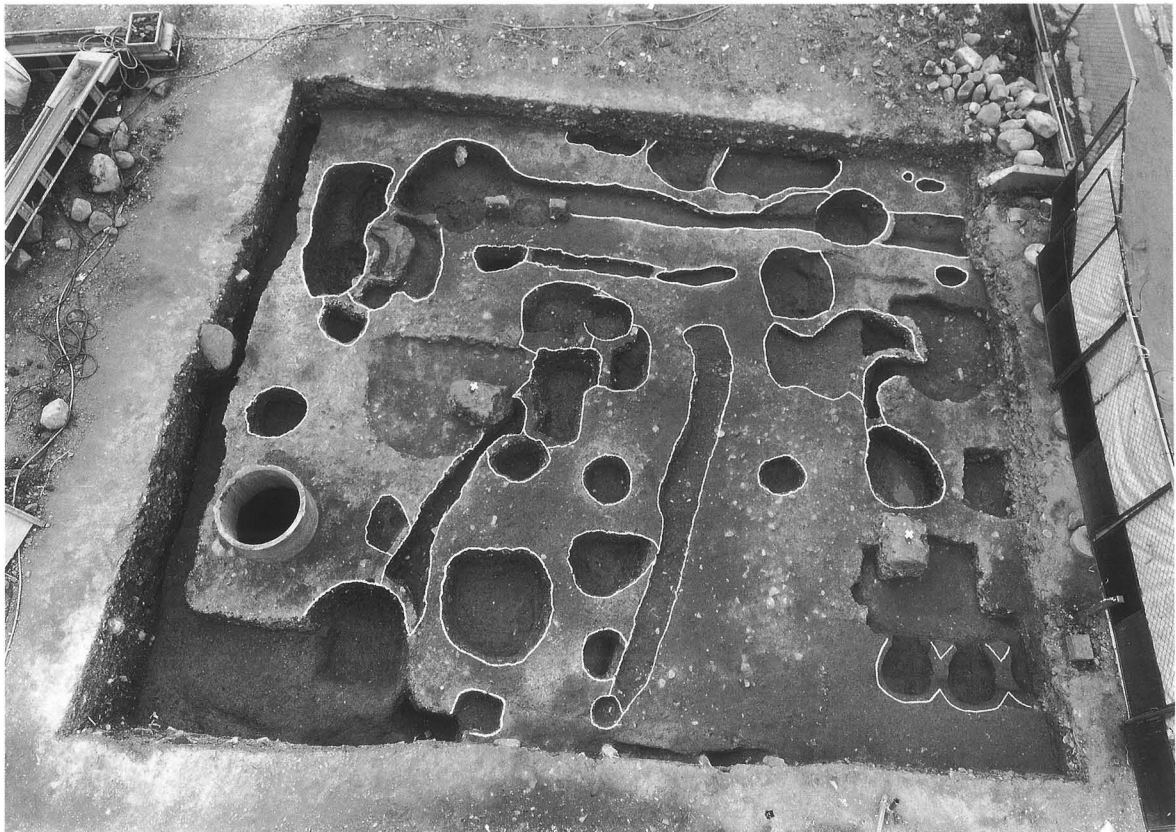




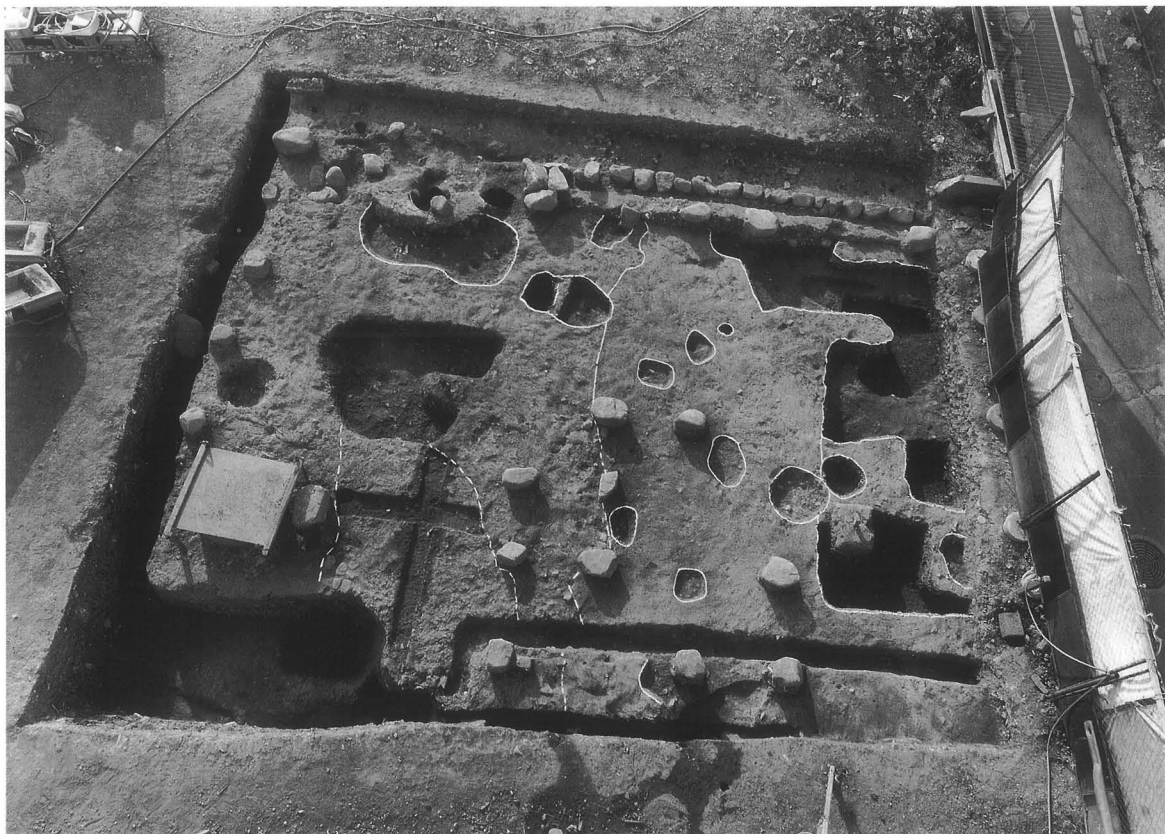
SD04 (1・2)・SD03 (3・4)・SK10 (5・6)・SK12 (7・8・11・12)・SU02 (9)・SK16 (10)



1 第83次調査B-9区 第4次面全景(東より)



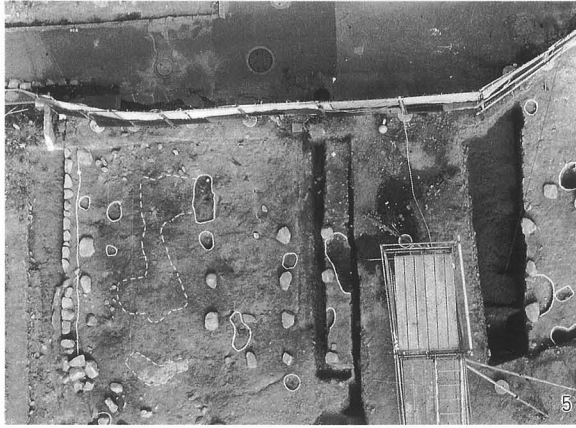
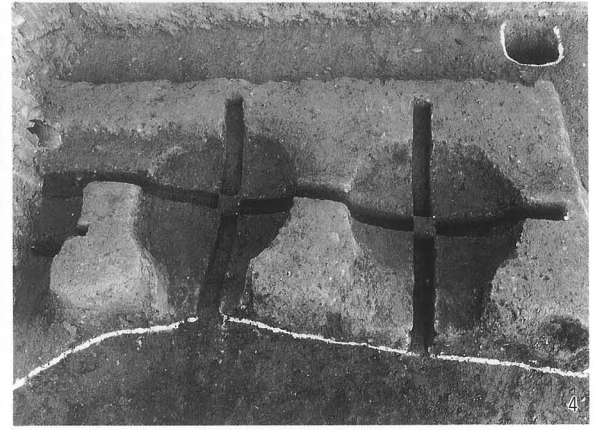
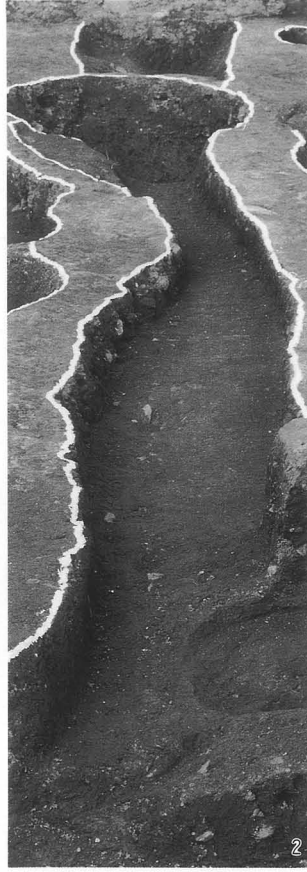
2 第83次調査B-9区 第3次面全景(東より)



1 第83次調査B-9区 第2次面全景(東より)



2 第83次調査B-9区 第1次面全景(東より)

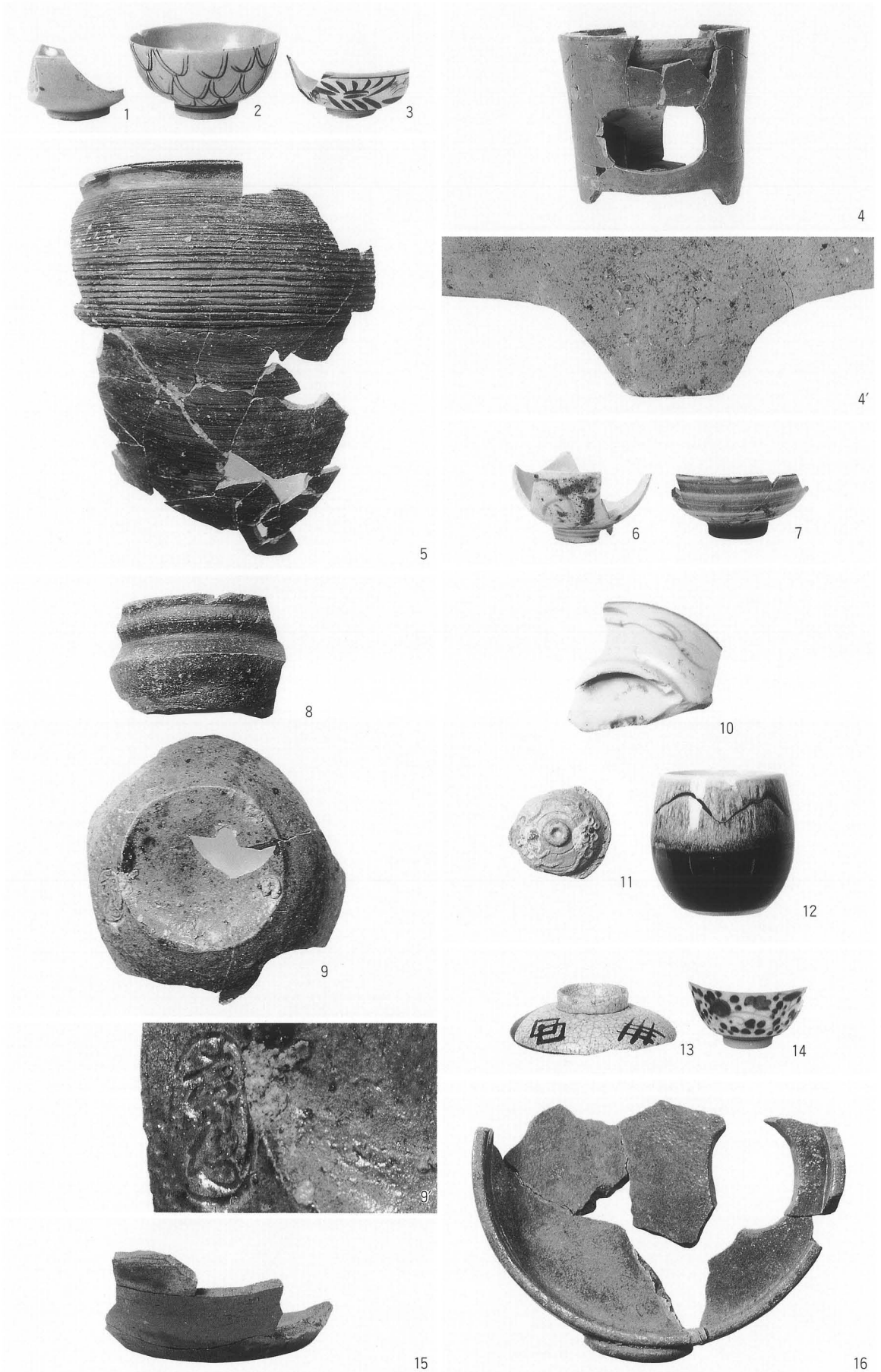


1 SD17 (南より)  
2 SD03 (南より)  
5 SB01 (垂直)  
7 SU02・01 (西より)

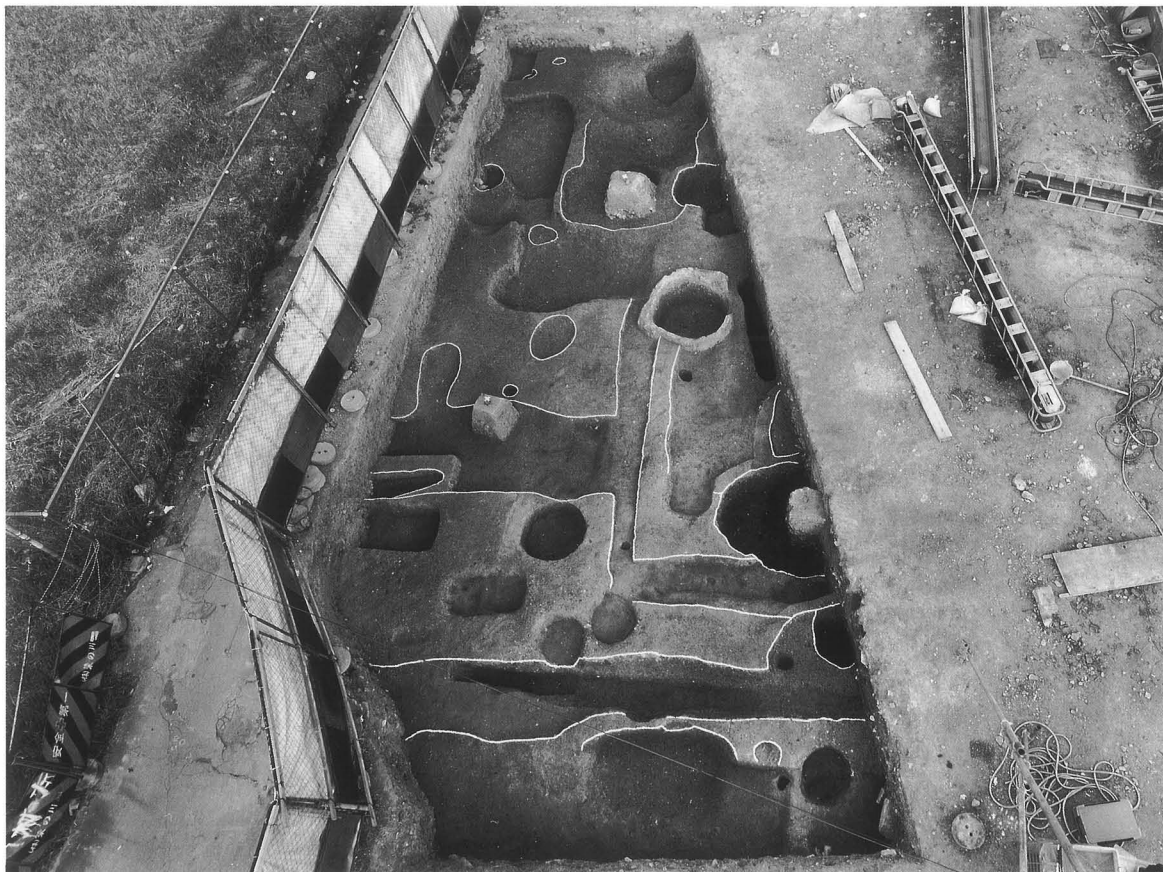
3 SK100・98 (南東より)  
4 SV01・02・03 (西より)  
6 SB02 (垂直)  
8 SD01 (南より)



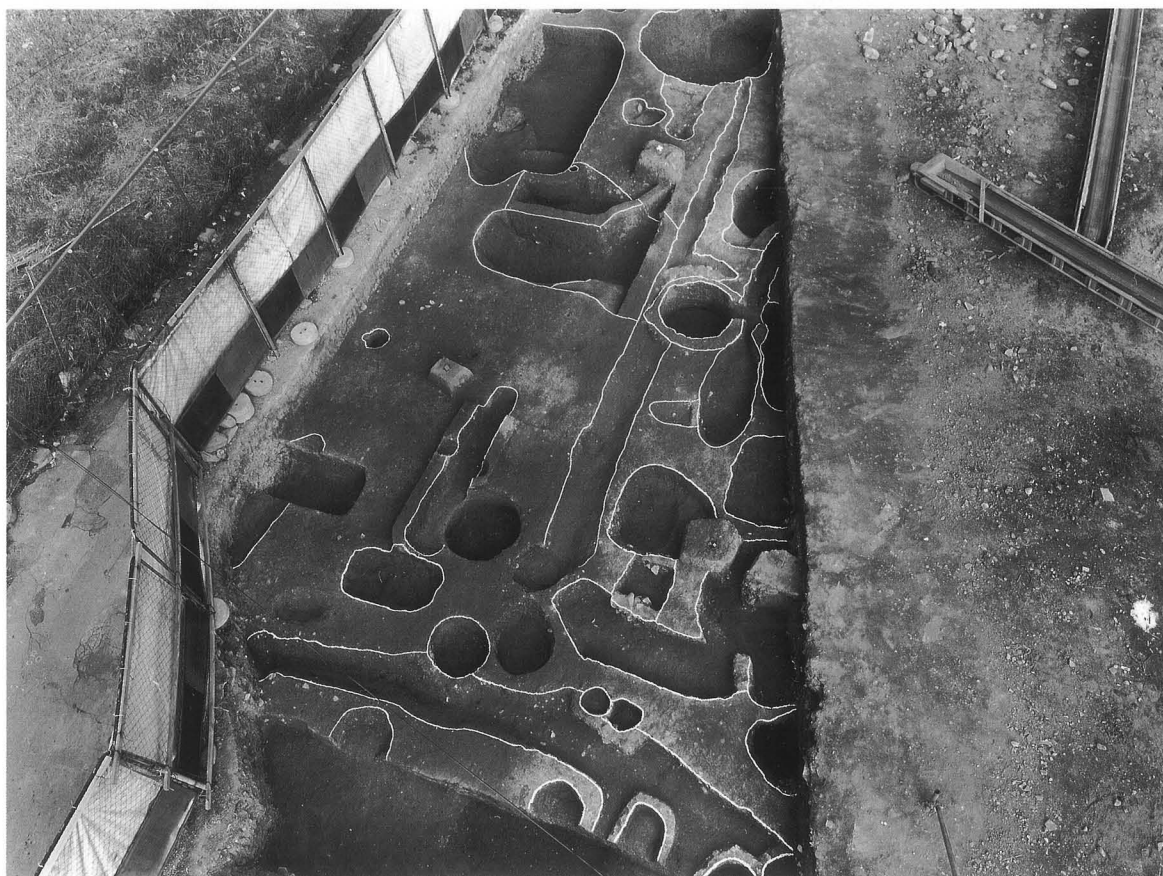
SD17 (1)・SK98 (2~6)・SK100 (7・10・11)・SK93上層 (8)・SK97 (9)・SV03 (12)・SK45 (13~16)



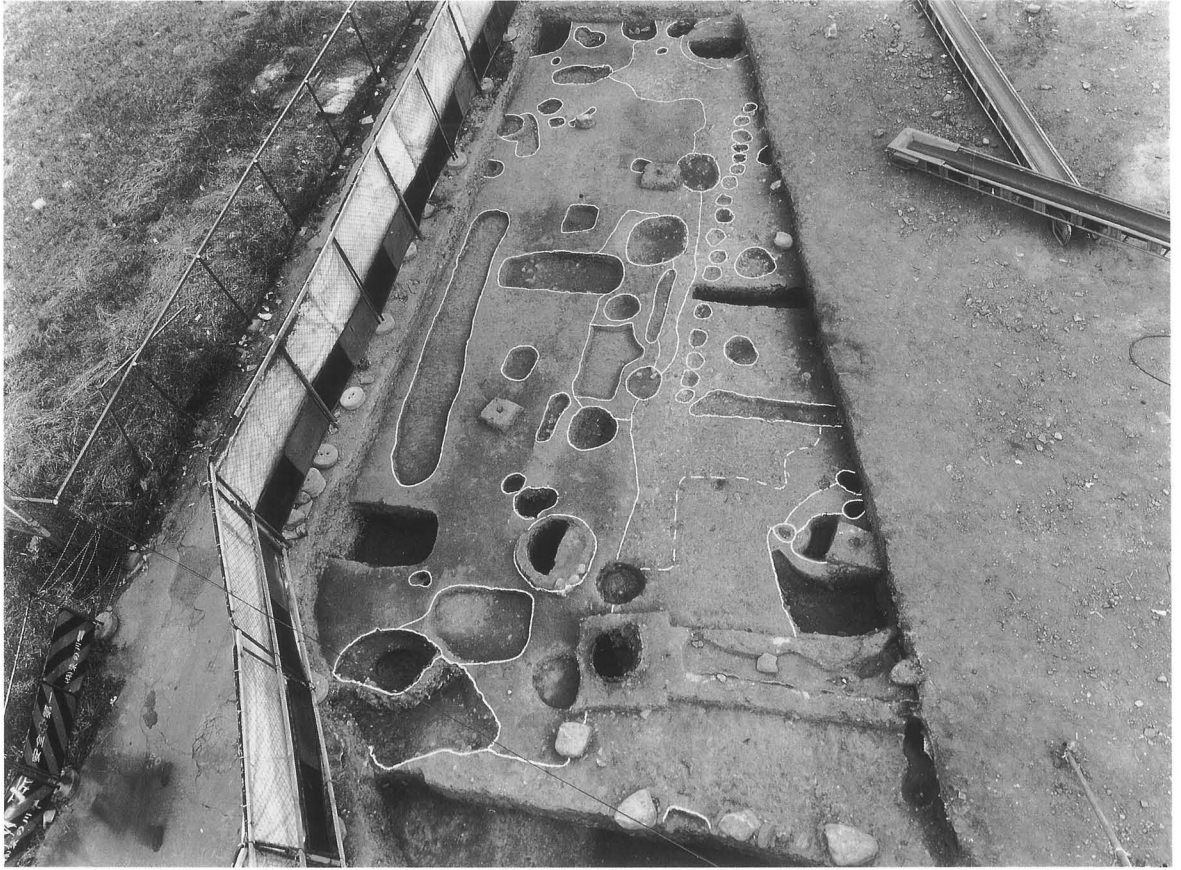
SK45 (1・2)・SK24 (3～5)・SK17 (6～9)・SU01掘形 (10・11)・SU01 (12)・SD01埋土 (13～16)



1 第83次調査B-10区 第4次面全景(西より)



2 第83次調査B-10区 第3次面全景(西より)

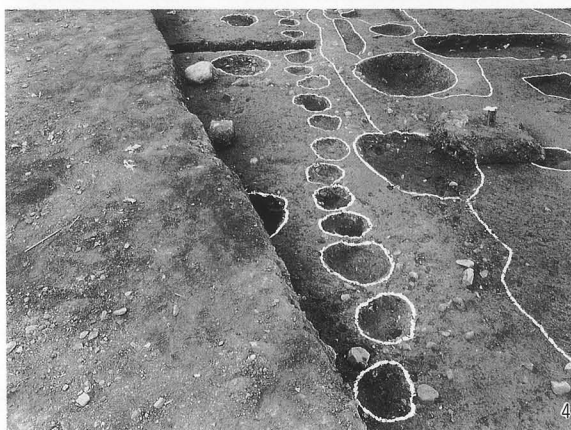


1 第83次調査B-10区 第2次面全景(西より)



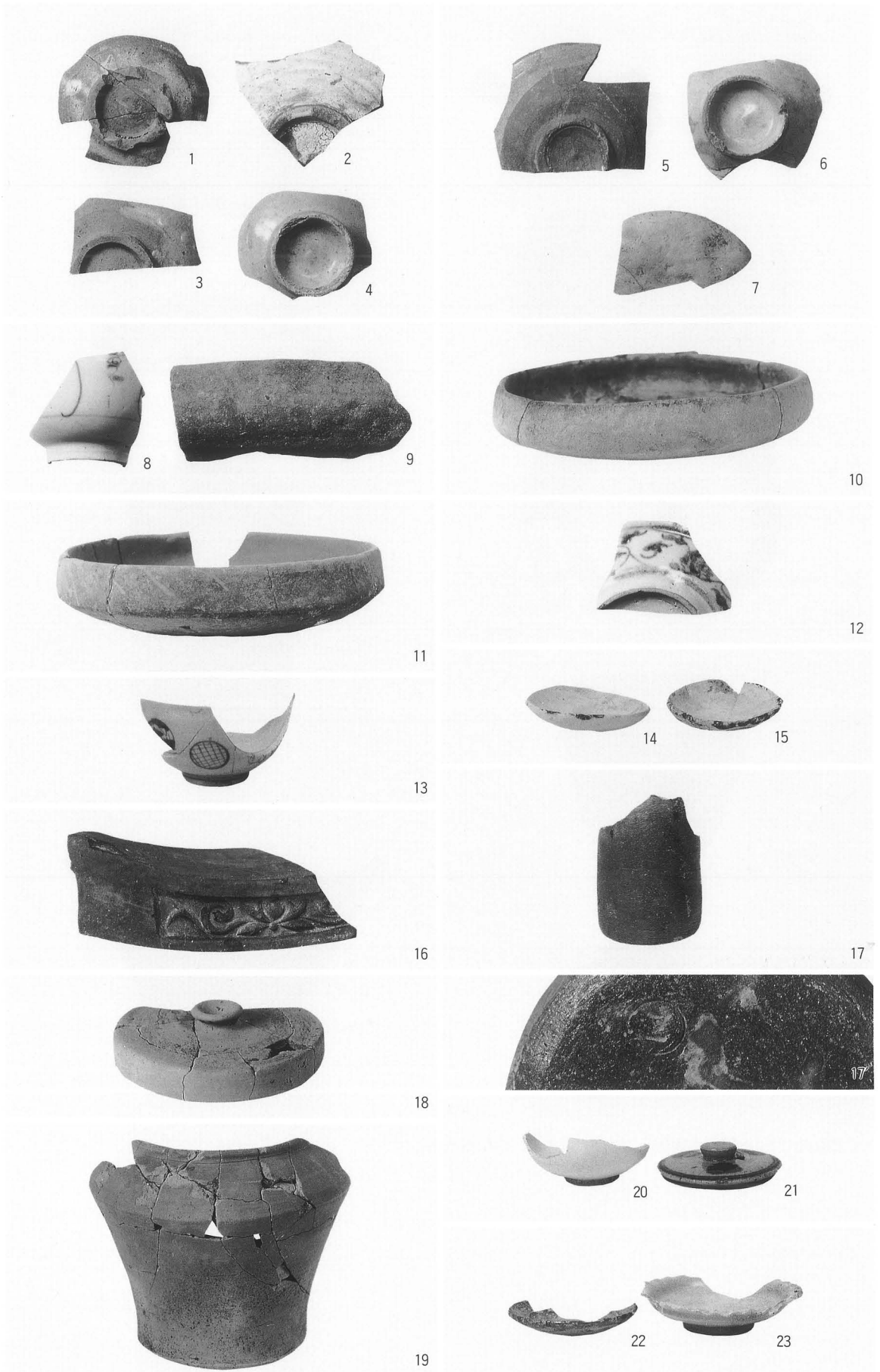
2 第83次調査B-10区 第1次面全景(西より)



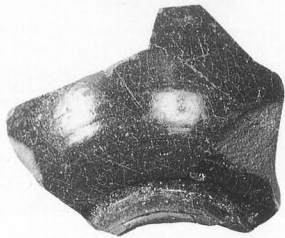
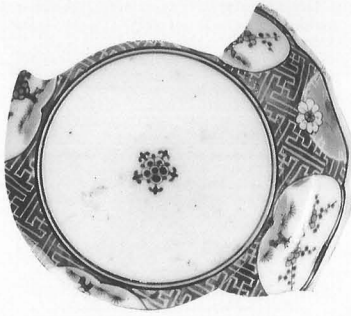
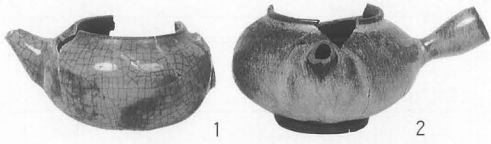


1 SK87焙烙出土状況(南より)  
3 SD10(南より)  
5 SI02(北より)  
7 SW01(北より)

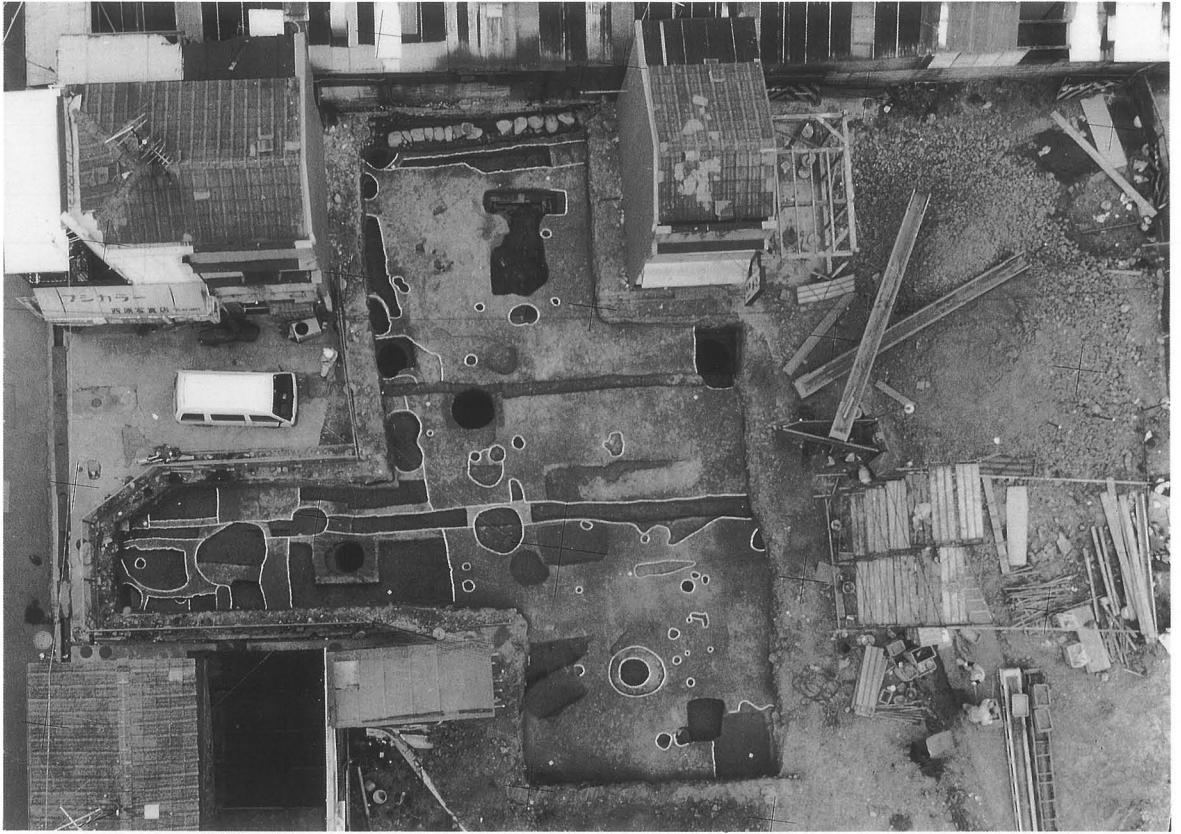
2 SD07(西より)  
4 SA01(東より)  
6 SU02(北より)  
8 SW01下層(北より)



SD13 (1~4)・SD14 (5~7)・SK87 (8~11)・第4次面精査時 (12)・SU03 (13・14)・SU04 (15・16)・SK58 (17)・SI02 (18・19)・SU01 (20)・SU02下層 (21)・SK38 (22・23)



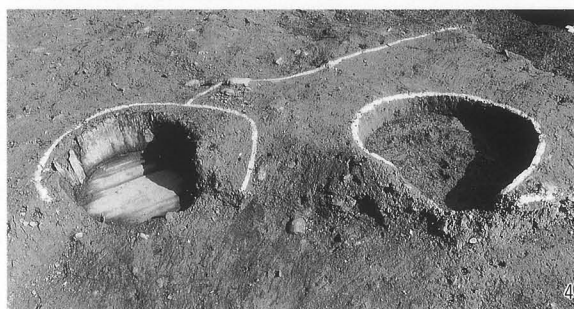
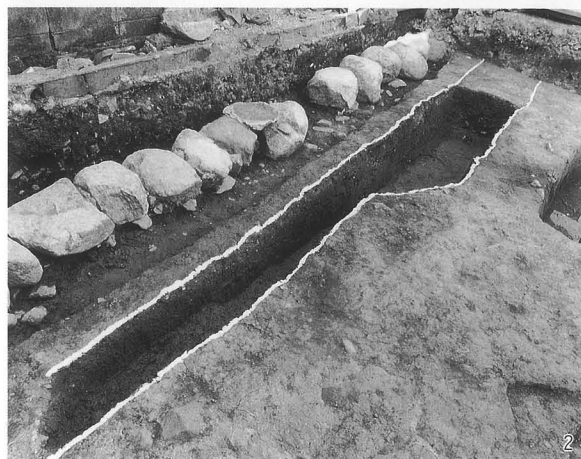
SK41 (1~5)・SW01 (6・7)・第2次面精査時 (8)



1 第86次調査B-11-1区 第2次面全景(垂直)

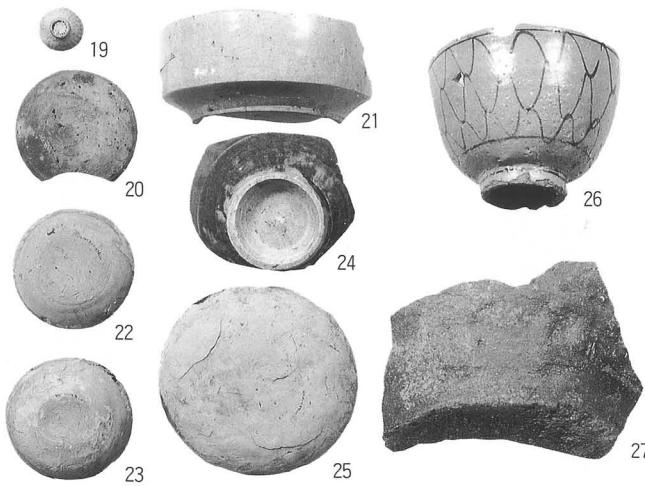
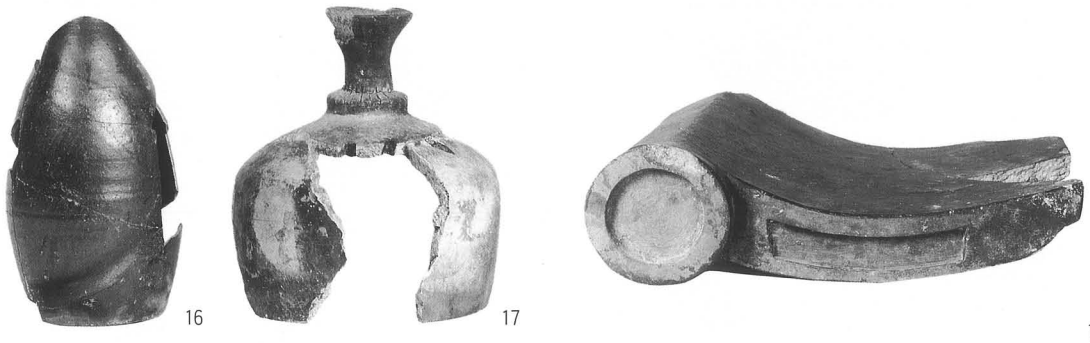
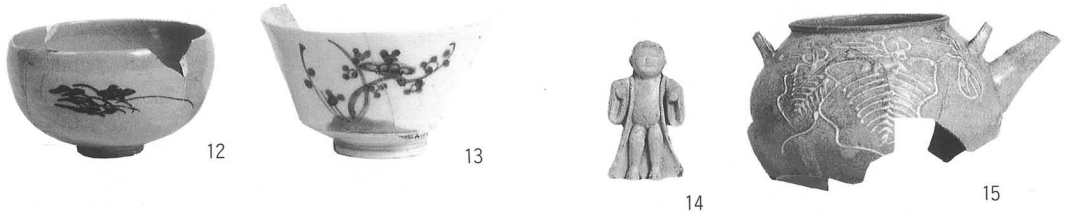
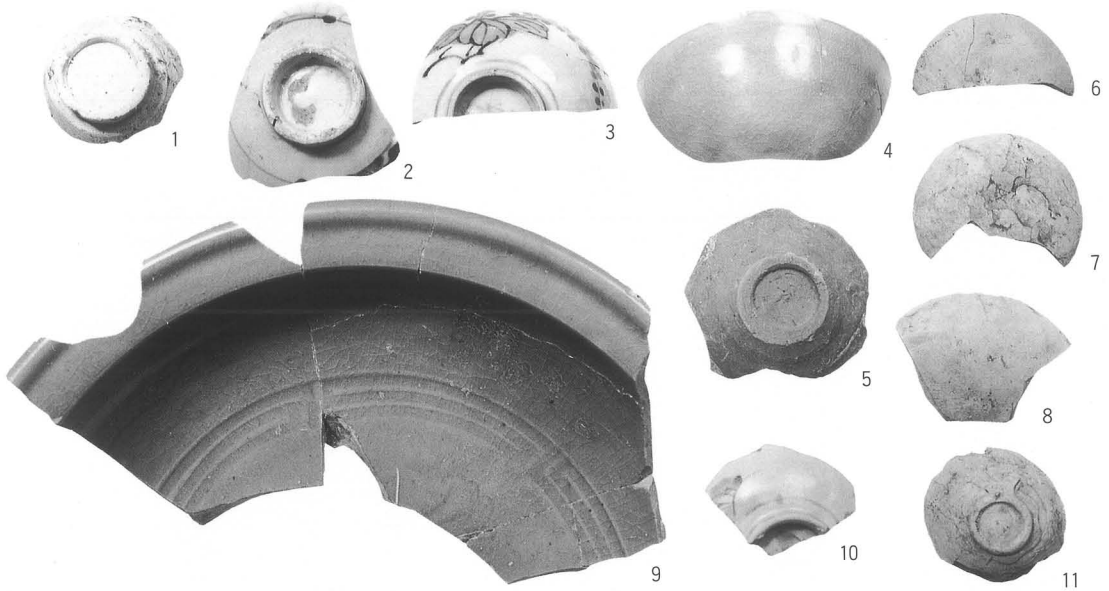


2 第86次調査B-11-1区 第1次面全景(垂直)

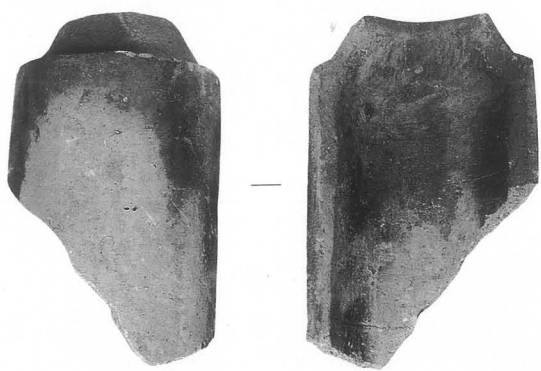


1 SD05・07・08 (垂直)  
2 SD06 (西より)  
5 SD04 (東より)

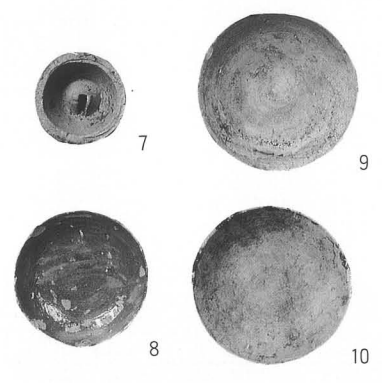
3 SE02 (東より)  
4 SU01・02 (南より)  
6 SU03 (北より)



SD05 (1・2)・SD06 (3)・SK71 (4・5)・SD07 (6)・SD08 (7・8)・SK45 (9~11)・SE02 (12~17)・SU02 (18)・SD04掘形 (19・20)・SD04埋土 (21)・SK17 (22~27)



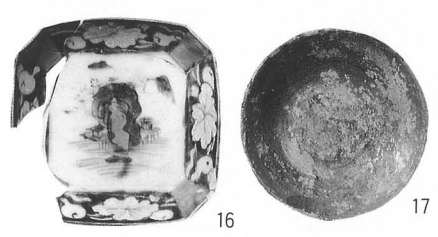
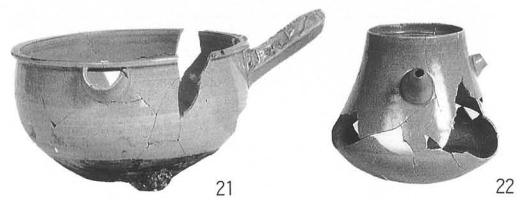
1



12



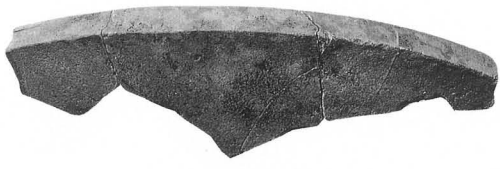
11



23

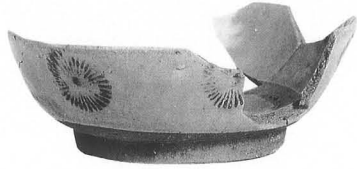
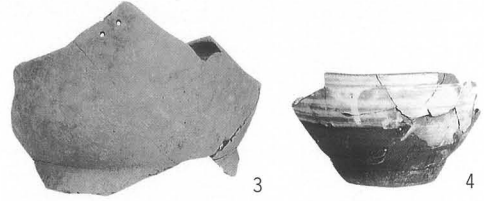
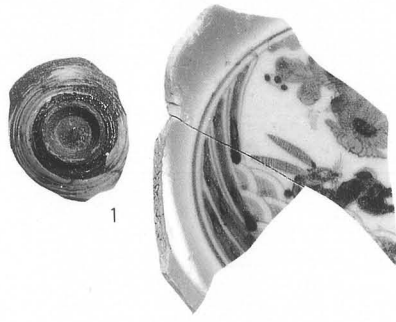


24



25

SK17 (1)・SK20 (2~12)・SK03 (13~25)



SU03 (1~4)・第1次面精査時 (5)・SK04 (6)

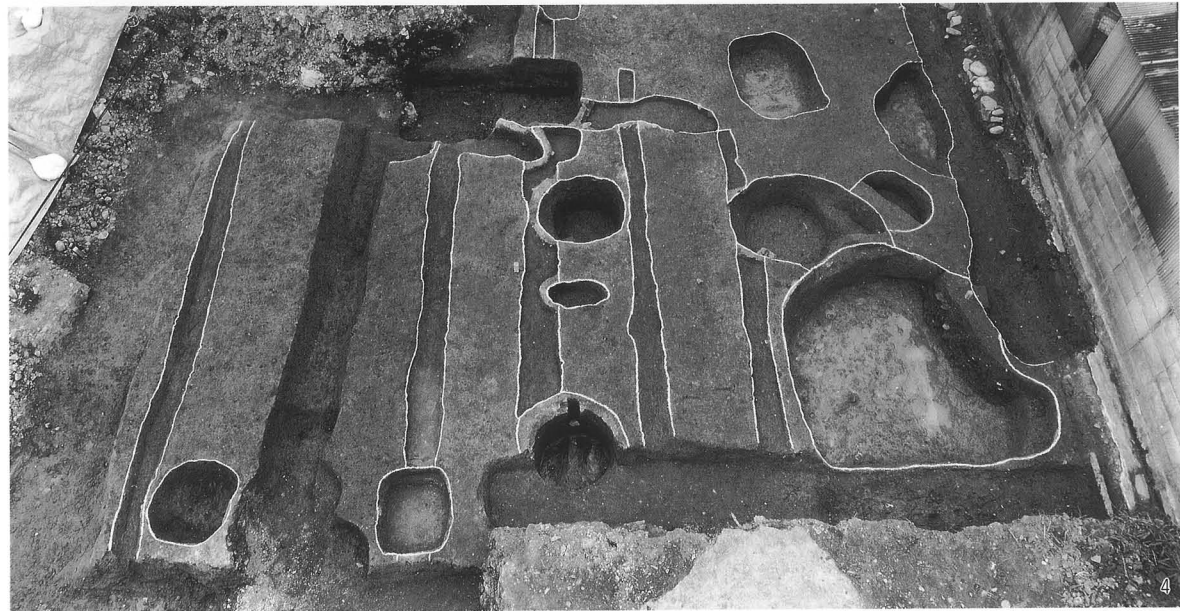
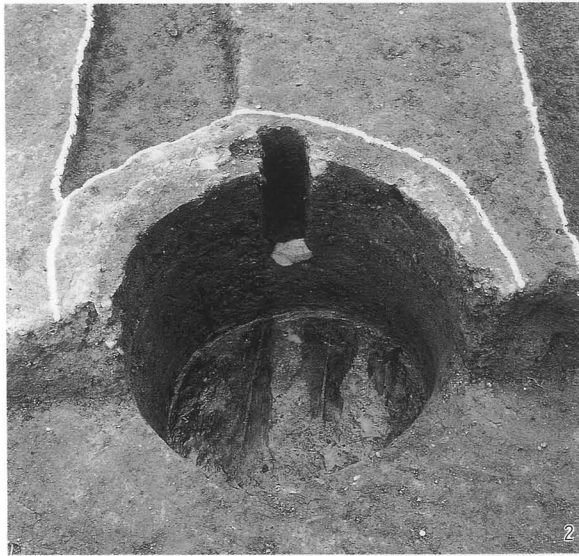
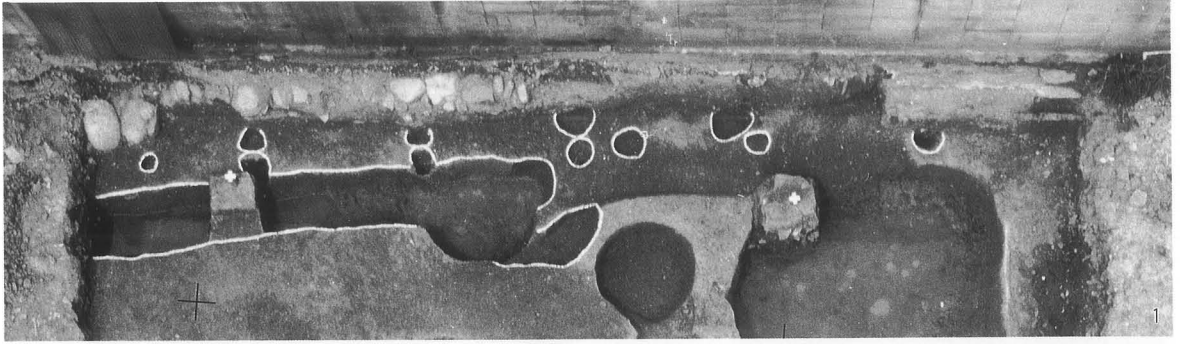




1 第86次調査B-11-2区 第2次面全景(東より)



2 第86次調査B-11-2区 第1次面全景(東より)



1 SA01・SD08 (垂直)  
3 SD06 (西より)

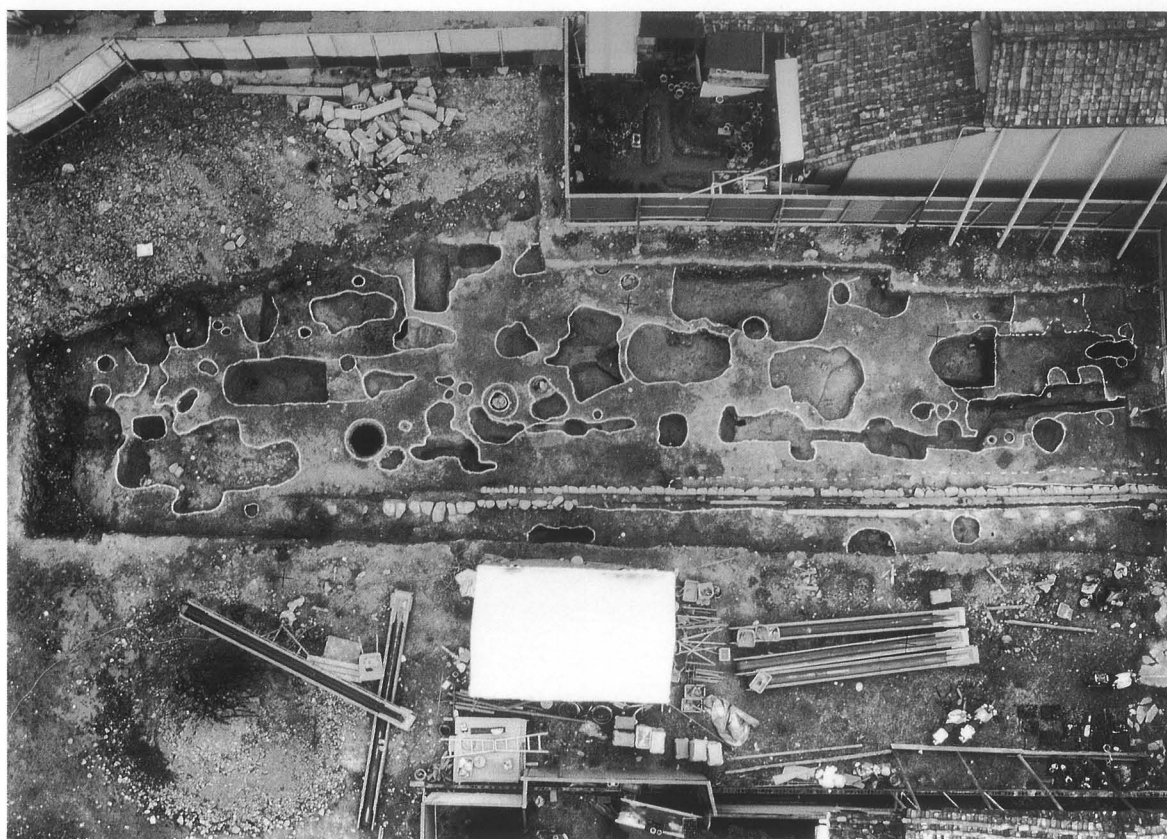
2 SU03 (東より)  
4 SX01~06 (東より)



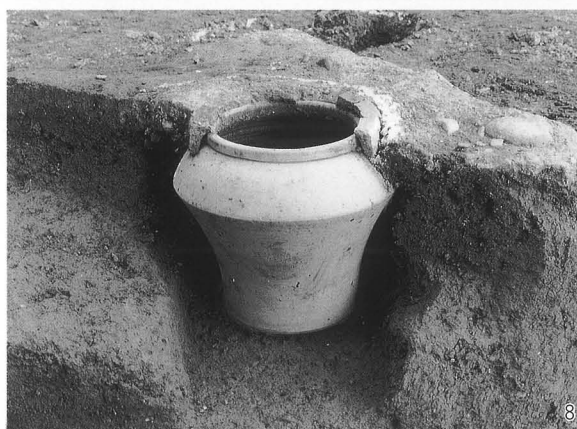
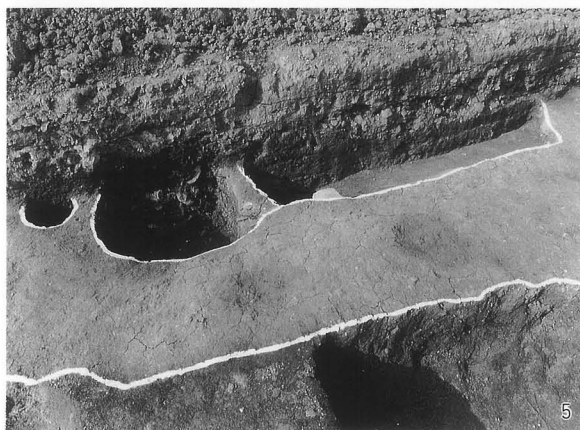
SK16 (1)・SK17 (2)・SD06 (4・5)・SK05 (3・6~8)・SK12 (9~12・14~16)・SX05 (13)



1 第86次調査B-12区 第2次面全景(垂直)

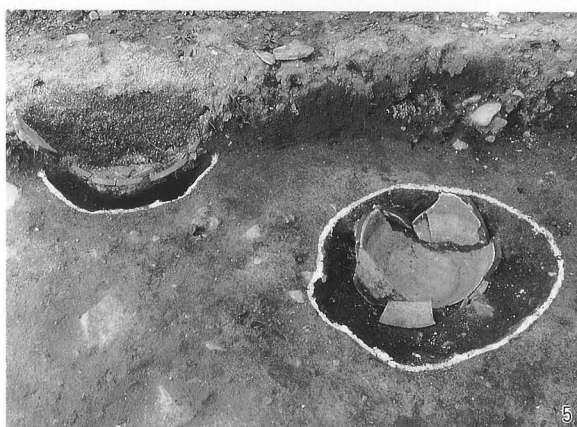
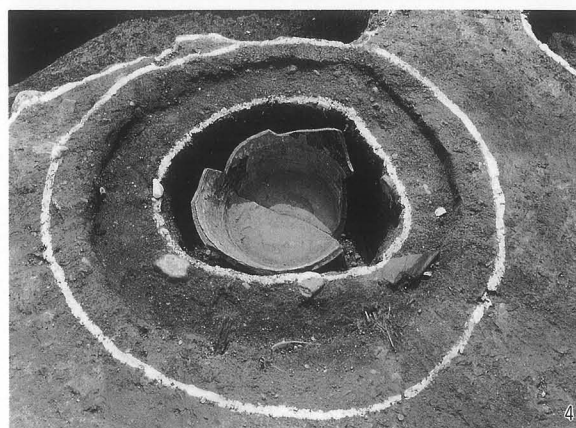


2 第86次調査B-12区 第1次面全景(垂直)



1 SV01 (西より)  
3 SE03 (北より)  
5 SK66 (南より)  
7 SE01 (北西より)

2 SE02 (北東より)  
4 SY01 (北より)  
6 SK132 (西より)  
8 SI04 (北より)

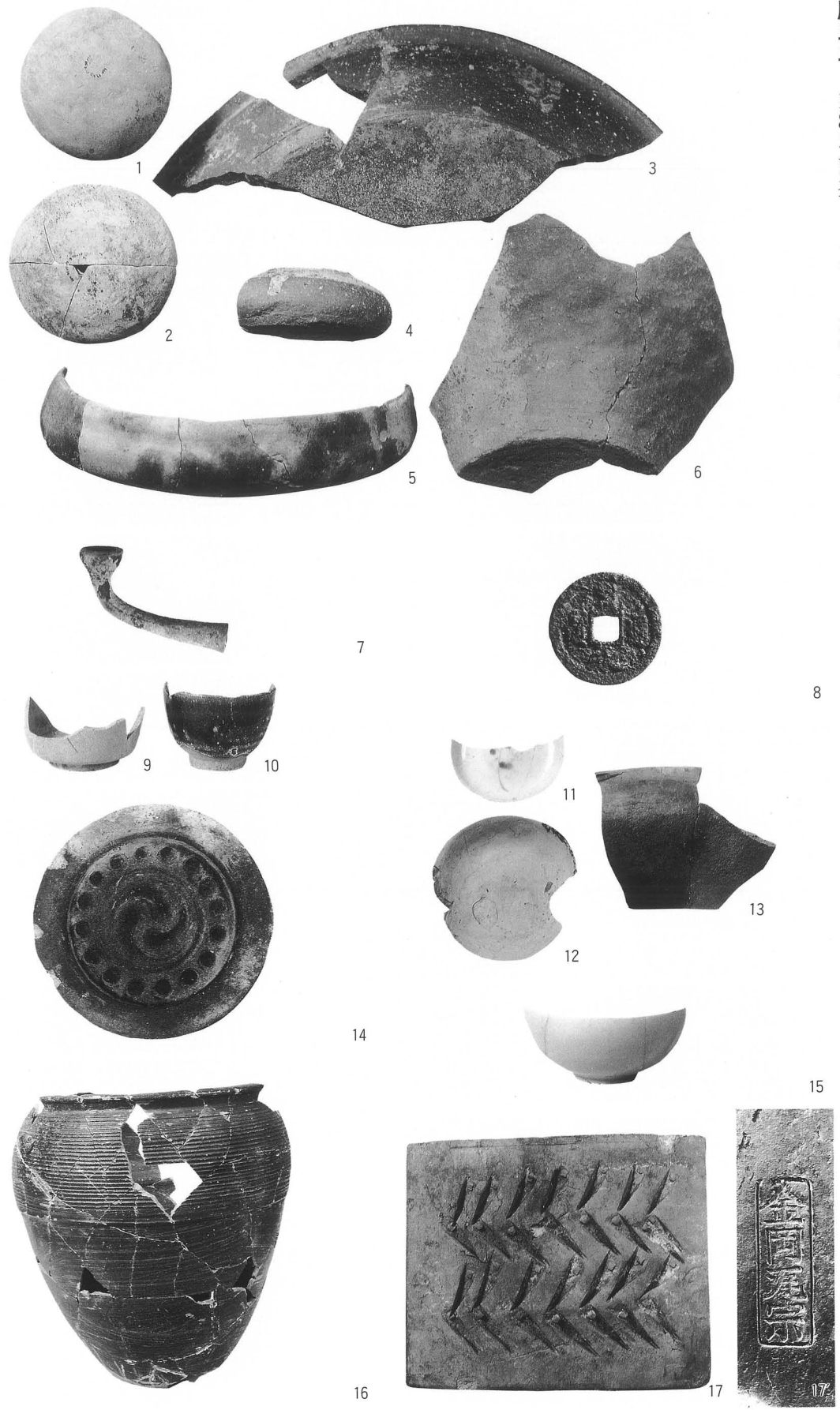


1 SI05 (北より)  
3 SU02 (北より)  
5 SW02・03 (南より)  
7 SK30 (西より)

2 SU01 (北より)  
4 SW01 (北より)  
6 SD01 (西より)  
8 SK39 (西より)



SP12 (1・2)・SV01 (3)・SE03 (4~7)・SE02 (8~14)・SY01 (15・16)・SK66 (17~25)

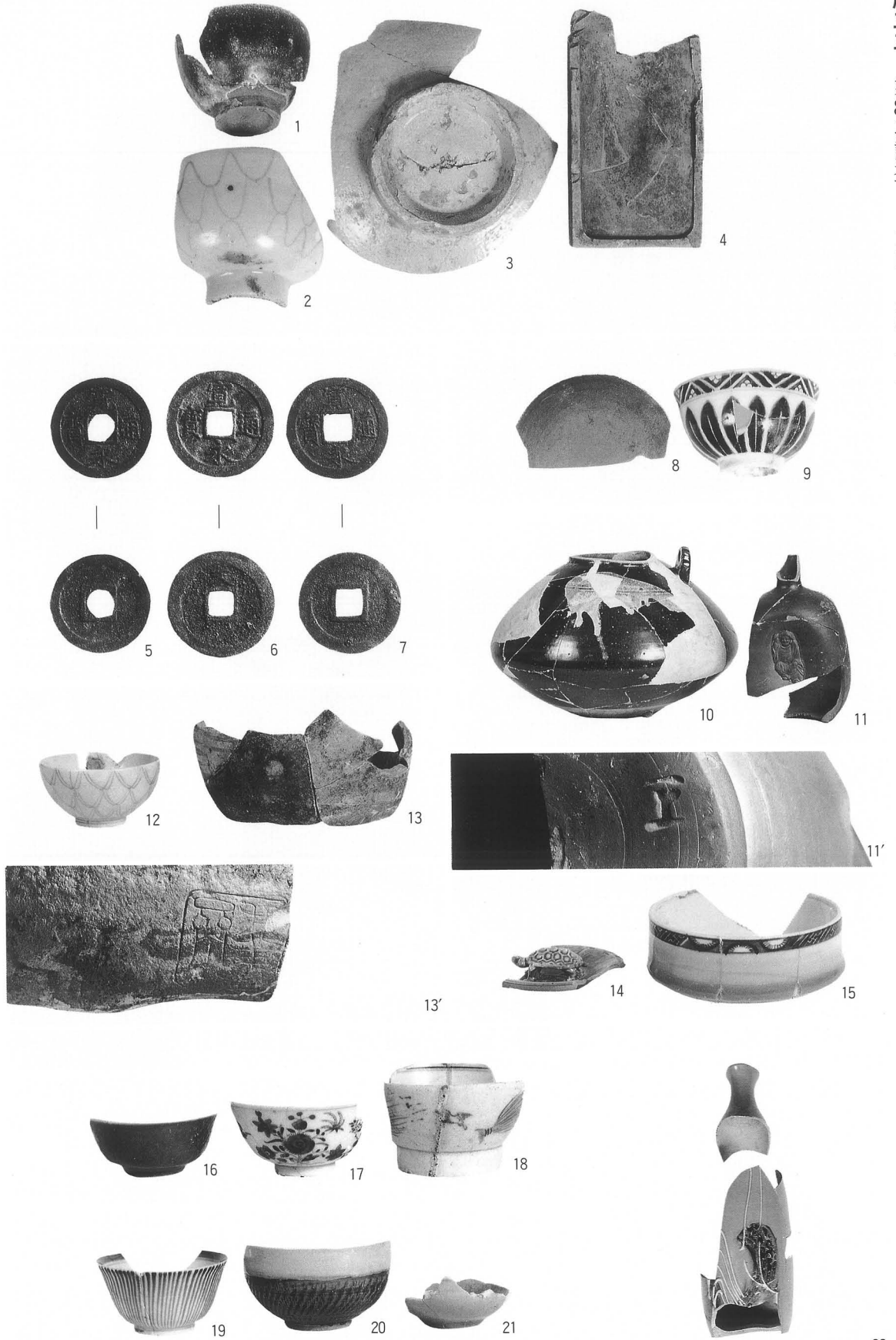


SK66 (1 ~ 8) ・ SK132 (9 ~ 14) ・ SK94 (15 ・ 16) ・ SE01 (17)





SI04 (1・2)・SI05掘形(3)・SI05(4・5)・SW01(6)・SW02(7)・SD01掘形(8)・SD01埋土(12)・SK02(9~11)・SK30(13~15)・SK39(16)



SK39 (1~7)・SK24 (8~11)・SK31 (12・13)・SK06 (14~22)



SK06 (1~10・13~15)・SK08 (12)・表採 (11)

## 報告書抄録

ふりがな	ありおかじょうせき・いたみごうちょういせき みやのまえちくしがいちさいかいはつにともなうはつくつちょうさほうこくしょ
書名	有岡城跡・伊丹郷町遺跡 宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書 VI
編著者名	藤井直正 川口宏海 前川 要 赤松和佳 小出匡子 渡辺晴香 佐藤由美 大石 真
編集機関	大手前女子大学史学研究所文化財調査室
所在地	兵庫県伊丹市稲野町二丁目二-二
発行年月日	西暦 1999年 8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡					
伊丹郷町遺跡 第51次調査	兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目地内	28207	61	34° 46' 45" ～ 34° 46' 46"	135° 25' 5"	635m ²	19870908 ～ 19880331	開発事業
伊丹郷町遺跡 第63次調査	兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目地内	28207	61	34° 46' 45" ～ 34° 46' 46"	135° 25' 7" ～ 135° 25' 8"	350m ²	19880729 ～ 19881031	開発事業
伊丹郷町遺跡 第78次調査	兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目地内	28207	61	34° 46' 45"	135° 25' 6"	24m ²	19890623 ～ 19890831	開発事業
伊丹郷町遺跡 第83次調査	兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目地内	28207	61	34° 46' 45"	135° 25' 7"	168.42m ²	19891014 ～ 19891130	開発事業
伊丹郷町遺跡 第86次調査	兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目地内	28207	61	34° 46' 45" ・ 34° 46' 45"	135° 25' 6" ・ 135° 25' 8"	539.83m ²	19900213 ～ 19900313	開発事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊丹郷町遺跡 第51次調査	町屋	中世・近世	礎石建物3、溝2、竈1、埋桶2、土坑11	土師質土器、陶磁器、瓦、銭貨	有岡城期の溝を確認することができた。
伊丹郷町遺跡 第63次調査	町屋	中世・近世	掘立柱建物2、礎石建物8、柵列1、溝1、井戸3、竈4、埋桶2、埋甕13、水琴窟2、胞衣壺遺構1、土坑15	土師師質土器、須恵器、陶磁器、瓦、銭貨、石製品、金属製品、木製品	
伊丹郷町遺跡 第78次調査	町屋	近世	溝2、埋桶2、土坑2	土師質土器、陶磁器、石製品、ガラス製品	
伊丹郷町遺跡 第83次調査	町屋	近世	礎石建物1、路地1、溝4、柵列1、竈3、埋桶5、埋甕1、胞衣壺遺構1、土坑12	土師質土器、陶磁器、瓦質土器、瓦	
伊丹郷町遺跡 第86次調査	町屋	中世・近世	掘立柱建物1、礎石建物3、柵列1、溝3、井戸4、竈1、埋桶6、埋甕2、水琴窟1 胞衣壺遺構2、土坑17、畝6	土師質土器、陶磁器、瓦質土器、瓦、銭貨、石製品、金属製品	

---

宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書

## 有岡城跡・伊丹郷町 VI

編集 伊丹市教育委員会 〒664-0898 伊丹市千僧1-1  
発行 TEL 0727-83-1234 (代表)  
大手前女子大学史学研究所  
〒664-0861 伊丹市稲野2-2-2 大手前女子短期大学内  
TEL 0727-70-6216 (直通)

平成11年 8 月31日

---

印刷・有限会社 真陽社  
京都市下京区油小路仏光寺上ル  
TEL 075-351-6034

---

